特攻会報

平成19年5月

第71号

〒105-0001　東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人　特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電　話　03(3432)1090
ＦＡＸ　03(3432)5567

編集人　飯田正能
発行人　栗原宏

第28回特攻隊戦没者合同慰霊祭

平成19年3月30日（金）12時～13時
於 靖國神社拝殿・本殿

式次第

国歌斉唱　（トランペット田櫓雅之）
修抜・献饌（サキソフォーン鈴木隆春）
祝詞奏上
祭文奏上　会長　山本　卓眞
献吟　一誠流　石橋一歌他
奉納　世田谷コールエーデ合唱団
演奏　指揮　本間　充
「さくら・千の風になって・赤とんぼ」
海ゆかば斉唱（トランペット・サキソフォーン吹奏）
昇殿参拝　参列者一同
（トランペット「国のしずめ」）

献吟　吟　石橋一歌
笛　逢坂竜信

昭和十九年十二月五日スリガオ海峡で戦死
大君の醜（しこ）の御盾となりし身は
靖國社頭の花と咲かなむ
第十八金剛隊　福山正通

昭和二十年一月五日ルパング島西方洋上で戦死
国のため尽す命を惜しまねど
唯気にかかる国のゆくすえ
石腸隊　高石邦雄

☆　☆

3月30日（金）正午より靖國神社において、当協会恒例の第28回特攻隊戦没者合同慰霊祭が厳粛に斎行され、御遺族51名を始め来賓、戦友、一般会員合わせて290余名が参集し、英霊奉慰の誠を捧げた。

この日、靖國の宮居の桜は、20日の開花宣言から10日余り、この慰霊祭に合わせたかのように、満開の壮観を醸して欣（ごん）求浄土（ぐじょうど）の相を現すかに思われた。古来、桜は日本人の心の花である。サは早苗・早乙女など神聖な音であり、クラは神霊の依代（よりしろ）、つまり、神の座を意味する。靖國の桜は、特攻勇士五千八百余柱を始め二百四十六万六千余柱の御霊（みたま）が依り給う御神木なのである。

最近、多くの人々の共感を呼び、静かなブームをもたらしている『千の風

目次

第28回特攻隊戦没者合同慰霊祭 ……1
奉祝「建国記念の日」……4
言霊の書画「今甦る若者決死の声」展…7
ロサンゼルス・オリンピックの英雄
西中尉　硫黄島で玉砕　戦車第二十六
聯隊長西中佐 ……10
卓話　教育が心配 ……20
搾取される中国農民 ……23
水上特攻「大和」生き残り体験談―
熊野淵龍寺住職中道豊洲氏のお話― 29
郷土の先輩軍神岩佐海軍中佐・義烈
空挺隊の奥山隊長 ……34
誠第37飛行隊長小林敏男大尉遺詠集
について ……35
或る学鷲の生涯 ……38
フィリピン慰霊巡拝旅行（続） ……39
ある特攻戦没者の遺族からの手紙 …50
平和へのみちしるべ（抄②）……51
「陸軍挺進部隊外史」の自衛隊空挺隊
員の読後感 ……54
女高生の手紙を抱いて敵艦に体当たり攻撃
した堀元官一命の実状判明・第一報 ……57
碑は語る特攻隊① ……58
都城・はやて慰霊祭報告 ……64
フィリピン・ルソン島・マバラカットの
神風特攻隊慰霊祭への参加について…64
理事会・評議員会報告 ……65
事務局より ……67

祭文

本日、遺族、戦友、関係者一同靖國神社の社頭に相集い、第二十八回陸海軍特攻隊合同慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで在天特攻烈士の御霊に申し上げます。

皆様方は六十有余年前、大東亜戦争の戦局が非勢の度を加えつつあった時に、美しい我が国土と同胞を敵手から護るべく、各地で、空に、海に、陸に、敢然として、身を挺して散華されました。この壮挙は、永年に亘って我が国の歴史と伝統の上に培われてきた日本人の心が、国家存亡の危機に際して祖国を守るという一念に凝集、発露されたものであります。

このことは、子々孫々に、永久に語り継いで行かなければなりません。これから益々複雑多様化して行く国際情勢下にあって、我が国が矜持を保ち毅然として生き抜いて行くためには、我々が決して喪ってはならないものであるからであります。

大阪学芸大学の職員学生有志から成るボランティア団体「日本人の心を伝える会」は、二年がかりでCDの売上益で特攻勇士の像を作製して、逐次全国の護国神社に奉納していくことを運動の究極の目的としていることを知って、協会は全面的に協力することにして、昨年三月からCD発売に踏み切り、昨年中に約三千枚を売り上げました。

その結果、来る四月十三日に、福井県と鹿児島県の護国神社に、それぞれ特攻勇士の像が奉納され、除幕式が執り行われる運びに至りました。誠に喜びに堪えないところであります。

翻って、人としての行動規範が欠除していると思わざるを得ない事件が、様々な分野で続発する最近の世相は、履き違えられた自由と人権の思想が跋扈するに至った、敗戦の禍根の深さを示すものとして、憂慮に堪えず、暗然正に肌に粟を生ずる想いが致します。

然しながら一方では、永らく手が付けられなかった教育基本法が改正され、防衛庁は省に昇格致しました。教育と国防という国家経略の基幹部分の見直しが始まったことは、「日本人の心を伝える会」に見られるような動きや靖國神社に参拝する若者が著しく多くなってきたこと等と相まって、心強さを覚えるところであります。

更には、昨年九月に悠仁親王殿下の御生誕によって、国論の二分化が回避されたことは慶賀の至りであります。この機会に皇統問題に関しては、確固とした国民的合意が形成されて、我が国の伝統と文化の基である皇室が彌栄えられますことを、心から祈念申し上げる次第であります。

在天の特攻烈士の皆様、私共は東京裁判史観の呪縛からの脱却と憲法の改正が、一日も早く実現することを希い、そのためには、皆様方を始めとする全戦没者に対する慰霊、顕彰、追悼の諸行事が遺漏なく次世代へ継承されることに全力を傾注して参る所存であります。

どうか私共を御照覧の上、お導き下さい。そして尚一層の御加護を賜りますように、心からお願い申し上げ、祭文奏上を終わります。

安らかにお眠り下さい。

平成十九年三月三十日

財団法人
特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
会長　山本　卓眞

『あゝ特攻』を制作致しました。CDの売上益で特攻勇士の像を作製して、逐次全国の護国神社に奉納していくことを運動の究極の目的としていることを知って、協会は全面的に協力することにして、昨年三月からCD発売に踏み切り、昨年中に約三千枚を売り上げました。

その結果、来る四月十三日に、福井県と鹿児島県の護国神社に、それぞれ特攻勇士の像が奉納され、除幕式が執り行われる運びに至りました。誠に喜びに堪えないところであります。

翻って、人としての行動規範が欠除していると思わざるを得ない事件が、様々な分野で続発する最近の世相は、履き違えられた自由と人権の思想が跋扈するに至った、敗戦の禍根の深さを示すものとして、憂慮に堪えず、暗然正に肌に粟を生ずる想いが致します。

然しながら一方では、永らく手が付けられなかった教育基本法が改正され、防衛庁は省に昇格致しました。教育と国防という国家経略の基幹部分の見直しが始まったことは、「日本人の心を伝える会」に見られるような動きや靖國神社に参拝する若者が著しく多くなってきたこと等と相まって、心強さを覚えるところであります。

更には、昨年九月に悠仁親王殿下の御生誕によって、国論の二分化が回避されたことは慶賀の至りであります。この機会に皇統問題に関しては、確固とした国民的合意が形成されて、我が国の伝統と文化の基である皇室が彌栄えられますことを、心から祈念申し上げる次第であります。

在天の特攻烈士の皆様、私共は東京裁判史観の呪縛からの脱却と憲法の改正が、一日も早く実現することを希い、そのためには、皆様方を始めとする全戦没者に対する慰霊、顕彰、追悼の諸行事が遺漏なく次世代へ継承されることに全力を傾注して参る所存であります。

どうか私共を御照覧の上、お導き下さい。そして尚一層の御加護を賜りますように、心からお願い申し上げ、祭文奏上を終わります。

安らかにお眠り下さい。

平成十九年三月三十日

財団法人
特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
会長　山本　卓眞

になって』という歌がある。死者が書いた詩、死者から生者への励ましのメッセージとも言われる。

芥川賞作家で作詞・作曲も手掛ける新井満が、7年前に作者不明の英詩から訳して曲を付け、オペラ歌手の秋川雅史や中島啓江らが歌って以来、不思議な広がりを見せている歌である。その歌詞（後掲）によれば、「私のお墓の前で泣かないでください／そこに私はいません」「千の風になって／あの大きな空を／吹きわたっています」と。愛する人、大切な人を亡くした時、その人は、風や光になって空を駆け、地に降り注ぎ、星になってあなたを見守っている、その人は、いつもあなたと共にある、だから、嘆かないで欲しい、と呼び掛けている。美しい歌である。心温まる曲である。悲しみを越えて生きる勇気を与えてくれる「命の歌」とも言われている。正しく、英霊の皆様からのメッセージとも受け止めたい。だが、今日ばかりは、この靖國の英霊達は皆、満開の桜の梢に集まって再会を喜んでおられることであろう。「…離れ離れに散ろうとも／花の都の靖國神社／春の梢に咲いて会おう」との誓いを果たしておられることであろう。

慰霊祭はトランペットの伴奏による国歌斉唱に始まり、修抜・献饌・祝詞

奏上の神儀に続き、山本会長が祭文を奏上、英霊顕彰の更なる推進と永代継承を誓い、我が国内外の忌まわしい現状を憂えつつも、教育と国防という国家経略の基幹を確立すべく、日夜努力を傾倒すると誓った。

献吟の声は、朗々として神前に木霊し、惻々として胸を打つ。世田谷コールエーデ合唱団による献歌（さくら、千の風になって、赤とんぼ）、切々として胸に迫り、トランペットの「海ゆかば」また、寥々と響き、一同これに唱和する。

次いで、参列者全員昇殿参拝をして滞りなく慰霊祭を終え、参集殿を退出すれば、そこは桜花爛漫の神園、参拝の群衆に満ち溢れており、遊就館前の「特攻勇士之像」にも献花され、大勢の人々が碑前に佇んで祈りを捧げる姿が見られた。

平成18年度年次総会及び懇親会

平成19年3月30日（金）13時30分～
於アルカディア市ヶ谷（私学会館）

総　会　13時30分～14時

会長挨拶　会　長　山本　卓眞
会務報告　理事長　菅原　道熙

懇親会　14時～16時

来賓紹介　理事長　菅原　道熙
懇談会食
閉会の辞　事務局長　栗原　宏

◇　◇　◇

慰霊祭終了後、アルカディア市ヶ谷（私学会館）に移動し、同会館3階「富士の間」において、総会及び懇親会が開催された。

総会では、まず山本会長は挨拶の中で、本日の慰霊祭における奉納演奏で合唱された「千の風になって」の曲に触れて、この歌は、キリスト教会の歌の一つと思われるが、キリスト教らしからぬ歌である。これは我が国古来の神道の精神を表したものであるように思われる。人は死して神となり、自然に還って、永遠に生き、現世の人々を見守ってくれるのである。これは正しく特攻勇士の歌とも言える。即ち、日本民族の心・死生観を表現した歌ではないかと思われる。このような歌を歌い継ぎ、そして、英霊に対する慰霊の心を継承していかなければならない、と述べられた。

山本会長挨拶

次いで、菅原理事長から平成18年度の事業報告が、栗原事務局長からは、平成18年度の収支計算書について説明があり、いずれも承認された。

なお、藤田幸生理事から、「特攻勇士之像」の護国神社への奉納の件について、補足説明がなされた。

シェフタル助教授らから盾の贈呈

次いで、懇親会に移り、菅原理事長から来賓の紹介がなされたが、特筆すべきは、静岡大学情報学部の米国人M・G・シェフタル助教授と、同助教授の『散華』（BLOSSOMS IN THE WIND～HUMAN LEGACIES OF THE KAMIKAZA～）と題する特攻隊に関する著作に感動した米国人の友人4名と共に出席され、このような素晴らしい勇気を持った元日本軍人の同志とパーティでご一緒できることは、大変嬉しく、光栄に思います、とのメッセージと盾を協会に贈られたことである。英霊達の特攻精神が米国人にまで感動を与えていることは、大変素晴らしいことである。

会場では再び、世田谷コールエーデ合唱団の皆さんによる「千の風になって」（歌詞・音譜は63頁に掲載）の合唱が行われ、参加者一同に深い感銘を与えた。

（飯田正能記）

贈呈された盾

奉祝「建国記念の日」

「国民の祝日に関する法律」（昭和二三年七月二〇日法律第一七八号）第二条［祝日の内容］第三号には、建国記念の日は政令で定める日（二月十一日）とあり、この日は「建国をしのび、国を愛する心を養う」と定められている。同号は、昭和四一年六月二五日法律第八六号により改正されたものであり、その附則第2項で、改正後の第二条に規定する建国記念の日となる日を定める政令は、この法律の公布の日から起算して六月以内に制定するものとするとされ、それは、昭和四一年政令第三七六号により「建国記念の日は、二月十一日とする」と定められたのである。また、それに先立ち、改正法律附則第三項では、「内閣総理大臣は、改正後の第二条に規定する建国記念の日となる日を定める政令の制定の立案をしようとするときは、建国記念日審議会に諮問し、その答申を尊重しなければならない。」とあり、同審議会の答申に基づき、民主的な手続を経て定められたものである。当時その制定に当たっては、社会党や共産党などから日本国憲法が施行された五月三日こそ建国記念日にふさわしいなどと主張されたが、当時の世論調査でも紀元節の復活を望む国民は、実に九割にのぼったという。その紀元節に関し、我が国最古の正史である「日本書紀」には、初代神武天皇が橿原宮で即位された日を「辛酉年の春正月の庚辰の朔に、天皇、橿原宮に即帝位す。是歳を天皇の元年とす」と記している。これを明治時代になって太陽暦に換算して算出されたのが、二月十一日という日付けである。そもそも国の成り立ちにおいて、正確にその日を特定できるのは、アメリカ合衆国のように歴史の浅い国に限られるのであって、日本のように、歴史が古く、しかも自ずからにして国家が形成されたような国で、その日を科学的に特定することは不可能に近い。我が国においては、最古の正史である日本書紀の記述によって建国の日を定め、苦難と栄光に満ちた建国の偉業を偲び、肇国以来今日まで、連綿と百二十五代、絶えることなく天皇を中心に栄えてきた、世界に比類のない我が国体と我が国の歴史や文化や伝統に思いをいたし、これが継承・発展を祈念することに、建国記念日の意義があると考えるのである。

そして、いかなる国においても、自国の建国や独立記念日は、国を挙げて盛大に行われている。しかるに、我が国の現状はどうか。本来、建国記念の式典は、首相出席の上、政府が主催して行うべきであるところ、そのような動きはなく、建国記念の日が制定された昭和四一年以降、「建国記念の日奉祝会」という民間団体が主催する形で開催され、その後民間団体の要望により、ようやく昭和五三年になって総理府の後援が実現し、次いで昭和五六年に文部省、五八年に自治省も後援に加わったが、政府主催は実現せず、昭和五九年暮れに、時の政府（中曽根首相）は、首相出席の条件として、①式典プログラムから「神武建国」を削除すること、②「天皇陛下万歳」を「日本国万歳」に変更すること、の二つの条件を提示してきた。元々建国記念の日は、初代神武天皇建国の偉業をお偲びするのが目的であって、これを外せというのは、式典の存在意義そのものを否定するものであり、かつ天皇陛下万歳を否定することは、建国以来百二十数代に及ぶ皇位の尊厳を軽んずるもので、到底承服できないとして、民間の「建国記念の日奉祝運営委員会」では、この政府要求を一蹴したため、政府は、「建国記念の日を祝う会」というお手盛りの組織を作り、昭和六三年から同会主催、政府後援による「神武建国」「天皇陛下万歳」抜きの「『建国記念の日』を祝う国民式典」を開催することになった。以来、同式典と、「神武建

国」「天皇陛下万歳」を守る民間団体「日本の建国を祝う会」主催の「建国記念の日奉祝中央式典」とが別個に開催される異常事態となった。そして、政府後援の国民式典の方は、役員の高齢化を理由に、平成一七年に式典が中止となり（コンサートのみ挙行）、平成一八年から一切の行事が取り止めとなった。

一方、民間団体「日本の建国を祝う会」（会長・小田村四郎元拓殖大学総長）主催による「建国記念日奉祝中央式典」は、今年も二月十一日の午後、明治神宮会館において、超満員の千数百名が参列して盛大に開催され、若者や女性の参加も多く熱気に溢れ、在日外国大使・総領事・参事官らも多数出席して、祝辞を述べるなどされて国際色にも彩られ、厳粛な中にも祝賀の雰囲気に満ちていた。そして、建国記念日奉祝にふさわしく、参列者一同で国歌斉唱のみならず、橿原神宮の遥拝と「紀元節の歌」を斉唱し、別掲の「決議」を採択したあと、日本会議会長・三好達元最高裁長官（海兵75期）の音頭で「天皇陛下万歳」を三唱して第一部の式典を終わった。

この日午前中は、原宿表参道周辺において、国學院大学・国士館大学・駒澤大学・専修大学・大東文化大学・拓殖大学・千葉商科大学・帝京大学・明治学院大学・立正大学の各吹奏楽部による奉祝パレードが行われたが、そのマーチングコンテストの結果、駒澤大学チームが最優秀賞に選ばれ、奉祝行事の第二部で表彰式とその見事な演奏が披露された。

次いで、島根県浜田市の伝統芸能岩見神楽の「岩戸（いわと）」と「大蛇（おろち）」が上演され、神々しくも勇壮なその演舞に一同魅了された。

（飯田正能記）

◆決　議◆

本日ここに平成十九年、皇紀二千六百六十七年の建国記念の日を迎えるにあたり、我々は神武創業のいにしえを偲び、その精神を守り伝えてきた先人たちの努力に対し、心からの敬意と感謝を捧げるものである。

また、昨秋の悠仁親王殿下の御生誕を心よりお祝いし、お健やかな御成長をお祈り申し上げる次第である。この御慶事によって、日本人はあらためて二千年余にわたる皇位継承の伝統の重みを認識するところとなり、政府による女系天皇導入を柱とした拙速な皇室典範改定の動きも回避されることとなった。今後は、皇室制度全般の整備に向け、伝統に立脚した上で慎重に議論を深めていくことが望まれる。

さて、我が国を取り巻く内外の諸情勢は依然として厳しい情況にある。外にあっては、北朝鮮による核実験をはじめ、中国の際限ない軍備拡張による軍事的脅威の増大や国際テロ活動の続発、内にあっては、少子高齢化が進行する中、家庭や学校での命を軽んずる陰惨な事件の多発など、モラルや共同体意識の崩壊がもたらした社会の現状は、日本国の将来に大きな影を落としている。そうした中、昨年十二月、占領下に制定され、戦後教育を規定してきた教育基本法が約六十年ぶりに全面改正され、愛国心や道徳心の涵養、公共の精神や伝統文化の尊重、家庭教育の大切さ、法令に基づく教育行政の推進など、戦後久しく軽視されてきた教育の理念が堂々と法文化された。これにより、荒廃した教育現場の抜本的改善に向けた大きな橋頭堡が築かれたといっても過言ではない。

しかしながら、改革は緒についたばかりである。首相の靖國神社参拝の定着をはじめ、大国の覇権的外交に対する「主張する外交」の展開、近隣諸国の軍備増強に対する安全保障政策の整備充実、歴史文化の伝統を伝える国民教育の推進など、新政権の取り組むべき課題は多い。時恰も、安倍内閣は、年頭にあたり、憲法改正に向けての決意を更めて表明した。現行憲法とともに戦後体制の枠組みとなってきた教育基本法が改正された今、天皇陛下を中心に仰ぎ、伝統と文化に由来する国柄を体現した憲法を目指して、その改正に一刻も早く着手すべきである。同時に、我々国民も、戦後失われつつある美しい日本の心を取り戻すための歩みを緩めてはならない。

本年は、昭和天皇の御誕生日にあたる四月二十九日を「昭和の日」として迎えるはじめての年である。この意義深い年にあたり、我々は皇室と国民が一体となって国の繁栄を築いてきた輝かしい歴史に想いを致し、神武創業のいにしえを国民こぞって偲び讃えるべき建国記念の日に、奉祝式典が政府主催により厳粛かつ盛大に実施されることを強く要望するとともに、誇りある日本の国づくりに向けて、国民各位とともに力強く歩んでゆくことを誓うものである。

本日、「建国記念の日奉祝中央式典」に際し、右、決議する。

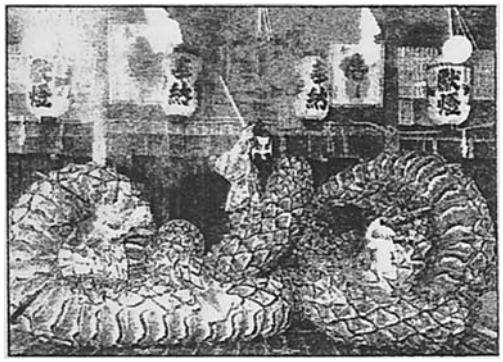
平成十九年二月十一日

日本の建国を祝う会・建国記念の日奉祝中央式典

奉祝上演　石見神楽（いわみかぐら）演目

「岩　戸」（いわと）

「大　蛇」（おろち）



建国記念の日に思う

田中　賢一

安倍首相は美しい国を作るという。その方針は追々具体化するであろうが、私は美しい社会と美しい国の両面で考えて見る必要があると思う。犯罪がない、公徳心、敬神崇祖の念等は美しい社会の要素といえよう。教育勅語で示された「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭倹己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ」などの徳目は美しい社会の範疇に入る。

しからば美しい国とは何かというと我が国の歴史を正しく認識し、それを維持拡充することにあると思う。それがなんたることか、義務教育で国史を教えず、高校で世界史が必修科目になっており、日本歴史は選択科目で教えなくてもよいことになっているのを、私は最近になって知った。もっとも日本弱体化政策による教育基本法にもとづき、教育された世代の者が教員になっている現在、教えようにも教えられないのが現状かも知れない。

教員と言えば、学校の式典で国歌の伴奏をせよと校長から命ぜられて従わず処罰された音楽教師が裁判を起こし、最高裁までゆき、敗訴になったと報道され、国史教育どころではないと思った。幸いに教育基本法は改正され、国を愛する態度の字句が加えられたが、それにもとづく法律の制定や施策がなければ画餅に帰してしまう。

建国記念の日という標題を掲げながら前置きが長くなったが本論に入る。

我が美しい国について山河風物は別とし、人文だけに限れば、時代を追って沢山あるが、最大のものは建国のことであろう。第一代神武天皇が橿原で即位なさったことである。美しいか美しくないかは多分に感情的な要素がある。そこで戦前の紀元節の歌をまず掲げてみよう。

紀元節　　高崎正風　作詞
　　伊沢修二　作曲

一、雲にそびゆる高千穂の
　高峰おろしに草も木も
　なびきふしけん大御世を
　仰ぐ今日こそ楽しけれ
二、海原なせる埴安の
　池の面よりなおひろき
　恵みの波に浴みし世を
　仰ぐ今日こそ楽しけれ
三、天津日嗣の高みくら
　千代よろず代に動ぎなき
　もとい定めしそのかみを
　仰ぐ今日こそ楽しけれ
四、空に輝く日の本の
　よろずの国にたぐいなき
　国のみはしら樹てし世を
　仰ぐ今日こそ楽しけれ

戦後の人のための歌詞の解説は省略するが、蘊蓄深い歌詞であることはお判りいただけると思う。

今を去る二六六七年の昔、我が皇室の遠い御先祖が御即位なさって、爾来綿々と国柄が続いていることを、美しいと言わずして何であろうか。

隣国支那の王朝は興亡恒なく長くても三百年しか続かなかった。ヨーロッパの国々も似たようなものである。安倍首相の美しい国とは何をいうのか、この史実を逃しては空虚のものといわざるを得ない。

政府は二月十一日を単に休日とするだけでなく、祝典を主催すべきである。昭和十五年は皇紀二六〇〇年になるので、二月十一日に国を挙げて祝った。当時私は、前年末蒙彊の包頭城外の戦闘で負傷し、北京まで後送され、北京第二病院に入院中だったが、「紀元二千六百年」の歌が朝から放送されていた。

一、金鵄かがやく日本の
　栄ある光身にうけて
　いまこそ祝えこの朝
　紀元は二千六百年
　ああ一億の胸は鳴る
二、歓喜溢るるこの土を
　しっかと吾ら踏みしめて
　はるかに仰ぐ大御言
　紀元は二千六百年
三、ああ肇国の雲青し
　荒ぶ世界にただ一つ
　揺がぬ御代に生い立ちし
　感謝は清き火と燃えて
　紀元は二千六百年
　ああ報国の血は勇む

この歌詞初めて読んだ戦後の人も、躍動感を覚えるであろう。それが美しい国というものだ。

また首題とはなれるが、現在は政府で決めた休日が無闇と多い。加えて役所も学校も郵便局銀行も皆土曜日が休みである。休みがないのは商店と宅配業者だけである。日本人は働き過ぎるからそうなったのだという。ゆとり教育のように、そのうちボロが出やぁしないかと危ぶむ。

戦前は国で決めた祝日と祭日があった。祝日は三大節と称し、元旦、紀元節、天長節だった。後に明治節も加わり四大節と言われた。祭日には春秋の皇霊祭、神嘗祭、新嘗祭等があった。小学校では祝日には登校し、校長先生の奉読する教育勅語を低頭して承り、奉祝の歌を斉唱し、紅白の饅頭を頂いて帰った。祭日は登校しなくてもよかった。祝祭日には戸ごとに日の丸を揚げた。敗戦により占額軍に強制されなかったら、あの麗しい風習は存続していただろうか。ふとそんなことを思いめぐらすが、年寄のひがごとかも知れない。

言霊の書画
「今甦る若者決死の声」展

1月29日～2月3日、東京都中央区日本橋・高島屋の南通りにある画商「壺中居」3階ホールで、鈴木利男氏作「今甦る若者決死の声」展が開催された。新聞記事に「先の大戦で戦死した特攻兵士らの辞世を題材にした書画展、特攻兵士らが故郷の家族らに宛てた言葉を独特の書体と画で表現したレクイエムだ」とあり、拓殖大学日本文化研究所の井尻千男所長の批評として「わが国が極限状態にあったとき、日本語が白熱しつつ純度をまして言霊になったとでもいうのであろうか。不思議な感動を覚えた。特攻兵士たちの言霊は、万葉集がそうであったように千年後の日本人たちの魂を揺さぶることになるだろうと確信した」とあったので、早速参観に出掛けた。

画廊の入口でまず惹き付けられたのは、ショーウインドーに掛けられた代表作・硫黄島戦で玉砕された栗林忠道軍司令官の遺詠「国の為重きつとめを果し得で矢弾尽き果て散るぞ悲しき」の書と、硫黄島の上空に燃え上がった巨大な炎とも見え、太陽とも見える深紅の塊りの絵を見た途端、強い感動というか、衝撃を受けた。これは、愛する祖国日本と父母や家族達を、身を捨てて断じて守ろうとした栗林軍司令官を始め2万余の戦没兵士たちの魂の叫びであり、言霊ではないかと感じた。

鈴木利男氏は、大正13年5月東京の生まれ、82歳になられる。昭和19年9月横浜国大建築科を繰り上げ卒業して海軍飛行機整備予備学生として厚木航空隊に入隊、翌20年4月小松海軍航空隊予科練生教官、同年6月海軍少尉任官、九州海軍燃料廠勤務、石炭液化開発業務に従事、戦後昭和28年㈲鈴木画房創立、次いで昭和39年、総合プロデュース会社の㈱エスデージーを創立、平成10年同社を退任されてからは、趣味として絵画、書道に専念しておられるが、今もなお、小松海軍航空隊勤務当時、整備担当教官として予科練生を教育し、特攻隊員として送り出した時の思いが脳裏に焼き付いていて離れず、鎮魂・慰霊の思いを込めて筆を執ったとのことである。

展示されている30数点の書は、いずれも靖國神社編「英霊の言乃葉」より選択し、その心情や情景を描き出した絵が添えられているが、特攻隊勇士のもの、中国戦線で、フィリピン・ニューギニア・南洋群島・硫黄島・沖縄等の南方戦線で戦死、戦病死された方々あるいは、戦犯収容所で法務死された方々の父母・兄弟・妻子へ宛てた手紙や和歌など、最後の決意や別れの言葉の数々で、その麗しい祖国愛・優しい家族愛の心情には胸を打たれる。

そして、作者の英霊に捧げる次の言葉「供華」にも深い感銘を受けた。

「祖国の危急、存亡のとき　死を賭して斗った先輩、同輩に捧ぐ
　坦々としてゆるぎない　無私、無心の境地です。

誰をも憎まず、怨まず、その言霊から発する、深いひびきは毅然として、死を克服しています。

そしてその瞬間、素晴らしい自己発見をしています。

そうです。何千年にも亘る我祖先たちの伝統、歴史が生み出した『大和魂』そのものです。

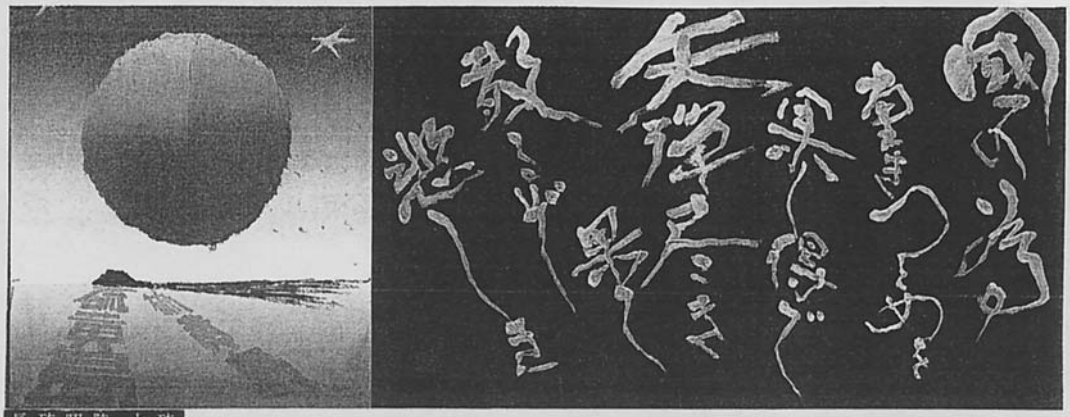
耳を澄ませばその息づかいが聞こえてきます。

日本の新しい『いのち』への子守唄・・・」

紙面の都合により、その一部しか掲載できず、また、カラー写真でないのが残念であるが、展示された書画のうちの一部を次に掲載させて頂いた。

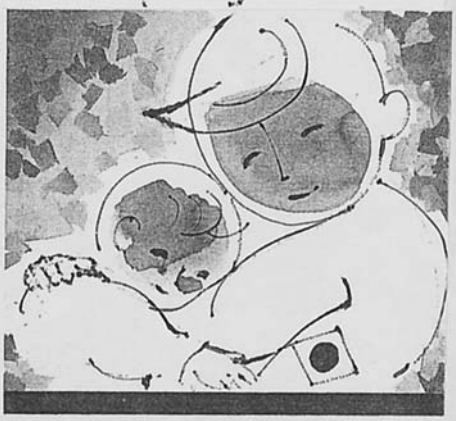
（飯田正能　記）

鈴木利男氏　牛島満中将の遺詠の前にて



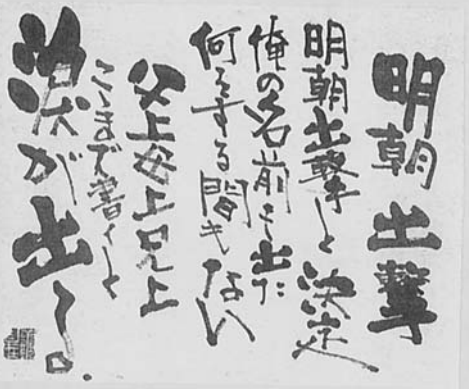
硫黄島栗林兵団長より
大本営宛、最後の電報
陸軍大将　栗林忠道命
昭和二十年三月十七日
硫黄島にて玉砕
長野県埴科郡西條村出身

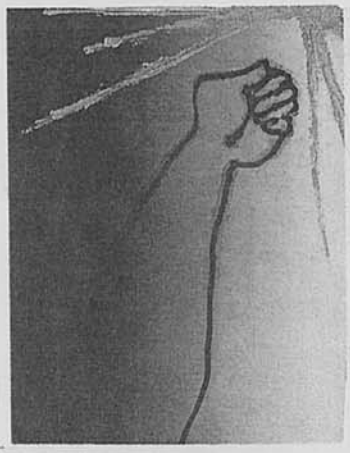
遺詠
陸軍憲兵曹長　谷温命
昭和十五年六月十六日
広東野戦病院にて戦病死
岡山県出身　二十九才



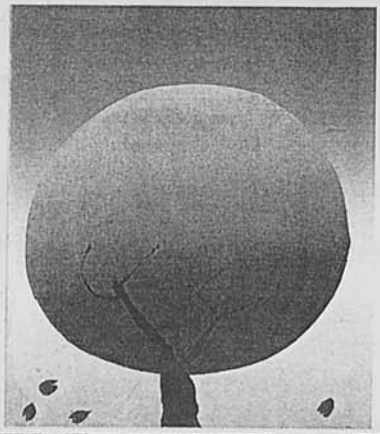
遺詠
陸軍軍曹　戸塚昇命
昭和十九年一月二十四日
中華民国湖南省来陽県
にて戦死
静岡県出身　二十四才

明朝出撃
海軍中尉　鹿野茂命
昭和二十年四月二十八日
沖縄方面にて戦死
中央大学
海軍一期飛行科予備生徒
茨城県出身　二十二才



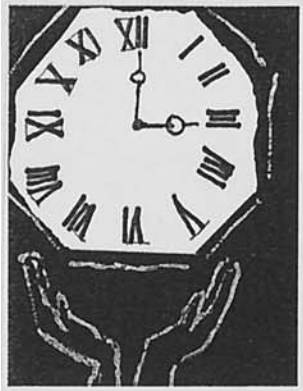


陸軍大将　牛島満命

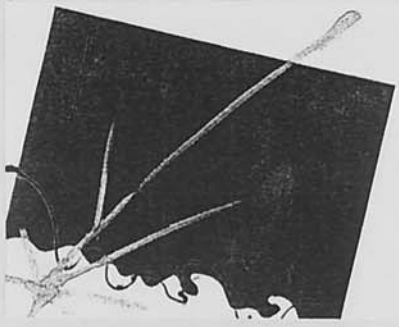


最後の便り
海軍上等飛行兵曹　丹羽重治命
昭和十九年十二月十四日
フィリピン群島にて戦死
愛知県出身　二十才

死の覚悟
陸軍少佐　古川正崇命
神風特別攻撃隊振天隊
昭和二十年五月二十九日
沖縄にて戦死
大阪外語
奈良県出身　二十四才



あとをたのむ
海軍少佐　西田高光命
神風特別攻撃隊第五筑波隊
昭和二十年五月十一日
南西諸島方面にて戦死
大分師範学校
海軍第十三期飛行予備学生
大分県大野郡合川村出身
二十三才



ロサンゼルスオリンピックの英雄西中尉
硫黄島で玉砕　戦車第二十六聯隊長西中佐

田中　賢一

その生い立ち

「日本の騎兵八十年史」より

西中尉、その名は竹一。明治三十五年七月十二日、男爵西徳二郎五十六歳の時、三男として生れた。しかし、長男、次男は何れもすでに病没していたので、竹一と名附けられ、父の愛を一身に受けて育った。ところが、竹一が学習院初等科三年生も終わりに近い明治四十五年三月、父は六十六歳の生涯を閉じた。竹一やっと十歳の時である。そうして、十二歳の三月には、唯一人の姉が他家へ嫁し、同じ年の十月には母も亡くなった。

竹一の性格の中の、孤独を怖れず、過去にこだわらず、常におおらかに新しい目標に立ち向かおうとする進取の気性、にくい程の大胆さ、度胸のよさ、しかも緻密な計算、こうと思ったら右顧左眄することなく、とことんやってのける実行力、芯の強さ等は、父そっくりと言えるが、こうした少年期の環境が、さらに影響したとも言えよう。

学習院初等科を修了した竹一は、担任の先生に特に勧められて、敢えて天下の名門校府立一中に進んだ。

ところが、ある日突然、陸軍幼年学校を受けると言ったので、父なきあと彼の後見役をしていた西伊三次は驚いた。

「軍人志望を断念」し、外交官として國事に尽し名を成した徳二郎の嗣子で、しかも学習院から折角府立一中にまで入った竹一が、事もあろうに、当時はどちらかと言えば下り坂の軍人を志望しようというのであるから。

竹一はその時、軍人志望の理由として「院長先生（乃木大将）がおっしゃっていました、華族の子供はなるべく軍人になれと」と言ったと言われているが、本当は、脈々と流れる父の血がそうさせたのではなかろうか。特に子供の頃から馬とか自動車とかスピード感に溢れるものが大好きであった竹一にしてみれば、軍人志望―そして騎兵、といった夢が既に此の時出来上がっていたのではなかろうか。

自動車を飛ぶ西中尉

大正十三年士官学校卒業。騎兵第一聯隊で少尉任官。古参少尉か中尉になった頃のことと思う。

自動車を飛ぶ西竹一中尉

この写真はオリンピック出場より前の事だが、当時の軍事雑誌の紙面を賑わしたものである。西さんのことは竹田様から話を聞いたことが何回かある。西さんは36期、竹田様は42期で、共に原隊は騎1である。私が聞いたことを受け売りするよりも、竹田様がお書きになった「馬よもやま話」の該当部分を転載させてもらう。

『馬という動物は、〝馬鹿〟の馬の字どころか利巧な動物で、自分に乗った騎手が上手か下手かをすぐに判別するくらいだから、西さんに一度降参した馬は、次に西さんが乗ったときには見違えるほど柔順になり、そればかりか、西さんのためにはその能力を惜しみなく発揮した。それが、西さん独特の調教の極意であったと言えるであろう。「尾花栗毛は人を喰う」という昔からの言い伝えがある。尾花栗毛とは、馬の毛色の名で、たてがみと尻尾だけが白い色のまじったものを言い、この毛色の馬には癖馬が多いという意味である。

当時、騎兵第一聯隊に「福東」という尾花栗毛の馬がいた。大きくはないが、言い伝えどおり、なかなかの悍馬であった。西さんはこれに着目され、みずから調教して有能な障害馬に仕立て上げられた。

西さんが乗馬で自動車の上を飛び越えている有名な写真があるが、そのとき西さんが騎乗された馬が「福東」である。

この写真を素人に見せると、皆たいそう驚くが、じつは、馬術的にはあまりほめられることではない。なぜならば、これは自動車といってもその頃よくあった幌自動車で、その幌を折りたたんでしまうと、幅は二メートルくらい、高さはせいぜい一メートルくらい

しかなく、障害としてはそう大きなものではない。しかし、車体が金属製で光っていて、見たところ複雑になっており、馬にとってはいかにも恐ろしく見え、もし飛越に失敗すれば、ただではすまないだろうことが問題なのである。

そんな自動車飛越を、西さんともあろう大家がどうして決行したのかということについて仄聞したところによると、ある集まりで、「馬で自動車が飛べるか？」との話が出たとき、「なに、わけない！」と言い放った西さんが、その負けじ魂からついに実行したというのである。

しかし、その写真をよく見ると、飛び越えた車の中にちぢこまった人物がかすかに見える。その人は、西さんと言い合った当の同期生で、西さんが「よし、俺が飛ぶから、お前はその車に乗っていろ！」と言ったためだとのことで、後にその同期生は「飛ぶより、飛ばれる方が、よっぽど怖かった！」と言ったという。

ところで、西さんがその自動車飛越をいとも簡単にやったかというと、そうではない。西さんは、平素練習に用いる木製の障害物材料で自動車に似た大きさの障害物を作ってこれを何度も飛んだり、また本物の自動車の近くに福東号を何回も連れて行って十二分に慣らすなど、あらゆる心遣いを人知れず行っておられた。私はこのことを、当時、士官候補生として同じ隊内に起居していただけに、よく知っている。

由来、名人と言われる人は、事もなげにそれをやってのけるように思われがちであるが、じつは、能うかぎりの心遣いをしたうえで真剣に取り組むからこそみごとにやり遂げるのであることを、ここで名人・西さんがよく説明していると言えよう。』

この時自動車の中にいたのは、御同期の毛利敬四郎さんである。この人は私（田中）が騎兵十六聯隊に士官候補生でいた頃、隣の中隊長をしておられ、同じような話をされた。

オリンピック馬術選手候補となり、名馬ウラヌスを入手する

「日本の騎兵八十年史」より

昭和四年九月騎兵学校長期学生を修了し原隊の騎兵一聯隊へ帰った。

註　騎兵学校の馬術専攻は乙種学生で、これは騎兵将校全員が履修した。その中で優秀な者は長期学生として更に一年間修業した。

その頃、第十回オリンピック大会のための馬術選手の選考が始まった。五年三月、彼は一番若くして、つい最近まで指導を受けていた今村、吉田両少佐等錚々たる先輩と共に選手候補に選ばれた。

開催までまだ三年半、しかも、選手候補にこそなったが、選手に決まったわけではなかった。しかし、彼は一日も早く名馬を手に入れ、一日も早く人馬一体にならねばと思った。そうして出来る事なら、本番前に国際試合に出て場馴れをしておき度いとも思った。彼程の度胸のいい男が、と周りで訝る程だった。一見無鉄砲な事を平気でやる様だが、実は案外慎重な処のあるのが彼の本性であった。

その頃、馬術研究のためイタリアの騎兵学校に留学中の今村少佐から手紙が届いた。「ウラヌスと言ういい馬を見つけたが、誰か買わないだろうか、之を逃がすのは誠に惜しい」と。彼は、今村教官が薦めるのだから余程よい馬なのだろう。よっし俺が買う。と即座に決心した。軍馬補充本部も、彼が自費で買うのならと賛成した。

西中尉は早速半年間の賜下休暇を願い出てイタリアへの旅に立った。五年四月の事である。

彼はイタリアへ直行はしなかった。日本郵船秩父丸の処女航海の便を利用してまずロサンゼルスに寄り、オリンピック競技予定地を下見した。大事に臨み慎重な彼の真骨頂が窺われる。

ローマに着いた翌日、早くも西中尉はウラヌスに対面した。ウラヌスはフランス生れの「アングロノルマン」種の騸馬（去勢馬）である事以外わかっていない。血統書がないのである。しかし悍のよさ、柔か味のある点等からみて優秀な血液を受けついでいるに違いないと思われた。

古橋戒三氏の解説によると『体高一八一センチ、頭は大きく、頸は太く長く、肩はよく傾斜し、障害馬としては申し分のない体型を備えていた。又栃栗毛で額に星があり、四肢の筋肉は隆々、蹄はとてつもなく大きく、軽種系にみる様な気品はなかったが、稀にみる巨

ウラヌスと西中尉

大な馬で、「怪物」といった感じの馬だった。又西中尉自身その初対面の印象を「聞きにし勝る大きな逸物で、我乍ら吃驚した。まあ乗ってみろというので早速跨がってみると、これが何とまるで駱駝の様だ。あんな大きな馬に乗ったのは生れて初めてだ。」と言っている。

西中尉の持ち帰ったウラヌスは騎兵学校で預っていた。ある日、教官が学生にそしらぬ顔で鑑定させた。「理想的な重砲輓馬」之が大方の答だった。まさか将来此の巨大な「怪物」が大障害で世界一になろうとは誰も思いもよらなかったのだ。

ウラヌスは、ローマの騎兵聯隊のある騎兵中尉の持馬だったが、中尉が持て余して売りたがっているのを今村少佐が聞き、早速見たところ、オリンピックの大障害にはもってこいの馬と見込み西中尉に知らせたものだった。今村少佐という伯楽に回り会い、西中尉という名馬術家に鍛えられて、ウラヌスは世界一の名馬になった。ウラヌスも幸せ者である。』

武者修業

西中尉がローマに着いた頃、欧州は丁度国際馬術競技の花盛りだった。彼は武者修業の絶好のチャンスとばかり、つい最近初対面したばかりのウラヌスに乗って次から次へと出場した。しかも殆ど入賞という素晴しい成績を収めた。いかに調教されていたとはいえ、いや、他人が調教した馬であればこそ、却ってなかなか人馬一体になり難いものであるのに、西中尉は忽ちウラヌスの特性を摑み、手の中へ入れてしまったのである。その道の天才という他はない。

まずローマで行われたムッソリーニ首相主催の大競技会に出場して入賞した。本人も「生れて始めて国際競技に、買ったばかりの馬で出場して……我乍らずい分無茶だとは思ったが……タイムは遅かったが無過失で七番かそこらで入賞した。こんな嬉しいことはなかった。」という程だった。次いでイタリアのトリノ、スイスのルツェルン、ドイツのアーヘンと出場し、その間に多くの一流選手と技を競い八、九回、本人も覚えていない程入賞した。特にスイスのルツェルンでは、フランスの一流選手ビザール中尉を押えて四等に入賞し、ポールに日章旗を高々と掲げた。ドイツのアーヘンでは、競技委員長をして「日本は万事日の出の様な勢いで日に日に進歩しているが、馬術においても、いつの間にかこの様な進歩を遂げ、もはや我々に優るとも決して劣らぬ程になった。我々も大いに学ばねばならぬ」と感嘆敬服させた。バロン西の名は、ウラヌスの名と共に忽ち全ヨーロッパに知れ亘り一大センセーションを巻き起こした。ウラヌスを手離したローマの中尉が、買い戻したいと言ったとか。

僅か五ヶ月であったが、西中尉には測り知れない自信を与えた事だろう。だが、西中尉ご本人は勝っても負けても一向に気にもとめない様子だった。

栄光を目指して

ヨーロッパから帰った西中尉は、原隊つまり東京は世田谷の騎兵第一聯隊に戻ったが、ウラヌスは千葉県習志野の騎兵学校に預ける事になった。その間四〇キロ。西中尉は厭わず毎日調教と練習に通った。尤も隊務全面免除というわけにはいかず、部隊が野営演習にいっている間は留守番をかね、週番勤務につく事にした。

騎兵学校では輜重兵上等兵上りの嵯峨という秋田県出身の青年（組長）に、西中尉のためウラヌスと愛蘭土（アイルランド）の世話をさせた。

六年四月二十八日、第一次予選が、習志野原と中山競馬場とその間路上とを使って行われた。今では考えられない事だが、パトカーも白バイもない頃の話である。

ウラヌスは、勿論余裕をもって障害を跳び越えた。

第二次予選は、同じ十月に騎兵学校で行われた。ここでもウラヌスは堂々と合格した。

西中尉のもう一頭のアイルランドは余程進歩したが、ウラヌスには叶わなかった。障害の数が増えるに従い眼の色を変えて興奮し、フウフウ言うのである。

六年十二月、騎兵学校附になった西中尉は此の二頭の調教を、それぞれの特性に合わせて熱心に進めたが、やはりウラヌスを最高調にもっていこうとした。

ロサンゼルスへ

かくして、昭和七年の第十回オリンピックを迎えた。

遊佐幸平監督以下選手の一行は、出場馬と相前後して七年五月二十八日、ロサンゼルスに到着した。各国中一番乗りだった。

監督　騎兵大佐　遊佐幸平
総合　〃　中佐　城戸俊三　久軍号
〃　〃　大尉　山本盛重　錦鄉号
〃　砲兵大尉　奈良太郎　孫神号
大障碍騎兵少佐　今村　安　ソンネボーイ号

ロサンゼルスオリンピックの英雄西中尉
硫黄島で玉砕　戦車第二十六聯隊長西中佐

〃　〃　大尉　吉田重友　ファレーズ号
〃　〃　中尉　西　竹一　ウラヌス号

秩父丸船上の日本選手
右から、遊佐、山本、奈良、今村、吉田、西

栄光の八月十四日

いよいよその日の朝が来た。

昭和七年八月十四日。ロサンゼルスは快晴だった。空はどこまでも青く、日は燦々と輝いていた。

西中尉は快い眠りから覚めた。何よりも先ず厩にウラヌスを訪ねた。鼻づらを摩り髻を撫で、蹄を見た。嵯峨青年が些か興奮した眼差しで西中尉を見上げて、敬礼をして言った。

「中尉殿。今日はきっと勝てます。ウラヌスもこの通り元気であります。」彼の眼は光っていた。

ローマでの初対面以来、共に血の出る様な練習を重ねて来たのも今日のためである。今日こそは愛馬ウラヌスと共に勝利の栄冠を克ち取らねばならぬ。西中尉は血の滾るのを覚えた。「出来るかぎり頑張るぞ。」ウラヌスと自分に誓った。

西中尉の出場する競技は、馬術競技中でも最も高度の最も華やかなもので、一国三名の選手の合格点の第一位の国に特に「優勝国賞典獲得者」という名誉の与えられる大障害飛越競技であった。そしてオリンピックの掉尾を飾る競技でメインスタジアムで行われた。

当日の観衆は十万を越えた。広い会場には熱気が溢れていた。

西中尉はウラヌスを牽いて会場に表れた。ウラヌスの巨体と颯爽たる西中尉は衆目を集めた。彼は低い障害を置いて準備運動を始めた。感嘆の騒めきが起った。

午後二時半、いよいよ競技が始った。

第一はメキシコのボカネグラ大尉。二個の障害で落し、第八障害で三回も拒止し失格。

第二は地元アメリカのウォフォード中尉。彼も四個の障害で落し、第八障害で人馬とも転倒し、第十障害で三回拒止し失格。

第三はわが今村少佐。期待に反し、四個の障害を落し、第十障害で三回拒止した上に落馬し失格。

第四はスウェーデンのフォン・ローゼン中尉。彼も四個の障害を落したが、初めて全コースを走破し、減点16でゴールイン。大観衆の喝采を博した。

第五はメキシコのメジャ少佐。彼は第二障害で早くも三回の拒止に会いあえなく失格。

第六は再び地元アメリカのブラッドフォード大尉。六個の障害で落す等の過失を犯したが、とに角全コースを突破し、二十四点の減点。

第七はわが吉田少佐であったが、練習中に負傷し地元の病院に入院中で棄権。

第八はスウェーデンのフランケー中尉。彼は優勝の呼び声が高かったが、二個の障害で落し、第十障害で三回の拒止に会い、ついに涙を呑んで失格。

各国皆失格者が出た為本来の「優勝国」の名誉は何れの国も取れなくなり、個人の争いとなった。

これまでの経過をじっと見ていた西中尉は、怖気づくどころか愈々ファイトを燃やした。特にわが選手団の唯一人の生き残りと思うと、何としてでも入賞しなければという強い責任感に襲われた。難局に直面して益々勇気百倍するのが彼の特色である。それは後年、硫黄島の死闘でも遺憾なく発揮された。

第九はメキシコのオルチッツ大尉。彼も落下や拒止で失格。

第十はアメリカの監督チェンバレン少佐。アメリカ選手中最も期待された名騎手である。葦毛の名馬ショーガールに跨り、我こそは今日の栄冠者たらんとの決意を面に現わし、祖国の期待を一身に受けて次から次への妙技を展開していった。その度毎に万雷の拍手と喊声が起こった。第五障害で落し、第六と第十三障害で水濠に肢を踏み入れる等若干の過失により十二点の減点となったが、素晴らしい成績でゴールインした。

誰の眼にも彼が優勝の栄冠を得たであろうと映った。それは、後に残るのはスウェーデンのハルベルグ大尉とわが西中尉のみであるからである。

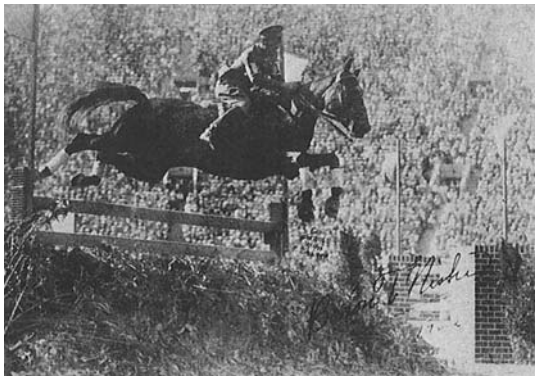
いつまでも止まらぬ拍手と喊声の余韻の中に、西中尉はスタート位置に着いた。と、新たなどよめきが起った。わが幾千の同胞の心からの声援である。ちぎれんばかりに日の丸の小旗を振って。

監督の遊佐大佐は、オリンピック史上初めて日本人審査官として審査台上にいた。彼は祈る様に西中尉の一挙手一投足を見守っていた。

「ウラヌス！行くぞ！」西中尉は愛馬の耳元で囁くかの様に、彼独特のシグナルを脚と手綱でウラヌスに伝えると、落着いた駈歩で競技場を一周した。悠々迫らずいかにも自信あり気である。タイムスタートの合図の旗がさっと下りた。鞍上人なく鞍下馬なく、人馬一体となり走りかつ飛んだ。

第一障害は歩調整斉、流れる様に飛んだ。第二障害以降も、ウラヌス独特の大きな歩調で力強く飛んだ。あくまでも正確な騎坐、巧妙な指導、堂にいった飛越振り、綽々たる余裕。観象は唯々驚嘆、惜しみない拍手を送った。第六障害の幅五メートルの水濠で僅かに後肢を水中に落したが、さしも難関の第八障害のバンケットも何の苦もなく突破した。愈々第十障害が来た。流石のスウェーデンのフランケー中尉も三回拒止によりついに涙を呑んで失格した難関である。ユーカリの枝を積み重ねた上に更に横木が置かれている。ウラヌスはその異様に驚いたが、左へ切る様にして止った。その瞬間場内に嘆惜のどよめきが起った。西中尉は素早く反転、馬首を再び障害に向けると今度は思いきり高く飛ばした。成功！ウラヌスは腰を右に捻り横木との間に十分の余裕を残して飛び越えた、残りの障害も全部無過失で飛んだ。西中尉の水際立った妙技に満場の大観衆は完全に魅了された。

優勝をきめた第10障害　ロス大会の西中尉


大観衆注視のなかでの競技

西中尉が悠々全コースを突破してゴールインすると、十数万の観衆は総立ちとなり万雷の拍手が湧き起こった。同胞は歓喜の余り涙を流し、互に抱き合い踊り狂わんばかりである。流石の西中尉も全身びっしょりだった。

第十二の殿りはスウェーデンのハルベルグ大尉。完走はしたが、障害の落下と拒止が多く、かつタイムオーバーで五十の減点となった。

息詰る様な大競技は終わった。完走は僅か五選手。優勝はチェンバレン少佐か西中尉か、慎重な審査が続いた。

「第一位日本・西中尉。減点八。」

勝った。日本の西中尉がアメリカのチェンバレン少佐、スウェーデンのローゼン中尉を押えて堂々世界一になったのだ。

観衆は万雷の拍手を持ってバロン・ニシの優勝を讃えた。狂喜する同胞は「万歳」「万歳」と絶叫し乱舞した。

西中尉は馬を嵯峨青年に渡し、審査台上の遊佐監督の許へ走り寄った。遊佐大佐は太った体をかがめ大きな手を差し延べて西中尉と固い固い握手をした。「おめでとう。」あとは声にならなかった。二人の目には光るものがあった。

ウラヌスを受け取った嵯峨青年はすくさま鞍を下ろし、ウラヌスの頸を叩いてその栄光を労い、その辺りを引き廻した。彼の眼からは涙が滂沱と流れ落ちていた。

栄光の瞬間が来た。再びウラヌスに跨った西中尉は、チェンバレン少佐とローゼン中尉を従えて表彰台に向った。「優勝国日本」のアナウンスと共に、大日章旗がメインポールにスルスルと昇っていった。五百人の大バンドが「君が代」を奏でる。満場起立、国家と国旗に敬意を表した。

同胞は一世も二世も、老いも若きも、日の丸を手に手に泣き乍ら歌った。此の時程、国歌が短いと思った事はなかったという。荘重に響き渡る「君が代」、抜ける様な異国の大空に翩翻と翻る大日章旗、西中尉は感激した。恐らく心で泣いた事だろう。

表彰式は終わった。西中尉はウラヌスの鼻面をさすり乍ら静かにウラヌスを牽いて競技場を去っていった。彼の姿には少しの奢りもなかった。唯々精一杯やったという満足感と、今日までよく従って来てくれたウラヌスに対す

る感謝のみであった。

新聞記者がつめかけて来た。彼は一言「ウィー・ウォン」と言った。我々とは彼自身と愛馬ウラヌスの積りだった。日本の記者にはそれが読めなかった。「我々日本は勝った」と打電した。

西中尉は此の時既に、次回は是非国産馬で勝ち度いと心に期していた。それは次のベルリン・オリンピックで見事に成就するのである。

東海の孤島の一中尉は忽ち世界の英雄、バロン・ニシになった。

ロスの町は「バロン・ニシ」で湧いた。開放的なアメリカ人は、西中尉の優勝を人種、国境を越えて祝福してくれた。

ロスの市長は彼に名誉市民証を贈った。

たまたまロス市郊外に建設する競馬場の起工式に是非と懇願されて出席した西中尉は、一番の上席に坐らされ、競馬会長から終身名誉会員に推薦され、感謝状を贈られた。

凱旋

八月二十二日午後、出迎えにも勝る盛大な見送りを後に、日本郵船「秩父丸」でロスのサンペトロ港を出航した。此の船は西中尉が三年前、ウラヌスを購めにヨーロッパへ渡った時の船だった。船長以下の祝福をうけた。

九月八日横浜港に着くと、水泳選手等と共に特別仕立ての〝凱旋列車〟で東京入りをした。東京駅頭は歓迎の旗の波で埋まった。爆発する様な万歳の叫び、万雷の拍手。勝つという事はかくも晴れがましいものかとしみじみ思ったのは西中尉一人ではなかったであろう。

大日章旗を捧持する西中尉を先頭に、大島選手代表、遊佐監督以下用意された馬に乗り、東京駅頭から宮城前広場を縫って二重橋前までを、乗馬の歓迎大パレードを行った。そこで皇居奉拝を終えると、今度は自動車に分乗し、代々木の明治神宮に参拝した。午後には東京会館で文部大臣及び体育協会主催の歓迎会があり、又日比谷新音楽堂で東京市の歓迎会があった。

優勝を果して　秩父丸船上の西中尉

行く先々で西中尉は記者の質問攻めに会った。彼はいつも第一にウラヌスの功を上げた。優勝直後「ウィー・ウォン」と言ったあの気持ちは今も変わらないのである。そうしてさらにつけ加えた。「次の機会には是非日本産馬でやってみたい」と。ウラヌスの可愛い事に変りはないが、それが外国産馬である事を彼は残念に思っていたのである。

青年団、在郷軍人会、町内会の人々六百余名が、ラッパ隊を先頭に提灯行列をして邸の中まで繰り込んで来た。西中尉は夫人、子供と共に玄関に出て提灯を掲げて万歳に答えた。

皮肉な別れ

竹田恒徳殿著「馬よもやま話」より

ところで、この大東亜戦争よりだいぶ以前から、火器の発達や機械化の進歩にともない、戦争の様相は一変し、世界的にも、騎兵隊がなくなり、車輛が馬にとって代わるようになった。

このため、中佐に昇進した西さんも、騎兵隊ではなく戦車部隊の聯隊長を拝命し、馬と別れて北満東部国境の守りについていた。しかし、まったく必要がなくなったとはいえ、西さんは拍車と鞭を最後まで手離さなかったし、愛馬ウラヌス号のたてがみの切れ端を肌身離さずポケットに入れていた。

いかに馬を、とにかくウラヌス号を愛しておられたかがよくわかる。

その後、昭和十九年頃であったか、南方へ進攻した日本軍は、破竹の勢いで南太平洋から東南アジアの広大な地域を占領したため、兵力に不足を生じ、背に腹は代えられず、北方守備に当たっていた在満部隊をひそかに抽出して、南方に転用せざるをえなくなった。

私はその頃、大本営作戦参謀から、関東軍作戦参謀に転じて、その間の事情をいちばんよく知っていたため、釜山の港町に派遣され、汽車で満州各地から南下してくる転用部隊をつぎつぎと輸送船に乗せて送り出す処理に当たっていた。

その転進部隊の行く先をしるした大本営命令書は、私が輸送指揮官に手渡すことになっており、私だけはその転用先を知っていたのであるが、秘密保持上「出港後開封」と上書きされて厳封してある。つまり、船が港を出てから命令書を開封して見るまで、転進部隊は自分たちの行く先は全く知らされないのであった。

そのうち西さんの率いる戦車隊が転進部隊として釜山に到着した。西さんは私に、「自分はどこへ行くのだ？」

と何度も聞かれたが、それだけは口が裂けても言えない。

私はもどかしさと同時に、おそらくは西中佐の最後の死地となるであろう硫黄島行きの命令書を、偶然とはいえ、もっとも親しい仲である私が明朝手渡さなければならないという、なんとも皮肉な、やるせない思いであった。

そうした気持ちをなんとかまぎらわそうと、その夜は私が参謀の身分を隠して泊っていた木賃宿で、西さんとひっそり別れの酒を酌み交わして夜を明かした。そして翌日未明、出港する船の甲板で厳封した命令書を西さんに手渡したのであるが、ついにこれが今生の別れとなってしまった。

昭和19年8月、戦車を受領し、硫黄島へ帰る直前の西中佐

戦車第二十六聯隊
「日本の機甲六十年」より
硫黄島の持久戦闘

一般状況

一、マリアナ沖海戦の完敗により、サイパン奪回を断念した大本営は、十九年六月二十五日、小笠原地区集団を第三十一軍隷下から離して大本営直属の小笠原兵団とし、七月一日硫黄島の第一〇九師団長栗林忠道中将を、小笠原兵団長とした。

二、六月上旬、師団長として着任した栗林中将がまず着手したことは、水際陣地の再検討であった。

当時、大本営においても、水際撃滅方式から面式ないし後退持久方式にその考えが変わっていた。

三、九月、栗林中将は、次のような要旨の硫黄島防衛計画を示した。

(1)元山飛行場南北の地区を主陣地とするとともに各要点に独立拠点（複郭陣地）を準備し、特に有力な一部を持って摺鉢山付近を確保する。

(2)火力と短切な逆襲により敵戦力を減耗し、主陣地前で撃滅する。このため、地上の陣地施設を強固にするは勿論、地下道と洞窟式陣地を縦横に廻らし、全島を要塞化する。

地下掘さく作業は、地熱のため九〇～一二〇度の暑さの中で、三分間交代を必要とした。全軍将兵は、肉体的限界をこえて、これに挑戦した。

米軍上陸時、全島の築城計画の完成度は七〇％で、洞窟式交通路は延長十八・五粁に達していた。

四、戦車第二十六聯隊（長・西竹一中佐）サイパン奪回作戦のため釜山に待機していたが、同作戦中止により急遽硫黄島に派遣されることになった。

七月十八日、父島の手前で、米潜水艦により人車ともに海没したが西聯隊長は本土にもどり、各方面に奔走して戦車二十三輌の補充をうけ、硫黄島に今度は無事上陸、聯隊を再編成した。その編成はつぎのとおりであった。

聯隊本部（軽戦車二）、
第一中隊（中戦車五、軽戦車二）、
第二中隊（中戦車四、軽戦車三）、
第三中隊（中戦車二、軽戦車五）、
砲兵中隊（九〇式野砲八）
歩兵中隊、整備中隊、工兵小隊。

中戦車は九七式（改）で、その四七耗砲はM4中戦車の側面に対して効果があるが、軽戦車の三七耗砲は、裸の目標にたいする榴弾射撃しか効果はないとされていた。

五、聯隊は、兵団長から受けた任務は凡そ次の様なものであった。

㈠、方針
1、初期温存
2、好機重要方面に移動トーチカ式運用

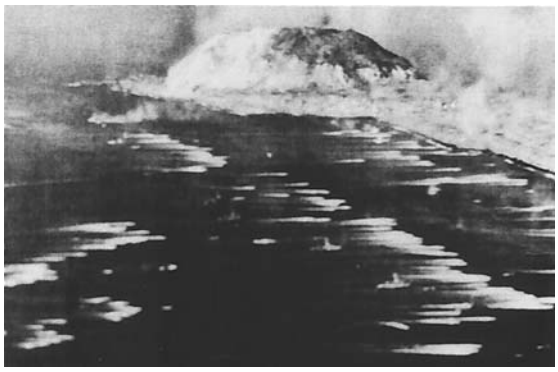
㈡、指導要領
1、主力は第二線主陣地々域内に展開
(1)主陣地占領部隊の逆襲支援
(2)飛行場へ侵入する敵の撃破
2、一部は陣内、陣前の対戦車戦闘

西聯隊長は、機動的集結運用という戦車部隊本来の考え方をさらりと捨てて、兵団長の意図に基き陣地（戦車掩体）構築を徹底的に行い、最悪の事態に備えて肉薄攻撃や挺進斬込みの訓練も行った。

戦闘経過

一、昭和二十年二月十九日、その日は快晴であった。四〇〇隻以上の艦艇に支援された米海兵隊第四、第五両師団は、その正面幅僅か三粁余の南海岸に、雲霞の如く水陸両用戦車を先頭に午前九時上陸を開始した。

約一年に亘り営々として準備した各陣地からは、一斉に一発必中の火



米軍の上陸

上陸した米軍

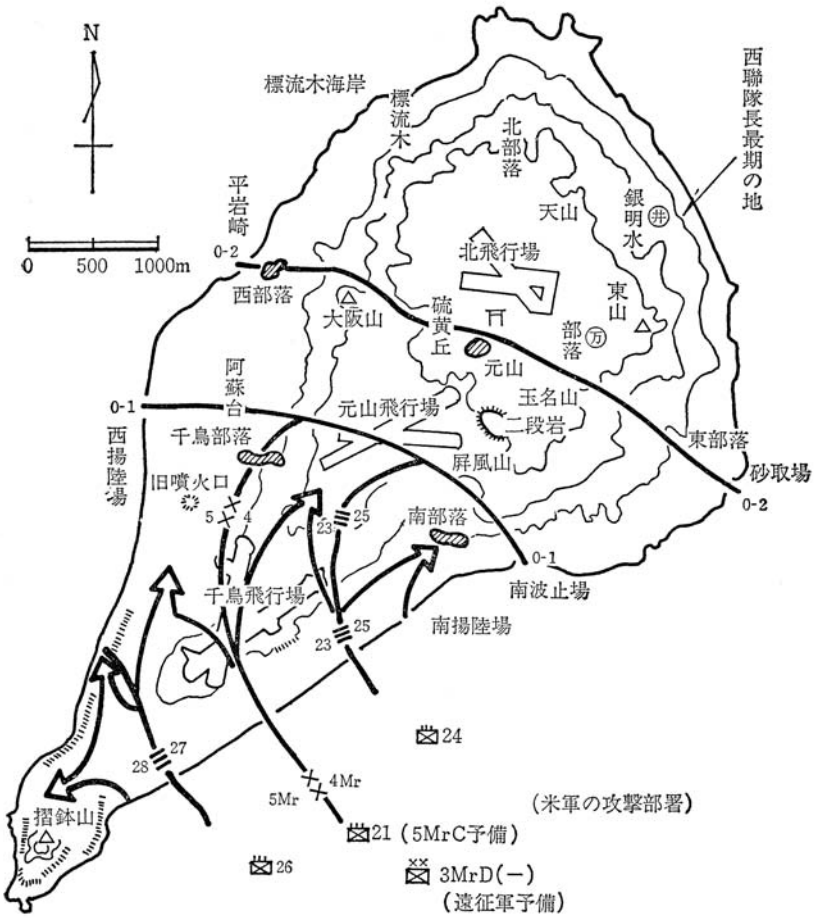
蓋が切られた。しかし、圧倒的物量の前に、第一線陣地の勇戦敢闘も空しく、その日の夜までに早くも摺鉢山と島中央部主陣地とは分断され、敵の海岸堡は略ぼ完成した。

二、敵上陸の第一日は、各中隊とも洞窟内で満を持して待機していたが、その夜、それぞれ予め準備した陣地に進入した。

斉藤矩夫大尉の指揮する第二中隊と機動野砲の角田小隊は、歩兵第一四五聯隊の西地区隊内に、鈴木利生大尉の指揮する第一中隊と機動野砲の鹿内小隊は、二段岩陣地を中心に歩兵第三〇九大隊の占領する南地区隊内に、西聯隊長は、鈴木忠一少佐以下の聯隊指揮班及び、予備隊である西村功大尉の指揮する第三中隊と共に㋕部落附近の陣地についた。

三、翌二十日以降、各中隊はそれぞれ関係歩兵部隊とともに主陣地の確保

硫黄島概況図（昭和20年２月19日～３月中旬）



に任じていたが、二十五日以降、戦車部隊としての最後の激闘を展開することとなった。

新たに上陸した第三海兵師団が中央突破の態勢をもって、一挙に元山飛行場から北飛行場へとその主攻を指向して来たのに対し、聯隊はその全力をもって所在の歩砲とともに、或は対戦車戦に、或は逆襲支援に、その装備の劣弱を地形と築城の利用、訓練の精到、将兵の忠勇により補いつつ決死敢闘した。

四、二十八日朝、西地区隊配備の戦車第二中隊は、九〇式野砲二門（自走砲であろう）を伴って、洞窟陣地から突如として出撃し、米軍一個聯隊に痛撃をあたえた。

元山飛行場正面配備の戦車第三中隊は、午前中に総反撃を敢行し、第一中隊もまた、二輌一組の突撃隊戦法をもって、敵に多大の損害をあたえた。

五、三月一日、二段岩の第一中隊は、進出してきた敵一個大隊に対し反撃を敢行したが、鈴木中隊長は重傷を負い、戦車内で自決した。

第一中隊とともに、歩兵中隊（長・武田大尉）も整備中隊（長・片山茂大尉）も敵中に突入、また工兵小隊（長・山下勝一少尉）は、敵戦車に対して肉薄攻撃をくりかえし、各所で壮烈な近接戦闘が展開された。

戦車第三中隊は、昨日来の戦闘で、西村中隊長が自決し、残存兵力が数十名となったので、整備中隊に合流して戦闘を続行した。

地下壕を爆破されたため、多数の死傷者を出したが、それに屈せず、行動不能となった戦車を土壌で掩蔽し、戦車砲、搭載機関銃をもって抵抗をつづけた。

この日を最後とし、戦車による機動反撃は終わった。

この日、東山地区複郭陣地確保の兵団命令をうけた西聯隊長は、残存兵力の、㋕部落周辺地区への集結を命じた。

六、その後更に約二週間、聯隊は一部をもって東山拠点、主力をもって、㋕部落周辺拠点を確保して、約一個師団の米軍に対し、残存戦車を掩壕内にいれ、コンクリート掩体、地下壕などを利用して抵抗をつづけた。

三月六日の、㋕部落攻防戦では、大谷道雄中尉が肉薄攻撃により、敵戦車二輌を擱坐させて全軍の士気を鼓舞した。さらに奪取した敵戦車の搭載砲と残存の九〇式野砲で、戦車一輌を擱座炎上させた。

しかしながら米軍の夜間攻撃に引き続く総攻撃により、翌七日午後二時頃には、東山頂上を占領され、㋕部落周辺地区も彼我混戦状態となった。

聯隊はなおも同地区地下壕を死守するとともに、北飛行場に挺身斬込みを敢行して、米軍に多大の損害を与え、その地歩拡大を阻止した。

栗林兵団長は、戦車聯隊の開戦以来の勇戦敢闘に対し感状を授与した。

九日には肉薄攻撃により戦車一輌を擱座させ、翌十日にはその擱座戦車の搭載砲をもって戦車一輌を撃破するなど、反撃を加えながら、㋕部落付近の直径約三五〇米の拠点を確保しつづけた。

七、二週間の死闘が限界にきたことを覚った西聯隊長は、㋕部落拠点の放棄を決意し、北拠点の兵団主力に合流するため、十四日払暁、残存兵力約三百名をもって、出撃を図ったが、すでに地上を完全に制圧していた米軍を突破することが出来ず、不成功に終わった。

西聯隊長の最期については幾多の言い伝えがあるが、三月二十一、二日の頃、東北海岸で壮烈な最後を遂げた事に間違いはないようである。西戦車聯隊は、戦いの前半は機動反撃をもって敵に出血を強い、後半は洞窟陣地を利用して約二週間の持久をはたし、兵団長の企図した持久出血作戦の骨幹戦力としてその任を完うした。不羈奔放ともいえる、俊敏果敢な西中佐にしてはじめてなしえたといえようか。ロス・オリンピックの英雄は護国の鬼と散ったのである。

西中佐の最後とウラヌスの死

竹田恒徳殿著「馬よもやま話」より

このときアメリカ軍は、なぜか西さんが硫黄島にいることを知っており、ロサンゼルス・オリンピックで西さんと大障害飛越で競い合ったチェンバレン少佐をわざわざ硫黄島に連れてきていた。そして拡声器を用いて呼びかけた。

「オリンピックの英雄、バロン・ニシ、君は立派な軍人としての責任を果たしたのだ。ここで君を失うことは、なんとも惜しい。こちらに出てきてくれ。われわれは君を手厚く取り扱う！」と。

西さんは一笑に付してこれに応えず、惨烈をきわめた戦況の中で無理にも笑顔を作り、心配そうに部隊長の顔を窺う部下を安心させるようにつとめた。そして持ち前の積極性を発揮し、肉薄

戦を何度もくり返して敵を大いに困らせ、昭和二十年三月には、戦場における部隊として最高の栄誉である「感状」を、栗林兵団長から授与されている。

このことは、オリンピックでの金メダルにも比すべき、戦場での西部隊長の不滅の栄誉であり、畏くも、すでに天聴に達した。

しかしながら、ついに西部隊は一人残らず全滅してしまった。西さんの最後の様子はつまびらかではないが、島を守るにも限度と悟った西部隊長は、三月二十二日、わずかとなった残兵をかき集めて勇躍出撃し、東海岸の水ぎわでの戦闘中に、もはやこれまでと祖国の方を遙拝したのち、みごとに割腹して自決したという。まさに齢四十二歳であった。

主を失ったウラヌス号は、どうなったのであろうか？

前述したとおり、西さんが馬から車に乗り換えたあと、すでにウラヌスは非常な老齢となっていたため、大功労馬にふさわしく幸福な余生を過ごさせようと、東京・世田谷の馬事公苑につながれ、悠々とした日々を送っていた。

しかし老衰いちじるしく、健康状態も悪化してきたため、世田谷の陸軍獣医学校に移され、万全の保護が加えられていたが、ついに昭和二十年の三月も末になって、静かに眠るがごとく息をひき取った。時に、二十六歳、人間の年齢に換算すると、じつに百歳にも達する大往生であった。

ところで、ウラヌス号が亡くなったあとに西中佐戦死の公報が入ったが、日時の関係を調べてみると、なんとウラヌスの死は、西さんの戦死の直後のことであり、愛馬ウラヌスは、まさに主人のあとを追って逝ったのであった。

その直前、本土防衛のために、東京にできた第一総軍参謀として転任した私は、「ウラヌス」の遺体をぜひとも剥製にするように強く要請した。しかし、大きな馬を剥製にするほどの厖大な量の薬品を、連日の空襲下で集めることは不可能だとのこと、それでは骨格だけでも長く保存したいと思い、そのために獣医学校の片隅の土中にウラヌスの遺体を埋め、後日、骨だけきれいに取り出せるよう手筈をとってもらった。

しかるに、なんたることか！　終戦直前の東京大空襲の際、ウラヌスの遺骸を埋めたその場所に爆弾が直撃し、ウラヌスの骨は一片もとどめずに吹き飛ばされてしまった。なんとも残念なことであったが、西さんが未練を残さないようにと、いっしょに連れて行かれたように思えてならない。

碑　銘

硫黄島戦没者慰霊碑

碑　文

昭和二十年二月十九日、艦艇五百、航空機千余の援護下、米軍は遂に硫黄島に上陸、栗林忠道将軍、市丸利之助提督麾下の精鋭は、縦横無数の地下壕に拠って、地熱と渇水を忍び、孤軍奮闘、圧倒的な侵攻軍の攻撃にも屈せずこれに大打撃を与え、勇戦月余、矢弾尽き、皇国の必勝と安泰を祈念する訣別の打電を最後に玉砕した。

昭和四十二年六月二十六日、小笠原諸島の祖国復帰を機として、有志相計り護国の礎石となった二万余柱の忠霊の悲願に応え、限りなき敬仰の至誠を以て、萬世の太平を祈る霊標とするために、この山頂に存置された米国海兵隊の記念碑と並べて、本顕彰碑の建立を発議し、大方の浄財と外務省・防衛庁等の協賛により、茲に所志を達成するを得た。

碑面の地図は挙国一体の熱誠をこめて、各都道府県から寄せられた献石による。

銘

寡　兵　当　大　敵
弧　島　鬼　神　惶
千　歳　恩　讐　滅
丹　心　萬　古　香

昭和四十四年六月二十六日
硫黄島戦没者顕彰碑建立期成会
硫黄島協会藤本一善書

卓話　教育が心配

仙幼47期　田中　一徳

「編注・平成18年12月15日、臨時国会・参院本会議での可決成立により、実に約60年振りに教育基本法が改正された。占領遺制のシンボルとされた教育基本法であるが、大きな世論の盛り上がりと強力な国民運動の推進によって改正されたことは、戦後体制からの脱却という意味で高く評価される。改正教育基本法には、これまでの戦後教育の中で軽視されてきた、「愛国心」、「伝統文化の尊重」、「道徳心や公共心の尊重」、「家庭教育の重視」等本来の教育理念が明文化された。これまで、児童中心主義や行き過ぎた個人主義を招いていた戦後教育の弊害が、今後大きく改善される道筋が確立した。

次に揚げる卓話記事は、平成18年6月21日に開催された、仙台陸軍幼年学校の同窓会である「仙幼会」幹事会での講演記事で、同会会報「山紫に水清き」65号に掲載されたものであり、些か時機遅れの感がしないでもないが、長年にわたって教育現場を経験した講演者の教育基本法と教育現場の実態に関する講演であるだけに、傾聴に値する卓見と考えられるので、同会のご了承を得て転載させていただいた。」

平成18年6月21日

於仙幼会幹事会

教育については、皆さん方　先刻達見の一家言をお持ちのことと思います。不肖の如きが語るなど烏滸がましい次第です。ただ私は第一線の小隊長級（クラス）、謂わば弾丸雨飛下、教育問題と取り組んできたわけで、その実戦談としてお聞き頂ければ幸甚と存ずるものです。

教育基本法読み取りの心配

今、憲法とタイアップで教育基本法改正の是非が賑やかに論駁されています。とりわけ愛国心涵養・宗教的情操陶冶・不当な教育支配の排除の三点が改正の眼目とされています。私も勿論この三点は強調必要と存念しています。しかし、世上、最も根本的なことが指摘も提案もされていないことに奇異の念を持つのです。それは、第一條（教育の目的）の理解把握が曖昧且曲解されていることです。余談になりますが、ある時、改正反対に熱中していた組合員教師にこの第一條を言わせました。何と彼は口籠ってしまい、條文はおろか断片の語句一つすら言えません。その場に居合わせた五、六名の者も誰一人言えない。往時、私達は小学生時代、教育勅語や百二十四歴代天皇名など誦（そら）んじたものですね。仙幼に入学するとあの長文の軍人勅語を懸命に憶えたものです。信奉するものあれば條文字句熟読し自家薬籠中のものとしますね。然る後の言動こそ然るべきでしょう。その第一條（レジュメも掲げましたが）ですが、「教育は人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」とあります。この文言は、一見平易な叙述に見えますが、仔細に吟味しますと文脈上大変難解です。融通無碍と言えばそれまでですが、論理的に読み取るには困難で戸惑うばかりです。述部のワード・オーダーが完全に（二股の大蛇（おろち））宛然（さながら）です。「人格の完成をめざし」と「国民の育成を期して」と、（めざす）（期す）と、長い一文中に、二志向を示す動詞の連続使用となっています。何とか意味を掬い取ろうとすると、レジュメの図示のように、少なくとも三通りに解せます。即ち㋐は、車の両輪か、又は楕円の中心説とでも言えようもので、「人間形成」と「国民育成」とは併行同時的に達成さるべき等価的なめあてであり、調和が求められるという見方です。又、㋑は、包含説と申しましょうか、ベン図的に表すと、①の場合は「国民育成」を内に包みながら大きなスケールで「人間形成」を遂行していくという考え方。又、②は、むしろ「人間形成」を「国民育成」でインボルブするわけです。大円を到達目標、小円を経過手段と見た上で統一的にとらえる考え方です。そして③は段階説と称しましょう。儒教で言えば『大学』に在る（修身斉家治国平天下）式に、個人から国民へ、そして世界人へと、「人間形成」→「国民育成」のヴェクターが機能すると見られます。

このように三説三様更には小異の派生迄入れると解は多岐に亘り混乱を来します。固より「個性の尊重」とか「個人の尊厳」などの理念の悪かろう筈はありませんが、「人間形成」と「国民育成」の両者の対比関係が明確に把握し難いこの第一條は、六十余年の星霜裡に、他よりは自、複よりは単、集団よりは個人、そして公よりは私へというように傾斜偏頗してきてしまいました。「人間（個人・個性）形成・尊重・尊厳」となると殆ど無条件に賛意を表する者が、「国民育成」となると何故か正当な席を用意しません。江藤淳氏（故人）の言葉を藉（か）りますと、「国家である事を躊躇（ためら）っている国家で

あり、民族の特性を消去することに懸命になって居る民族」なのです。そして此度の与党改正案の第一條もレジュメで対比してみて下さい、現行法と殆ど変わりません。国家や民族への妥当な配慮すら有りません。私は、現行法は勿論、改正案にも首肯できないのです。「教育は国家百年の大計である。」が空疎に響きます。

教育行政の混乱が心配

戯ればみに「教育箴言歌留多」なるものを作りましたので（昨年）レジュメとしてお配りしました。その中の幾つかで教育施策や思潮につき考えを述べてみます。

『い』（五日で六日分）―大容器に詰っている量を小容器に替えるのは誰がどう考えても無理。週休二日制なのに週五日制などというマヤカシ。勤勉をワークホーリックと貶す外圧に屈しての単なる労働時間短縮。教育的発想からの論議無し。意味は後から付けた似非。こんなことをやっていたら、六日で五日分も出来なくなる。

『ろ』（論より証拠学力低下）―OECD（経済協力開発機構）の学習到達度調査で三年前と比べて日本惨敗。数学応用力（一位から六位）読解力（八位から十四位）香港にも韓国、リヒテンシュタインにも負けてしまった。裕に誑かされ冷厳な数字に脱帽の仕儀。

『ほ』（保護が通れば鍛錬引っ込む）―保護とは生命安全の最小限のしつらえでよい。それを些少でも越えれば過保護と心得よ。子供様のお通りだいとて周囲が障碍を除き坦平な道を拓いてやることはない。寧ろ意図的に困難や抵抗の場を設けよ。鍛錬欠乏が眼に余る昨今の状況、日本危うしと観ぜよ。

『ぬ』（微温湯に漬かるニート族）―ポストの中に「快適空間追求」というリフォーム店の広告がよく入っているが、正に子供の生活環境がそうなった。逆境、不快状況に際会すると直ぐに挫折してしまう。フリーターやシングルパラサイトを経てニートに至る。学校に行かず、仕事にも就かず、腕（技術）もない。

『け』（「厳粛」死語に「規律」廃語に）―学校にも社会にも各種の儀式（セレモニー）がある。お祭り（フェスティバル）ではない。最小限の「かしこまり」という共通の所作が必要だ。国歌演奏には起立を、上長者には敬語を、知人に会ったらお辞儀を、当たり前のことが出来ない。

「おごそか」の意味、中2での9割が知らなかったなんて―

『み』（自ら学べと放り出す）―例えば、「小学校学習指導要領」〝総合的な学習時間〟の（ねらい）を見てみよ。（自ら課題を見つけ）（自ら学び）（自ら考え）（主体的に判断し）（主体的・創造的に取組む態度を育て）等々「自」と「主」のオンパレードだ。小学生にこれら態度・能力が既成既得ならもう教育はいらないではないか。

『し』（支援ばかりで指導なし）―教育界に氾濫している言葉、「支援」。その分「指導」の語は姿を消した。献身や犠牲にも及ぶ責任重い「指導」は敬遠された。勘操れば指導する自信が無いからなのか。「支援」は逃げ腰語と言う。又、非力糊塗語とも言う。

現代青少年の一般的傾向が心配

世間の耳目を驚かすさまざまな事故事件が次々に起こります。それらは氷山の一角で、私はその底流を次のように集約してみます。

一、合理的な言動を好むが、自己中心、打算的で、伝統的な慣習や形式を貶し嫌う。

二、猶予人間の域を高年齢になっても脱し切れず個我が確立されない。被保護時代の延長継続を願っている。

三、自ら架空に構築した擬似的平安の世界に閉じ籠り刹那的快楽に溺れ、一念生涯を貫こうとする強い志向を持たない。

四、帰属意識、所属感が稀薄で、集団よりも自分、組織よりも個を重視。対応や適応を図らない。

五、職務の意義を解さず、使命観を持たない。社会の構成員たる自覚に乏しく、規範や倫理の観念が薄い。

お断りしておきたいことは、これらの問題点が私の青少年に関わってきた五十六年間全てに亘って生じ且つ存在していたというわけではないということです。私は傾向という言葉をよく使いますが、傾向とは時の流れと共に見られる量や質の変化のことです。つまり、五つの項目内容は時を近年に下るにつれて顕著になってきているということです。ここ二、三十年特にです。

境界意識の欠落が心配

右に集約した現代青少年の傾向を改善するには幾つものアプローチが出来ますが、時間の関係もありますので二点についてのみ提案してみます。その一が境界意識ということです。これが見事に欠落しているのです。

人は関係の存在です。関係とは境界の在り様であり、それへの接し様ですね。古人は境界を深く意識（怖れ尊ぶ）して暮していました。海と天の接するところ「海界」では生贄を捧げて航海の平安を祈るとか、或いは山坂を登りつめて天を仰ぐところ「峠」では神に

手向けして旅の無事を念じたりしたわけです。一見秩序の無い古代人の日常生活と思われますが、境界意識は一つの秩序であり規範となって人々に作用していたのです。しかも、その境界は「ま」と「め」に大別されました。

石見のや高角山の木のまより
我が振る袖を妹見つらむか
（万葉　柿本人麻呂）

あらたまの伎部が竹垣編目ゆも
妹し見えなば吾恋ひめやも
（万葉　作者未詳）

前歌の「ま」は万葉仮名で、間や際が当てられ、幅員のある境界で双方向から寄り合う場合に使われます。又、後歌の「め」は、目や理が適い一線の境界から双方向へ離れ去る場合に用いられます。（間をとる）（間合を計る）（梅雨の晴れ間）（隙間）などは何れも古語の「ま」から派生され後の世夫々の時に使われてきました。また「め」も（折り目）「節目」（異路目）などと用いられました。自然の運行については季節感をとらえて人為とあわせて様々な行事を盛りこみました。これで先ず境界意識を持ち、次いで「ま」で応ずべきか「め」で対すべきかを弁別してきたのです。ところが現代は特に青少年は境界意識というものが稀薄どころか持てなくなった。境界意識が無いから問題に際会して、これは「め」的発想で当たるべきか、「ま」的発想で処するべきか分からぬままに誤った行動に出てしまいます。例えば、所有について、自他の境界があるのに、いとも簡単に踏み越えてしまい万引き、窃盗などする。罪の意識の生じようがない。だから再犯累犯してしまう。そうかと思うと、逆に友達がやっているのを見ても、止めも諫めもしない。そういう時は境界を踏み越えて諫言制止しなければならないのに―。青少年の教育指導に当たる場合、「境界」という物尺を持って処したら如何かと存ずるのです。

父性と母性の不調和が心配

子供は、独立するまでは、父性と母性の調和の中で育ててやりたいものです。つまり両親です。不幸にしてどちらかが欠けた場合は、父なら父で、父の中にもある母性を自ら取り出し補填すべきです。アメリカ映画で「クレイマークレイマー」というのがありましたが父の中の母の性を上手に塩梅しつつ爽やかな子育てをしています。これは逆の場合（母の中の父なる性）でも同様です。一概に言えませんが、（秋霜烈日の厳父型）と（春風駘蕩の慈母型）の父性・母性が、時にふれ折につけ、主副、陰陽、強弱、「ま」と「め」等の調和が何としても必要と思います。

江戸川柳に『この寒さ不孝者奴が居りどころ』というものがあります。勘当された道楽息子か、親に反抗しての家出娘かでしょうが、（不孝者奴が）の（奴が）には親の厳しさ（父性）が噴出しています。他面（居りどころ）には、とは言え子の身の上を案ずる優しさ（母性）が滲み出ています。古歌にもあります。『父は打ち母は抱きて悲しめば変わる心と子や思ふらん』厳父と慈母と居てその間で子がすくすくと育つものですね。しかし当今、厳父が居なくなりました。『転た寝の叱り手の無き寒さかな』これは一茶の句ですが、叱り手（厳父）の欠如の相をいみじくも衝いています。今や「三無い父」（居ない父）（見えない父）（しまらない父）で父性欠乏家庭が増しています。権威を喪失した父（THE AUTHORITY RELINQUISHING FATHER）は夙にアメリカでも警鐘が鳴らされていました。そしてそれは、家庭のみならず、学校も、地域も、社会も、そして日本も（母性社会、女性国家日本―河合隼雄）です。切に、父性と母性の調和が必要と観じています。

＊本当の「やさしさ」が無いという心配では、「母性、慈母」の方は居るから良いとかというと、どうもそうとは言い切れません。真の意味の「やさしさ」とはどういうものなのかを考えてみなければなりません。それには万葉時代の「やさしさ」を考えてみるとサゼッションが得られると思います。

我ろ旅は旅と思ほど家にして
子持ち　痩すらむ我が妻愛しも
（玉造部廣目）

世の中を憂しとやさしと思へども
飛び立ちかねつ鳥にしあらねば
（山上憶良）

前歌は防人に召された者が、のこす妻の身の上を案じたもので、自分のこれからは旅だから少し位の苦労はいいが、妻は家に残って子育てをしなくてはならない。そのためにはどんなにか辛い痩せる思いをしなければならないことか―。後歌は有名な憶良の歌です。両歌共「やさし」が出てきます。「やさし」の古語で（痩せる思い・辛い思い・恥ずかしい思い）等の意があります。つまり「やさしい」とは、献身や犠牲も視野にある「尽し」の極致から生じた語ですね。安直に、子供が可愛いい、可哀そうだから手を貸してやろう、などというものではないと思います。身を切り苛む思いなのですね。日本人は今、子供達の教育に際して真の「やさしさ」を考えてからしなくてはならないと思うのです。

搾取される中国農民

西川　順芳（軍校7期）

「編注・本稿は、旧満洲国軍の軍官・文官等関係者の親睦団体である「蘭星会」と満洲国軍官学校（軍校）出身者の「同徳台同窓会」との合同機関誌『蘭星同徳』合併第5号に掲載されたもので、同会及び筆者の了承を得て転載させて頂いた。なお、筆者は満洲国軍官学校（新京）第7期生である。

軍校7期生は、昭和19年12月、当年度の陸軍予科士官学校・陸軍経理学校予科等の受験生の中から選ばれて東京に集合のうえ渡満、新京軍官学校予科に入校した。入校当時、予科生徒は、日系2個連（中隊）、満系3個連の編成で、日系は375名であった。

8月9日ソ連参戦。当時の軍官学校校長は山田鉄二郎中将、生徒隊長は、溥傑皇弟であった。翌10日、軍事部命令により在校職員生徒をもって諸兵連合の部隊編制が行われた。歩兵7個連（本科満系2、予科満系3、予科日系2）、砲兵隊（本科高射砲2門、野・山砲各2門）、工兵本科1個小隊、輸送隊1隊（本科自動貨車20両）であった。次いで山田校長は、新京駐防地司令官となり、新京駐屯地の全満軍を指揮し、関東軍の指揮下に入り、その区処を受けるよう命ぜられた。出動準備を整えた軍官学校生徒隊は、学校幹事伊達寿郎少将指揮の下、13日に学校を出発し、新京駐防地司令部（禁衛隊本部）を始め市内要地、軍事施設、主要道路等に展開、布陣して防備に当たった。そして、8月15日の終戦以後は、在満各部隊と同様、ソ連軍により武装解除。次いで、病気入院中の者その他若干の残留組を除く大多数は、不当にもソ連に強制抑留されて、シベリア奥地、主として、イルクーツク、チタ、ブカチャーチャ地区で、鉱山採掘、森林伐採、鉄道建設等、極寒、劣悪の環境下での重労働に従事させられ、栄養失調や疫病により80数名の死没者を出し、昭和22、23年頃ようやく帰国することができた。その後、ソ連崩壊により、抑留死没者の遺骨収集が可能となるや、早速有志により数年をかけて埋葬地の調査と遺骨収集を続けた結果、平成8年から平成10年の間に82柱の遺骨を収集して千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納骨することができた。以来毎年欠かすことなく慰霊祭を実施している。しかしなお、シベリアのオルハで死亡した1名、北朝鮮に移送されて死亡した3名、満洲に残留して死亡した9名の遺骨は未帰還のままである。

最近の新聞報道によれば、3月に開かれる中国の第10期全国人民代表大会（全人代＝国会）第5回会議で、私有財産保護を明記した「物権法」案が可決、成立する見通しとなった。歴史的に「財産は公有」を国是とし、今なお公権力が極めて強い中国で「私有財産保護」に関する法律ができれば、民間企業や外国資本の経済活動が一段と自由になるのは間違いない、と言われているが、果たしてどうであろうか。

中国では、毛沢東時代、共産党が私有財産を容赦なく没収。その後、1978年以降の「改革・開放」政策で私有財産の保護が実質的に進み、2004年には憲法に「私有財産保護」が明記されたが、公有制との関係を巡る党内の論争もあって法律上の扱いは曖昧なままであった。

中国に進出する外国企業でも、土地が公有であることを理由に、地方政府当局が立ち退きを要求するなどのトラブルが発生しており、同法は、外資にとっても重要な意味を持つ。

一方、中国では現在、地方政府が僅かな補償額で土地を収用して暴利を得る行為が日常化し、民衆の激しい反発を招いている。05年に8万7000件発生した民衆騒動の多くも公権力の侵犯が減員であるという。同法は、土地収用、立ち退きに対する補償義務も定める。また、家屋の所有者は土地使用権の自動延長ができることになる見通しである、ということである。

このような「私有財産保護法」を制定せざるを得ない中国の実情、特に地方農村の現状は、これまで余り知られていないが、本稿の筆者は、戦後20数回にわたって中国各地を訪れ、努めて地方農村の実情を視察し、旧軍官学校の満系同期生らとも交流を持って現状把握に努めてきた経験を有する中国通である。」

胡錦濤政権は違法な土地収用、これに纏わる汚職に、ようやくメスを入れはじめた。

農民の土地を違法に収用、不動産業者と結託して開発・転売し、不動産業者からの収賄と転売利益の分け取りを行う地方政府幹部や党政治委員の摘発に乗り出した。北京中央政府が16都市を調査したところ、新規建設用地の60％が違法収用であり、多いところでは90％に達していたという。

相次ぐ農民暴動の要因になっており、地方の不満が増大して党中央への批判が拡大する危機感を強めた胡錦濤政権は、ようやく各地で取り締まりに本腰を入れはじめた。

中国沿岸部と内陸農村の経済格差拡大が地方農民の不満として蓄積され、社会問題になっているという話は今や世界の常識である。加えて農地の違法強制収用と収賄による党の信用失墜は明白である。その実態について現地の何箇所かを見、諸データを基礎にまとめて参考に供したい。

一、統計外人口

日本のＯＤＡでポリオ撲滅のため農村部を巡回してワクチン投与に携わった日本人医師によると、計画出産委員会の統計数字に従ってワクチンを持っていくと必ず2～3割足らなくなる。何としても予防注射は打ってもらいたいから、実在する児童がみんな集まって来る。その児童数は政府（出産委員会）が掌握している数より2～3割多い。つまり、罰金を恐れて出生届けを出していない、無戸籍児童が2～3割いるのである。

農村は男手が欲しい。一人っ子政策だから女児が産まれると無届けにする傾向が強い。今は農民は2人まで許されるようになったが政府の出生男女の性別統計全国数は0～4歳で女1人に男1・19人、5～9歳で女1対男1・13と男の比率が高く、この傾向は農村部で顕著である。男女比の偏りは女児誘拐や人身売買の遠因になっている。

二、農民戸籍「農村戸口」

林立する高層ビル、終日大渋滞の高速道路、高級マンションに住んで外車の自家用車を乗り回す婦人や若者が、ネオンの繁華街に溢れる首都北京からわずか西へ240キロ、山西省大同市にある世界遺産の雲崗石窟を訪ねた後、これも有名な五台山の寺院群を参観するため約5時間かけて農村部を車で移動した。

土地は痩せ、水は乏しく、畑のトウモロコシは発育が悪い。日本なら家畜も食べないような貧相な出来。掘っているジャガイモはピンポン玉ほどの大きさしかない。尋ねると年間の現金収入は300元（日本円4000円）に満たないという。都市に近い農家ですらこのような状況であった。

甘粛省の蘭州市郊外、車で1時間ほどのところに黄河本流を堰止めたダムがある。深い山に囲まれたこの辺りには回族、蒙古族、チベット族や、もっと小さな幾つかの少数民族が、それぞれ小さな部落をつくって住んでいる。その奥山の崖に有名な炳霊寺石窟がある。

小舟でダムを渡り、対岸の石窟の近くで岸に立つと、小学4年か5年の女の子が近づいて、手を開いて中の小石を見せた。買ってくれという。ちょっと色が赤とか青だが普通の石。手のひらに握っている幾つかの石が1元（13円）だという。普通の石でも色の付いた石は河原でさがさなければ手に入らない。それだけ時間をかけて、いつ買い手が付くかわからないのに、石窟を観に来る客を1日中待っている。しかも売れて1元なのである。

「学校へ行かないの？」

「お父さんが病気。お金がない。学校へ行けない。やめた」

少女はハダシである。漢族ではない彫りの深い顔に眼が綺麗だ。

「家はどこ？」

「あっち……」

炳霊寺石像が刻まれた山の頂の、その向こうだという。

「ここからどの位？」

「歩いて、山を越えて2時間……」

私は、もうなにも言えなかった。10元札を出して渡そうとした。すると、

「要らない。石を買って！」

と叫ぶ。私は石を受け取り、10元札を手に握らせて石窟の方へ走り去るのが精一杯であった。

さて、中国には北京の中央政府を頂点に、省、市、県、郷鎮にまで政府機関が存在し、併せて共産党委員会の政治委員が支配している。少数民族の自治地域（自治区、自治州、自治県）では、少数民族が長であっても、党から派遣された漢族の政治委員が実権を握っている。

中国の戸籍は1958年制定の「戸籍登録条例」に従っている。外国人、無国籍者、現役軍人以外の全ての中国公民を対象に、中央から地方まで、各行政単位の公安機関が管理している。

この「戸籍登録条例」で定められた中国語で「農村戸口」と呼ばれる戸籍を持つ者が、「農民」である。これに対して、都市住民や農村に住む行政役人は「城鎮戸口」という戸籍を持つ。この戸籍制度は、日本の本籍登録と住民登録を兼ねたようなもので、つい最近まで農民は移動の自由が認められず、住所と本籍は必ず一致していた。

都市住民と農民の違い、城鎮戸口と農村戸口の違いは、天と地ほどの開きがある。中華人民共和国の建国過程で農民は、新国家が地主から取り上げた土地を、一定の範囲で使用権が認められた。その後、国の制度が整備されるに従って都市住民には労働者として賃金支給、福利制度（住宅・食糧・衣料配給制、年金制度、医療保険、失業保険、最低生活保障など）が付与された。

この福利制度は「城鎮戸口」の都市住民に適用されたが、「農村戸口」の農民は現在に至るまで対象外とされている。

人民解放過程では、先ず農民が最初に解放され、都市労働者は農民に比較して後から逐次解放され、福利制度も時間をかけて次第に整備されていったが、振り返って見れば、福利制度では農民は置いてけぼりを食わされている。

農民が病気になっても医療保険はないから高額の医療費が必要だが、そもそも村に医者がいない。病院がある町まで百キロ、巡回医療班は年2回という村もある。

農村戸口の者が城鎮戸口へ戸籍を変更することは、ほとんど不可能で、都市に転居することも禁止されていた。農地を離れ都市へ移っても食糧切符がもらえないから生きていけなかった。

学業と思想が優秀な農民子弟が、大学を卒業して役人や国営企業に就職出来れば「城鎮戸口」に変更出来る。しかし婚約者が「農村戸口」の場合、婚約者は結婚しても「城鎮戸口」に変更出来ない。

中国人は元来特権にあこがれ、特権を得れば振りかざし、特権にしがみつく習癖がある。「城鎮戸口」と「農村戸口」の場合も同じで「農村戸口」の者を見下げる偏見と差別意識が強く、右のような婚約は解消・破棄されることが多い。

三、「先富論」運用の誤り

鄧小平の改革開放政策「先に富める者から富めよ」は、その時点では正しかった。鄧小平は先に富んだ者に適正な税を納入させ、内陸の割食った地域の底上げを考えていたに違いない。

ところが後任の江沢民は、さらに沿岸部への投資を増加し、内陸農村部との格差増大を無視し、増加する税収は軍事費に投入し続けた。元来、軍との関係の薄い人物であった。軍を掌握しないと身が危ない。そのためには軍の要求を満たさなければならなかった。しかし、対外的には日本や米国に危惧を抱かしめ、国内的には農村部の不満を増大させ、加えて公害と環境破壊に拍車をかけることになった。

四、土地の収奪と農民の難民化

農民は、都市住民に比べて所得が著しく低く、しかも行政サービスを受けられない。しかも農民の方が税金、公共料金、教育費などの負担率が断然高い。

建国に至る過程と建国直後のスローガンは農村重視であったが、実は実権を握るための方便に過ぎなかったのか、現在の状況は〝生かさず殺さず〟で農民から年貢を取り立てた江戸時代のようなものである。

最近の大問題は、農地の強制収用である。中国農民が土地を失う、その失い方には幾つかパターンがある。

その一は、中国に於ける農民の土地使用権は、郷鎮（町村）政府の下にある村民委員会が台帳を作って管理している。農民が農業だけで食えないので出稼ぎに行く際、村民委員会に登録して土地を貸し出した場合、村民委員会がいい加減な処理や不正をして土地使用権の名義が移動してしまったり、登録書がスリ変わったりするなど、出稼ぎから帰って来てトラブルになるケースが頻発している。もともと手書きの台帳で、埃だらけになって棚に並んでいてパソコン管理など絵空事だ。

北京の直訴村には2万人ほどの人が屯している。その多くの陳情がこの問題である。

その二は、沿岸部経済発展地域周辺に於ける問題。

経済発展区とは元来、鄧小平が指定した深圳、珠海、廈門など国家級の経済特区であった。続いて各省一級行政府が法律に基づき経済開発区を制定した。次いで、それより下の市や県（郡・町。中国では県が市の下）が経済特区と称して内外企業を誘致した。中には法的に曖昧なものが混在している。

さらに、それを真似たのが県より下の郷鎮（村）政府である。ろくな補償もないままに農民から有無を言わさず使用権を取り上げた。抵抗する農民は村八分にし、簡単な造成（農民の住居の撤去程度）をして勝手に経済特区をつくった。法的には全くいかがわしい。それを当てにする国際ブローカーが存在し、税制優遇や安いインフラ使用料を口実に強引に誘致活動を行って、外国企業から多額の投資を引き出した。

私は瀋陽郊外を歩いた。大連からの高速道路４００キロが完成したばかりで、瀋陽から１００キロほどのその村は、以前は広大な農地であった。現在は草ぼうぼう。香港資本が購入済という工業用地になっていた。

〝農民から使用権を買い上げて転売する〟それが〝党政治委員、政府役人、地上げ業者の癒着、贈収賄が横行〟という錬金術になり、郷鎮政府は経済特区づくりに狂奔するようになる。農民の土地が〝強制収用〟されて、特区づくりに充当されるのである。

〝強制収用〟の好結果をもたらした例としては、国家級特区「上海」の都市拡張のための周辺農地収用（使用権返還）があげられる。土地を提供する農民に対して法律に基づく補償を行ってバランスを取った。上海市政府は該当する農民70万人に「城鎮戸口」を与え、都市住民として社会保障の対象に組み入れた。

大都市の失敗例としては「南京」があげられる。空港周辺を経済特区に指定した。行政側は土地使用権を持つ農民に集合住宅を提供し、立ち退き費用

として1戸当たり30万元を支払った。農民は30年分の年収を超える現金を手にした。

転職した者は少数で、ほとんどが浪費、賭博、無謀な投資に走り、使い果たしてしまった。土地を失い、仕事もなく金もない。上海のように「城鎮戸口」に転籍していないから社会保障など一切ない。ほとんどが難民化するしかなかった。

郷鎮（村）の地上げでは農民のほとんどがこのケースで、大都市周辺よりはるかに少ない金額と引き換えに土地を失っている。

土地を失った農民は、収入の活路を求め、農村を捨てて都市へ流入する。当局の統計数字では上海に300万、北京に250万以上が他省から流入している。この数字は政府が掌握して「暫定居住許可証」を発行した数字であり、実際は2倍近いとされる。

土地を失った農民難民のほとんどは家族と共に農村に別れを告げ、都市へ流入する。問題は流れ込んだ難民労働者が連れてきた子供の教育である。

例えば上海市では、上海の「城鎮戸口」を持たない、「農村戸口」のままの、或いは無戸籍の（出生届を出していない）子供が数十万人いるが、この子供達の教育について、上海市政府は沈黙している。

流入した難民労働者は仕方なく、出身地ごとの互助会を組織し、自力で私立学校をつくった。組織母体が難民だから資金は極端に不足している。掘っ建て小屋に裸電球がぶらさがる教室に百人もの学童がひしめき合って勉強している。図書館、運動場、給食など望むべくもない。何の行政サービスも受けていないのに、逆に上海市当局からは安全通学費など理由不明な名目の負担金を徴収される。やむを得ず学校は維持費を含めて学費を徴収する。子供も家計を助けなければならない貧困な家庭である。おんぼろ学校でも、子供の4割ほどは通えないという。

上海は高層ビルが林立し、空港から市内中心まではリニア列車が運行し、日夜繁栄と拡大を続け、市民は裕福になって繁華街は深夜まで活況を呈している。しかし、その谷間に迷路のような路地が縦横に走り、繁栄とはまったく無縁の、ゴミのあふれた、水洗便所もない、不衛生な場所に300万とも500万ともいわれる、食うや食わずの農業難民とその家族が住んでいる。

中国の改革開放政策が動き出し、上海など沿岸大都市が国家級開発特区に指定され、急激に開発が始まった。一方、農村では豊作を理由に農産物の政府買上げ価格が引下げられ一時活況を呈した郷鎮企業が一転不振に陥って、農民はどう切り詰めても生活できなくなった。農民は、やむを得ず開発が進む沿岸大都市へ出稼ぎに行った。男は建設労働など肉体労働者に、若い女は新しい民営工場の女工になって働いた。これが農民移動の始まりであった。

当初は必要な労働力調達のため、雇用主は農民労働者をそれなりに待遇したが、出稼ぎではなく土地を奪われた農民が流入する段階になると需給バランスが変化した。雇用主は「移動禁止」の法律を破って流入する農民の弱みにつけこんで労働単価を引下げ、帰り場所のない元農民労働者（難民）の生活は厳しさを増した。資本主義前期の様相である。

10年前の10歳で連れてきた子供は20歳になっている。親が上海に来てから生まれた子供も10歳前後になっている。この子供たち、難民二世たちも「城鎮戸口」の恩恵とは無縁だから、労働待遇は親と同じ厳しい差別の下に置かれ、社会保障は何も受けられない。

この子供たちが、ネオン輝く上海の夜の街に出ると、都市の同年の若者や子供たちが、華やかな生活を享受しているのを目の当たりにする。最先端のファッションを身につけた若い女性が1杯500円のコーヒーショップでデートしている。満員だ。彼らは200㎡の豪華マンションに住んでいる。流入農民は水道もトイレも共同の12㎡の部屋に家族4人で住み、日本円換算月5千円そこそこの生活をしている。

彼らにこの矛盾の原因を見極める能力はない。しかし不満は鬱積する。きっかけがあれば何に向かってでも爆発する。反日暴動がその例である。矛盾の元凶が、自制が効かない自由主義経済で突進しているのに、政治は共産党独裁を維持しようとしているところにあることはいうまでもない。

五、実際の格差は30対1

都市と農村の所得格差は、中国中央政府の統計では3対1と公表されているが、実際の格差はおよそ30対1と計算される。

前述のように農民には、生活最低保証、失業保険、養老年金、医療保険など、農村に住んでいても都市に住んでいても、都市住民が享受しているような社会保障は皆無である。

農家では、現金収入の約3分の1は次年度の種・肥料・農薬等の購入に充て、「税金」以外に法律で定められた「制度内費用」を支払い、さらに所属する地方行政単位から各種の「制度外

費用」を徴収される。

中国では日本の農業協同組合のような政治的圧力団体は存在しない。だからFTA交渉では農業利害が犠牲になり、WTOでは農産物関税をあっさり受け入れた。農民の声は反映されず、というより声を出す組織も持たない、持つことを許されていないのである。人口の6割強を占める農民だが、03年第10期全人代の選挙区代表比率は農民1に対し都市戸籍の人が4である。

中華人民共和国建国の基礎は、農民の解放と福利に置いて革命の成功につないだはずだが、現実には農民は都市労働者と同格どころか、労働者の範疇にも入れられない差別を受けている。毛沢東が農民を味方にして建国を遂げたのは、共産党が天下を取るための方便だったのか、と言いたくなる。

六、制度外費用の徴収

00年、当時の首相朱鎔基は政府の公式数字として農民の総負担額は年間1200億元、その内訳は農業税300億元、合法的費用徴収600億元、非合法な制度外徴収300億元として、負担軽減のため農業税を廃止する方針を打ち出して検討を始めた。ところが社会科学院が内部で使っている数字は、農民負担額4000億元、そのうち合法的な費用徴収1200億元であった。中国の統計は恐ろしい。

農業税は人民公社に対して58年から施行された。80年代に人民公社が解体されて個人農家になったが、農業税は個々の農家に対する課税として継続された。

農業税とは、米、麦などの食糧作物及び錦花など経済作物の生産額に対する課税で、全国平均15・5％。これ以外の果物、茶、水産物等（タバコを除く）には農業特産税として14・5％を徴収。

農民自身の住宅であっても、非農業用途の建物には耕地占有税として1㎡当り1元～10元。家屋や畜舎などの賃貸に対して契約税を課税。豚、牛、羊など家畜の解体処理・売買に対しては1頭2元～10元の屠殺税を徴収。

これら様々な課税による農民からの税収の年々の伸び率は、国家全体の税収の伸び率や都市住民が支払う税収の伸び率より上回っている。

さらに問題は、地方政府の権限で農民から徴収する合法的な税金「制度内費用＝五統三提」である。

五統とは、郷鎮政府が徴収する教育費、退役軍人慰労費、民兵訓練費、道路建設費、計画出産管理費の5種類である。計画出産管理費は一人っ子政策遂行経費で、妊娠した女性を超音波機器でチェックする費用。地方によっては胎児の性別によって強制堕胎を行っている。

三提とは、郷鎮政府の下部組織である生産大隊即ち村民委員会が農民から徴収する各種費用で、公的積立金、公益金、行政管理費の3種類に分類される。もっともらしい名目であるが、実態は村のボスの給料や退職金であり、それを農民が支払う仕組みである。

五統三提に対して農民は、1人当たり年間約百元（純収入の約6％に当たる）を支払っている。

ところが農民の負担はこれで終わらない。郷鎮政府や村民委員会は既述以外に「制度外費用」の支払いを農民に強いている。俗に、「乱収費」という。

乱収費とは、五統三提に組み込めない費用を農民から徴収するもので、道路費用、電力費用、学校建設費用、結婚交渉費用、住宅建設管理費用などである。例えば結婚交渉費用とは、村民委員会が発行する結婚証明書に支払う費用。道路費用の一例は、村の道路に関所を設け、見張り役人が、通過する車、オートバイ、自転車、荷車などから通行料を徴収するもので、中央の政令では違法行為だが地方では堂々とやっている。何でもかでも理由をつけて金を徴収する地元役人の、やりたい放題である。徴収した金が地元の福利に還元されているなら納得しないでもないが、役人の特権的費用に当てられている傾向が強い。

加えて道路建設や補修工事、河川の護岸工事、学校建設などに、農民は無償使役を強いられる。言い換えれば農村のインフラは農民自身で建設しなければならない。ここにも都市住民との大きな格差がある。

七、義務教育の格差

中国の義務教育は9年制で、完全実施していると中央政府は豪語する。実態はどうか。

たしかに都市に於いては100％国の財政で負担しているが農村は事情が違い、大変な負担を強いられている。

中国全体の小学校の80％、中学校の60％強が農村にあるが、中央政府による農村の義務教育負担率は2％に過ぎない。負担の内訳は中央政府2％、省政府11％、県市政府9％、残り78％は郷鎮政府が、五統三提の制度内費用で農民から徴収した税金で負担している。制度内費用だけでは足りないので、さらに農民から制度外背用として取り立てている。

しかも都市と農村の格差・差別は、

例えば1人当たり教育費について、上海市の1862元に対し貴州省は200元というように、100%義務教育費を政府負担にしている都市の受益額のほうが結果的に大半を自己負担している農村部の受益額をはるかに上回っている。

中央政府は農民の負担軽減のため、制度外費用の徴収禁止と義務労働賦役禁止を下令したところ、郷鎮政府は真っ先に義務教育費を削減した。その結果、農村の学校教師の給料未払い問題が多発してしまった。

現在、農村の9年制義務教育普及率は甘く見て85%程度と推計されるが、それも登録学齢児に限ったことで、一人っ子政策の犠牲になった無戸籍児童はカウントにも入らない不就学児である。

八、役人天国と二重権力構造

胡錦濤政権は、いびつになった富の再配分に危機感を抱いて弱者対策を強調しているがうまく進んでいない。

中国は共産党一党独裁の一枚岩だから、中央政府の号令一下、末端まで浸透するかというと、そうはいかない。実際には地方に権力者が跋扈して、一筋縄ではいかない。面従腹背。既得権を守る抵抗は手強いのである。

役人は、上は首席から下っぱ役人まで、権力を持てばそれなりの余禄もある。国、省、市、県、郷鎮と網の目のように張りめぐらした行政機関が抱えている役人の数は、べらぼうに多い。

彼らは行政機構にしがみついて非効率な仕事をし、理由を付けた宴会の飲食に公金を使い、郷鎮政府の役人でも運転手付の高級車を乗り回す。まさに役人天国である。一方で、郷鎮にいたるまで各レベルに共産党委員会の書記以下の党機関が存在し、これが「裏の実力者」という二重構造になっている。この二重構造の中で、行政と党の思惑が交錯し、重なった権力になったり、両権力が駆け引きして実にややこしい。しかも党幹部の大部分は都市出身者である。

「農民に学べ」と号令した毛沢東は農民出身であった。知識分子に先天的反感を持っていたが、その実、農民をも軽蔑していたのではないか。農民を生かさず殺さず、組織化させず、知識を与えず、不平等な現実を知らしめない。3千年中国歴代王朝の愚民政策と蔑視・差別が現代に尾を引きずっている。中国の本質を見るようである。

☆　☆　☆

おわり

昭和59年（83年）から21回の訪中では、心がけて農村部を歩き、制約が多い中で可能な限り僻地の観察に努めてきた。最近10年間の目を見張る大都市発展の裏に、地方農村部の疲弊、河川の汚濁、ゴミの無法投棄などを見るにつけ寒心に耐えない。元上海総領事・故杉本信行氏著「大地の咆哮」を読み、我が意を得た。本文中の数字と幾つかの事例は同書から引用させていただいた。

☆　☆　☆

「編補注・3月16日付け読売新聞の報道によれば、中国の第10期全国人民代表大会（全人代＝国会）第5回会議は、3月16日に閉幕したが、同会議で、私有財産保護を明記した「物権法」が採択され、制定の運びとなった。同法は、私有財産について「個人はその合法的な収入、家屋、生活用品、生産道具、原材料などの不動産および動産の所有権を有する」と規定し、また、「個人の合法的財産は法律の保護を受け、いかなる機関・個人もこれを占有、略奪、破壊することを禁じる」と明確に法的保護を謳っているのが特徴である。更に、現在は私有を認めていない土地についても、農地などの使用権の期間延長や譲渡を許容し、実質的な「個人資産」と見做している。

中国共産党は、1949年に政権を掌握した後、急速に公有化を進め、文化大革命中は、私有財産自体を否定した。改革・開放後、個人の財産所有は認められるようになったが、法的保障は未整備であった。その意味で、物権法の制定は画期的な意義を待つ。

著しい高度経済成長で、国民の所得水準は大幅に上昇し、多くの国民がマイホームなどそれなりの個人資産を所有するようになり、私営企業家ら富裕層も続々誕生する中で、動産・不動産をめぐる権利関係は複雑化した。所有権等に関する民事訴訟は年間で約26万件（05年）にも達し、私有財産保護の法整備は喫緊の課題となっていた。

私有財産保護が法的に保障されれば、経済秩序や民心の安定が促され、国家目標の「調和社会」建設にも弾みがつく。胡錦濤政権が物権法制定に踏み切った背景には、そうした政治的目的がある。中国共産党にとっての最優先課題は、経済発展とそれをテコにした政権基盤の強化である。物権法の制定はその一翼を担うものと位置付けられるが、社会主義体制存続の面では、私有財産権の明確化で「社会主義の空洞化」は更に進行し、市場経済に見合った政治改革が行われないという体制矛盾を一層露呈させていくことになるであろう。」

水上特攻「大和」生き残り体験談
―熊野渕龍寺住職中道豊洲氏のお話―（聞き書き）

藤田　幸生（幹候16期）

「編注・本稿は、財団法人水交会の機関紙「水交」平成19年1月号に掲載された、当協会理事藤田幸生氏の投稿記事で、同理事及び水交会のご了承を得て転載させていただいた。」

日本海軍のシンボルでもあり、水上特攻隊旗艦として沖縄方面に向け出撃、東シナ海に壮絶な最期を遂げた「大和」。日本が「大和」を造ったという事実と、その最期の様子は、半世紀以上を経た今も、日本人のＤＮＡを揺さぶるものがある。

これは、「大和」の生き残りである熊野渕龍寺住職中道豊洲氏（和歌山県田辺市在住）から、平成十八年七月二十二、三の両日に亘って聴取した、「大和」での体験談の要旨です。文責は全面的に自分にあることをお断りしておきます。（藤田）

はじめに

私は、大正十二年五月の生まれで、特攻隊員たちと同じ世代である。幼い頃に両親を亡くして家族は居なかった。神戸の小さなお寺で育った。そこで中学校まで卒業して、それから京都の南禅寺で修行した。そこから戦争に行った。

戦後は南禅寺に帰り、そこから立命館大学に行かせてもらった。昭和五十五年に京都から単身赴任でこの渕龍寺に来た。そのとき五十七歳であった。小学校を卒業したとき出家して寺で育ったので、寺に帰ったことになる。

海軍へ

昭和十八年十二月に海軍に入り、練習艦「鹿島」乗り組みになり、十九年の春から秋にかけて南西諸島方面の航海に出た。

それから、横須賀楠ケ浦にあった海軍砲術学校に入った。砲術学校は、校門が暗いトンネルのようになっていた。当時の校長は、海軍少将小畑長左衛門、教頭が当時大佐の高松宮殿下であった。

砲術学校の「砲術班」の課程は大砲が担当で体格が良い人ばかりだった。私は身体が小さくて目が良かったので「測的班」となった。

大　和

砲術学校を出てすぐ「大和」に乗り組んだ。昭和二十年三月で、出撃の直前だった。特別幹部練習生という制度のおかげで既に下士官になっていた。

「大和」の測的分隊には「測的班」と「幹部班」があった。

幹部班は、電子計算機の担当であった。「大和」は、艦底の一番底に射撃盤があった。それが「中央制御装置」、言うならば「電子計算機」だ。

こんな射撃盤を私は初めて見た。最新兵器だった。「大和」については、全長、全幅、高さなど大きさばかりが言われているが、こんな射撃盤も積んでいたのだ。

幹部班の、名古屋の工業学校出身の者が、「一度見に来い」と言うので見に行った。

「裸足になれ、靴下を脱げ」と言われた。床は、リノリュームだった。室に入ると冷やっとして冷房が入っていた。「この機械は、埃を嫌うんじゃ」と言っていた。

部屋には、ずらーっと計算機が並んでおり、そこでみんな計算をしていた。その計算結果が方位盤に伝えられ、狙いをつけて照準を合わせ、上の方位盤射手が引き金を引くと弾が出る。照準が合わないと弾は出ない。

海軍きっての名射手といわれた特務士官の村田元輝大尉の話を、呉で聞いたことがある。山口県出身で、レイテで米海軍の空母「ガンビア・ベイ」を沈めた人だと聞いた。

「艦橋の方から、早く撃て、まだかまだか、と言ってくるんじゃ。照準が合わないと弾は出ん」と言っていた。

『戦艦大和の最期』を書いた吉田満少尉は徳島県出身で、「大和」では私と同じ十一分隊で測的分隊であった。彼は分隊士で、電測班（レーダー）であった。

三月に乗り組んだとき、吉田少尉に電波探信儀を見せてもらった。横須賀砲術学校の時には実物が無く、理論のみ習っていた。実際に電波探信儀を見せてもらったのは初めてであった。

「これがブラウン管というものだ」、テレビのブラウン管が出たのは、昭和二〇年代後半だろう、私達は昭和二〇年当時すでに知っていた。その頃のブラウン管は線グラフのような表示だった。映る信号は、飛行機は早く動き、艦艇はゆっくり動く。目盛の動く早さによって判断していた。

私は、測距儀の測的担当で、艦橋トップの方位盤の下にある測距室に居た。吉田少尉の居る電探室は、その裏側にあった。

測的担当といっても、測距儀の操作は、させてもらえなかった。それは、何十年も海軍の飯を食ったベテランが担当していた。

航海学校出のベテランの上等兵曹は、目標を右目で見て指をあて、左目に変えて目標の見え具合の変化を測り、目標までの距離を出していた。正確で、神業であった。海軍の下士官にはそのような名人が居た。

私の場合、固定の双眼鏡が配置であった。それで敵艦の走っている針路と、速度を計測する係である。

艦の中には、いろいろな機械、装置が一杯あった。「大和」の乗員は約三三〇〇名だったが、どこも予備員無しであった。みんな戦闘配置を持っていた。思えば大和の乗組みで生き残った者は極めてわずか、一割弱に過ぎなかった。

主砲の方位盤射撃は、この艦橋トップで引き金を引いていた。担当は、海軍志願兵から叩き上げられた上等兵曹と特務士官であった。

あの時分の日本のレーダーは性能が悪く、レーダー射撃は出来なかった。だから、電探室は見張り所みたいなものであった。「左舷何万メートル、航空機らしきもの、敵機らしい。」程度の報告しかできず、米海軍に比べて相当遅れていた。

その前のレイテ沖海戦の時には、「大和」はまだ電探を搭載してさえいなかった。だから、ブルネイから出撃した遊撃部隊は、めちゃくちゃやられたのだ。

出　撃

沖縄に向けて呉を出港する前、乗員みんなに、「飲み屋の借金など支払い、身辺をきれいにしておけ。遺書も書いておけ」という指示が出た。しかし、私は、遺書は書かなかった。書かない人が多かった。

髪や爪は、送らなかったが、最後の上陸のとき、下宿のおばさんには、「次には、中味は空っぽの白木の箱で帰ってくるので、田舎に送ってくれ」と言って預けておいた。

出撃前日、三田尻沖で、「総員上甲板」があり、艦長の訓示があった。「明一六〇〇、沖縄向け出港、燃料片道、髪の毛、爪、遺書を封筒に入れて家に送れ。」というようなことであった。

戦　闘

「大和」は、カーチス（編注＝ヘルダイバー艦爆）とグラマン（編注＝アベンジャー雷撃機）にやられた。グラマンは、雲の中からまっすぐ突っ込んで来て攻撃し、反転して急上昇していった。対空砲で撃っても、なかなか落ちなかった。

艦橋のトップすれすれを飛ぶときは、搭乗員の顔が見え、我々の目の前で手を振った。舐められていて歯がゆかった。日本に「大和魂」があれば、やはりアメリカにも「ヤンキー魂」があると思った。歯がゆかったが天晴れでもあった。

戦闘中、測距室に居ても水上戦闘ではないので役に立たなかったが、「大和」の測距精度は良かったという。九一式徹甲弾も、良かった。別名「水中弾」である。水面下を一〇～一五メートル走る。だから一〇メートル手前に着弾しても当たる。機密弾だったらしい。

しかし残念ながら、この最後のとき「大和」は、主砲を使える機会は殆んど無かった。主砲は、打っていない。打てなかった。飛行機が、かたまって来たら三式弾（編注＝時限信管により調定した秒時に炸裂する対空弾）が効果を発揮したのだろうが、それも敵機が水平線附近で三～五機の小編隊に分かれて、左右から入ってきたから、それ程の効果は期待できなかった。

魚雷は、四方八方から、前後からも左右からも、斜めからも来た。相手も考えていて、最後には、「大和」の左舷を集中的に狙ってきた。あれは、レイテ海戦で「武蔵」を沈めたときの教訓であろう。「武蔵」は、両舷に攻撃を受け左右共に浸水したため、転覆しないで艦首から沈んでいった。沈むのに三～四時間かかったので、その間応戦もでき、駆逐艦を横付けしての乗員救助もできた。

「大和」は左舷に集中攻撃を受けて大きく左に傾き、駆逐艦も傍らに行けなかった。右舷が上がって、左舷は波を被っている。何時転覆するか、また、何時爆発するかも判らなかったので、近付くことも出来なかった。乗員の救助はできなかった。

沈　没

さて、「大和」がいよいよ沈むときの状況である。私は、「総員退艦」という命令は、聞かなかった。ぎりぎりまで頑張っていたので直前まで号令は出ず、そのときには既に電気や通信の回線も通じていなかったため伝わらなかったのだと思う。でも、皆最初から「片道燃料」と聞いて、髪の毛や爪を切って家に送っているので覚悟はできていた。

「大和」は、左に大きく傾いていた

が、そのような状態でも高角砲員は、胸まで浸かりながら射撃していた。艦が三〇度から四〇度傾き、敵の飛行機が居なくなっても撃っていた。

艦橋の上から見ると、右舷に人がいっぱい、かたまっていた。測距の者が、「それじゃ、出ようか」と言って、室から出てみると、艦橋は傾いていて、下にはもう降りられない。下を見ると、皆、悠然としていわゆる「死に煙草」を吸っていた。私も、「もうあかん」と思って、測距室の手すりにつかまり「死に煙草」を吸った。吸いながら下を見ていると、海から盛り上がるようにウワーと泡が出てきた。艦内の空気が抜けたのだ。そうなると、沈むのは早かった。鳴門海峡の渦のようなものができた。

私の目前で、士官が軍刀を持って飛び込んだが、錐もみ状態になって、ワーッと舞い込んでいくように吸い込まれていった。

私は、「これはいかんな」と思い、手摺りをしっかり持って、仁王立ちになっていた。そのまま沈んで、渦の中に引き込まれた。そのうち事も離れ、ぐるぐると渦の中に巻き込まれていった。何をしようにも、動きがとれなかった。巻き込まれていくうちに、鼻から、口から水が入ってきた。

「よし！舌を噛み切ってやれ」と思って噛み切ろうとしたが、歯並びが悪いため、それも出来なかった。気が遠くなった。そのうち、目の奥が真っ暗になり、次に何か涅槃（ねはん）の世界のような蓮華畑、菜の花畑が見えてきた。そのうちに死んだ母親の顔が出てきて気を失った。

漂　流

ハッと気が付くと、自分の身体が、水の中を魚雷のように走っていた。周りを何かが「シュンッ、シュンッ」と走っていた。息は出来ない。そのうちに周囲が、火薬のきな臭い匂いになり、海の上に出ていた。

浮き上がったとき、米軍機の機銃掃射を受けた。これは、国際法違反だ。日本も、比島沖で米海軍の艦を沈めたとき、機銃で漂流中の乗員を撃った事例があるそうだ。そのときは、副長の命令で中止したという。

海面は、水しぶきが立っていた。火薬の匂いと煙で真っ黒け。黒い煙の中で、海面の水飛沫が見えた。近くに柔道の畳が浮いていたので、それに乗った。周りに浮いている者が居たので呼び集めた。

そうして皆で漂流していたが、畳は三時間くらいしかもたなかった。ハンモックだったら、もっと浮いていただろうが、「大和」は、もう「折畳み格納ベッド」になっていたのでハンモックは浮いていなかった。三、四時間経つと、畳は水を吸って沈んでしまった。

海面は、重油が、四～五センチの厚さで流れていた。顔も頭も首も油でベトベトだった。油を飲んだので、咽喉がハシカイ（編注＝いがらっぽい）。咳が出た。皆疲れて眠くなる。最初は、ビンタをはって気合いを入れていたが、そのうち知らぬ間に力尽きて沈んでいく者もいた。

一四二三に「大和」が沈んで、二〇〇〇頃、まだ薄明るかったとき、駆逐艦が見えた。戻ってきて自分達の周りを回っていた。そのときはまだ、そのまま沖縄に行くのだろうと思っていた。「自分達は、どうせフカの餌だろう。」と諦めていた。そうしたら、二〇〇～三〇〇メートル先に停まり、カッターを降ろし、手旗で「近くのものは、泳いで来い」と言ってきたので、駆逐艦の横まで泳いで行った。

傍らまで行くと、縄梯子やロープの周りに、人が群がっていた。よく見るとロープに木片を括り付けて流していた。それに掴まろうとしたが、艦首は高いので艦尾に回り込んでいくと、艦上の水兵から「前へ行け、前へ行け。後ろはスクリューが回っていて危険だ。」と言われた。駆逐艦は、敵の潜水艦に備えて何時でも動けるようにしていたのだった。

早くしないと日が暮れるし危ない。また艦首に回った。やっとロープを握り、上がろうとすると、重油で手が滑る。何度も途中まで行って滑る。そのうち手の皮が破れたが、塩水で感覚は無い。上から「ロープで身体を縛れ」と言ってきた。それでやっと甲板に揚げてもらうことができた。

それが、「冬月」という横須賀の駆逐艦であった。上がってみると、デッキの上で多くの人が死んでいた。上がるとホッとして安心するのであろう。助けられてから皆、ガクンとなる。だから、ビンタを張って活を入れていた。

四月でもあり、その晩は寒く、毛布にくるまって、酒をがぶ飲みした。そのとき周りから「お前、大丈夫か。眉間から血が出ているぞ」と言われて初めて自分が怪我していることを知った。

看護科へ行くと、ヨードチンキをちょんちょんと塗って、「鉄片が入っている。佐世保に着いたら抜いてやる」と言われた。そのとき、看護科の周りは、血の海で、風呂場は死体の山であった。

帰　投

その夜、「冬月」は、全速で佐世保に帰った。しかし、「冬月」が動き出したとき、漂流者全部を救助できてはいなかった。私が、「まだ、あそこに浮いているじゃないか」と言ったところ、甲板士官にピシッと叩かれ、「貴様分からんのか。時間が無いんじゃ、時間が！」と言われた。

それ以上救助作業を続けると、暗さも増すし、生存者を捜すために探照灯を照らせば敵の潜水艦に見つかり自分がやられる。仕方が無い、見殺しだ。戦争とはそんなものだ。平時なら、いくらでも捜すし、救助するだろう。戦争とは過酷なものだ。

洋上慰霊祭

平成十七年は、「大和」沈没六〇周年に当たるので、洋上慰霊祭をやろうということになった。

船は、大島汽船の「サンシャインふじ」だ。これを借り切って、「大和会」等の全国の遺族から希望者を募集し、徳山港から乗せて出港した。当時、大阪にあった「大和会」の事務所から私に電話があり、「中道さん、あんた、導師をやってくれ。」と言われた。私は、

「こんな田舎坊主には出来ない。堪忍してくれ。もっと他に立派な人が居るだろう。」

と断った。そうしたら、

「そんな間に合わせの坊主は要らん。あんたが、一番良いんじゃ」

と言われた。

「しかし、私が行ってもお経にならんぞ。」

「なんでや。」

「泣けて、お経になるか。解らんのか。」

「それが、ええねや。それでええ。あんたが手を合わせれば、ただそれだけでええ。」

と言われた。そこまで言われると行かざるを得ん。

「よっしゃ、分かった。行きましょう。やりましょう。」

ということになった。そうして行ったら、その洋上慰霊祭には、沢山の遺族が乗ってきた。

中に八十歳を超えるお婆さんがいて、水兵服を着た自分の子供の赤茶けた写真を持って来ていた。「この子は、おはぎが好きやった」と言って「おはぎ」を作って持ってきていた。戦時中は砂糖も無く、美味しい「おはぎ」も作れなかったから。そして「この子を知りませんか」と、知っている人は居ないかと探し廻っていた。しかし、約三三〇〇人も乗っていたわけで、分からなかったようだった。

洋上慰霊祭では、船は、その地点で右回りに回りつつ行事をした。艦が沈むときは、可能な限り艦首を北に向ける。人と同じだ。

最後になって、船上でお経を上げているところへ、みんなが残っている卒塔婆や、お酒やビールなどを持って甲板に上がってきた。一人の奥さんが、「あっ、忘れ物をした」と言って、何か船室に取りに行った。戻ってきたのを見ると、持ってきたのは、黄色い紙テープだった。その端を持って、船の手摺りから下の海面に向かって投げた。そして、テープが海面に着くなり、声を限りに叫んだ。

「たけぞうさあん、たけぞうさあん。もう、お船は帰りますよう。早うテープにつかまってちょうだい。おうちに一緒に帰りましょう。早うつかまってちょうだぁい……」

もう、涙、涙でお経にならない。ほんとに。鐘を鳴らすだけだった。

それから船は、徳之島の亀徳港に向かった。夕方だった。あくる朝の〇九〇〇頃、徳之島に着いた。その日は、島の浜辺で昼飯を食べた。大きなホテルは無いから、民宿に分宿した。

翌日、伊仙町の犬田布(いぬたぶ)岬で慰霊祭をした。磯の上に、「陽炎観音」がある。慰霊碑（※注）は、「大和」の艦橋の後部マストを模しており、上向いて合掌している形をしている。あそこに、沢山のご遺体が流れ着いたという。「大和」乗員を含め、第二艦隊の戦没者の手、足、胴、首…、それらを島の人々が、葬ってくれたらしい。

中道老師と藤田

おわりに

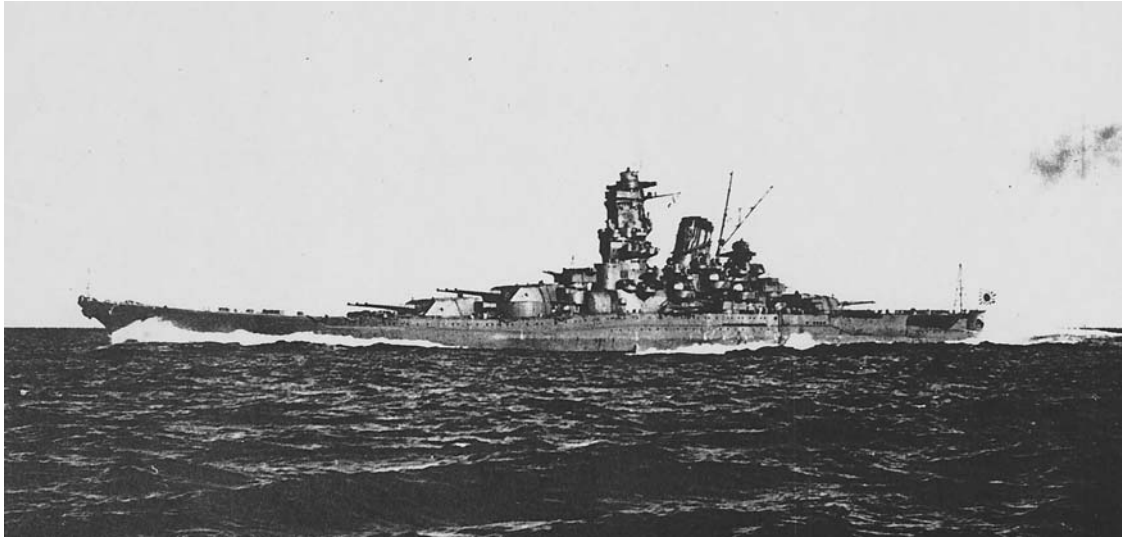
私は、二回、洋上慰霊祭の導師を務めた。一回目は、四十三回忌のときであったと思う。このときは、「大和」の沈没地点が判って、遺族の皆さんから、矢のような催促があって実施した。二回目は、六〇周年の二〇〇五年である。「もう皆、年寄りばかりなので、ぜひ」という声が多かった。私も行った。

「大和」の遺族・戦友の会である「大和会」は、司令長官の副官であった関西在住の石田恒夫会長が中心であった。

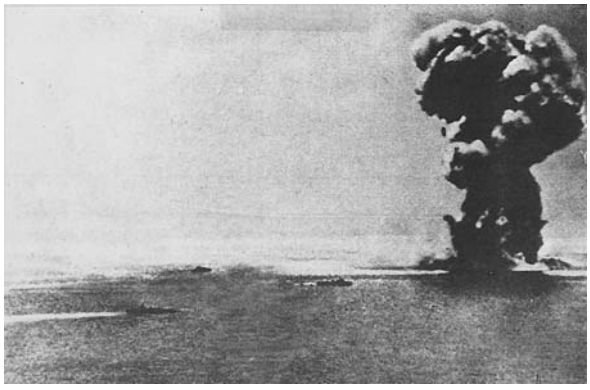
彼等は、ここ熊野にも何回も来た。海軍は気が合うし、どことなく家族みたいな雰囲気ですぐ集まる。「大和会」も、会長の石田さんが亡くなってから、大阪の事務局を閉じた。事務局は、呉に移った。

『男たちの大和』を京都で見た。あの映画は、ほぼ忠実に描かれていると思う。見た知人は皆、泣いたと言っていた。しかし、実際はもっと凄まじかったのだ。

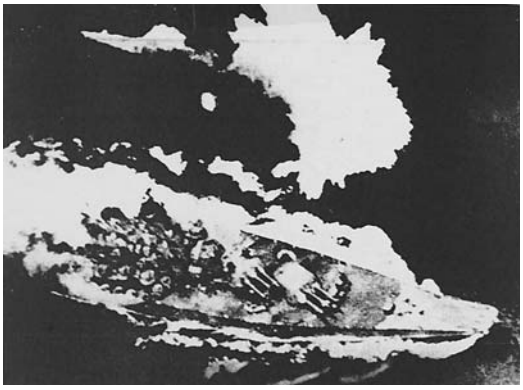
※　この犬田布岬にある「第二艦隊戦没将士慰霊塔」は昭和43年の建立で、既に40年近くが経過して傷みが酷いため、現在再建のための募金を実施中である（本誌17年9・10月合併号34頁参照）。
募金は1口千円からで、振込先は、口座番号〇一七九〇・五・九三八七〇（前述記事中の番号は誤り）加入者名「（トクヒ）ボランティアネットワーク徳之島」



昭和16年10月30日、宿毛湾沖標柱間で全力公試運転中の大和（その３）――ワシントン海軍軍縮条約による海軍休日の期限終了を迎えて、日本海軍が建造した戦艦大和型のネーム・シップである。史上最大の艦砲である45口径46センチ砲を９門搭載、同砲弾に対する十分な防御を備え、速力27ノットを発揮、基準排水量は64,000トンに達し、人類がつくりあげた最大、最強の戦艦であった。なお、この時の状態は69,304トン、151,700軸馬力、27.3ノットである。



▲戦艦大和の最後（その２）――大和の最後となった大爆発により、高さ2,000フィートにもおよぶ巨大な茶褐色のキノコ雲が、大艦巨砲主義の終えんと日本海軍水上部隊の最後を象徴するかのように、上空に立ちのぼった。すでに船体のほとんどは海中に没し、司令長官伊藤中将、艦長有賀大佐以下2,498名の乗組員が、艦と運命を共にした。大和の最後を見とる３隻の駆逐艦は、左から霞、初霜、冬月である。



▲後部に被害をうけた大和――米機第一波の攻撃により、大和は後檣ふきんに急降下爆撃による中型爆弾２発の命中をうけ、後部射撃指揮所、後部副砲、一三号電探に被害を生じ、さらに左舷前部に魚雷１本が命中した。写真はこの時期に撮影されたもののようで、後部副砲塔ふきんは爆弾命中により発生した火災の煙につつまれ、左舷側には至近弾の水柱が上がっている。

（注・上掲の写真はいずれも潮書房1981.6.15発行「丸スペシャルNo.52戦艦大和・武蔵」より）

郷土の先輩軍神岩佐海軍中佐・義烈空挺隊の奥山隊長

会員　高橋　啓作（前橋在住）

過日当県の軍恩連盟の新年総会を行った際、私の地元前橋の軍神岩佐海軍中佐の展墓の詩を吟じたところ、軍恩生活者のうちにもこの英霊を知らない者があって、吃驚した次第でした。

註　岩佐直治中佐は開戦時真珠湾を攻撃した特殊潜航艇の艇長。

私は陸海の別はあっても、軍神の至誠、即ち殉国の丹心に感銘する余り、終戦以来毎年この日の晨を期し墓参を行っておりますが、忘れてならない靖國の「みたま」に対する、我ら日本人のつとめと信じております。

この度田中賢一氏著「**陸軍挺進部隊外史**」を読んで特に感銘したのは、義烈空挺隊にみる特攻隊員の死生観という一節で、半歳に亘る長期の間、戦況の推移により死期を延引する奥山隊長らの精神的苦悩、変わらぬ殉国の丹心は筆舌に尽くし難いものがあります。

さきの岩佐中佐らが決行の日を待ち続け、挫けることなく猛訓練に励む気迫にも共通して、只管国を念い国を愛する国家観以外何ものでもないと思います。しかも奥山隊は特攻隊に指定された一三六名が、六カ月の長きに亘り一名の脱落者もなかったことなど、語ってもなお語りつくせないもの、真の日本人ここにありと後世に伝うべきだと信じます。

殉国の英霊を祀る靖國神社に日本の総理大臣が参拝することに、難癖をつける中国や韓国など、徹底的に反撃しなければならない。

岩佐中佐遺詠　御両親宛て遺書に

桜花散るべき時に散りてこそ
大和の花と賞でらるるらん

身はたとえ異境の海にはつるとも
護らでやまじ大和皇国を

拙詩御参考までに

有感展岩佐海軍中佐墓

賽客期晨展墓前
軍神鎮処篆烟旋
真珠院殿名不朽
殉国丹心竹帛伝

岩佐海軍中佐の墓に展じ感有り

賽客晨を期し墓前に展す
軍神鎮まる処篆烟旋る
真珠院殿名は朽ちず
殉国の丹心竹帛に伝う

真啓合掌

（注）墓所は前橋駅の東（同市本町三丁目）、曹洞宗松竹院にあり

高橋啓作さんの投稿は以上の通りであるが、ここで特潜の真珠湾攻撃について概要を付記する。　田中賢一

ハワイ作戦に甲標的の参加が決まったが、問題は甲標的を目的地まで運搬する母潜水艦の改造工事である。12月8日開戦とすれば訓練及びハワイ周辺進出のため約一カ月を要する。11月10日頃迄に五隻の潜水艦の甲標的搭載改造工事及び発進テスト完成しなければならない。10月19日改造訓令が出され、その後は文字通り昼夜兼行、乗員、工廠関係者の懸命の努力により、ぎりぎりの11月18日特型格納筒を搭載した潜水部隊は安芸灘からひそかにハワイに向け出港した。

その作戦計画の概要は次の通りであった。

一、編成

指揮官　佐々木半九大佐

（第三潜水隊司令）

潜水艦名	艦長	特型格納筒
伊16	山田　薫中佐	艇長　横山正治中尉
		艇付　上田　定二曹
伊18	大谷清教中佐	艇長　古野繁実中尉
		艇付　横山薫範一曹
伊20	山田　隆中佐	艇長　広尾　彰少尉
		艇付　片山義雄二曹
伊22	揚田清猪中佐	艇長　岩佐直治大尉
		艇付　佐々木直吉一曹
伊24	花房博志中佐	艇長　酒巻和男少尉
		艇付　稲垣　清二曹

指揮官付（予備艇長）松尾敬宇中尉
各艦に格納筒整備の為め下士官二名配乗

二、特別攻撃隊は11月18日夜亀ケ首発、途中散開進撃し、ミッドウェーの六〇〇浬圏から昼間潜航夜間浮上進撃（速力一四節）とする。

三、X－二日日没後真珠湾の一〇〇浬圏に達し、格納筒の最後の整備を行ないX－一日一三〇〇（現地の日没後）真珠湾口の一〇浬圏を通過し湾口から約一〇浬の地点において湾口確認後格納筒を発進する。格納筒は伊16、伊20、伊24、伊18、伊22潜の順に三〇分間隔で湾口を通過する。その最後を日出一時間前とする。

四、筒は侵入後海底に沈座待機し、第一次空襲後攻撃に転ずる。艇長の判断により攻撃は日没後でもよい、攻撃終了後フォード島を左に見つつ湾内を一巡して脱出する。

五、母潜水艦は日没後ラナイ島西方七浬を中心として浮上待機、第一日収容不能の場合は翌日伊16、伊20はラナイ島

西方、他の三隻は同島南方一〇浬附近に配備し格納筒搭乗員の収容に努める。

途中太平洋のうねりの中で格納筒の整備に苦労を重ね12月7日夜予定海域に到着次の通り発進した。

母艦	時刻	格納筒	真珠湾口からの距離（浬）	備考
伊16	○○四二	横山艇	二一二度 七	
伊22	○一一六	岩佐艇	一七一度 九	
伊18	○二一五	古野艇	一五〇度 一二・六	
伊20	○二五七	広尾艇	一五一度 五・三	
伊24	○三三三	酒巻艇	二〇二度 一〇・五	港外に座礁

米側資料を主に日本側資料と総合すると、酒巻艇を除く四艇はそれぞれ米艦艇に攻撃を敢行したが岩佐艇は港内で、横山艇はトラトラの奇襲成功電を伊16に打電後同じ港内で、広尾艇と古野艇のうち一隻は港口で、他の一隻は港外で撃沈された。酒巻艇はジャイロ故障のため港内に入り得ず座礁沈没、稲垣兵曹は戦死、酒巻少尉は人事不省のまま捕虜となった。

誠第37飛行隊長 小林敏男大尉遺詠集について

元特幹一期生　深井　正昭

昭和二十年三月、群馬県前橋飛行場において特攻訓練し、同月下旬九州の飛行場に移動、「天一号作戦」の発令に伴い同年四月六日、第一次沖縄航空総攻撃戦に出撃を下命され、同日夕刻に宮崎県の新田原飛行場を進発、沖縄本島東部の残波岬沖の敵艦船群に体当たり攻撃を兼行して部下八隊員と散華された誠第37飛行隊長　小林敏男少尉（没後大尉・水戸市出身）の遺された日誌については、飛行学校当時の同期生　金　文男氏の献身、懸命のご努力によって発見確認され、その大要が本誌第34号で紹介されている。

この日誌の内容がヒントになって誠第36、37、38飛行隊一同による寄せ書の発見を始め、誠隊歌の発表会、三隊員一同による伊香保温泉での別離の宴、集団疎開学童や寮母たちとの交歓、高崎・前橋高女生たちによるマスコットの進呈等々が判明した。今回は日誌に記された昭和二十年一月十一日から出撃三日前までの八四首の遺詠について紹介させて戴き、改めて小林敏男大尉のご冥福をお祈り申し上げる次第です。

※印は日誌記事からの説明文です。

昭和二〇年一月十一日　木　晴

※「久方振りに充溢したる珍しき日」として四首詠まれている。

○　新しき年の初めにかくもかくも憂きこと続く嗚呼苦しさよ

○　嘗って吾が教官たりしその君も吾が後追ふと飛機に転じぬ

○　ヒリピンに明日征くと云ふ戦友二人計らずも吾を訪ねてくれぬ

○　十六畳の吾が部屋今日はにぎはひぬ死に就く戦友の二人迎へて

一月十四日　日　雲

※「休日なり。久留米に出て武の神を祀る高良山に登り下界を眺む」とあり。この日英気を養って六首詠まれる。

○　高良山に登りて見れば飛行場は片辺によりて小さくもあるか

○　古処山の二つの峯は此処にても清らに厚らに天聳ゆるも

○　武の神を祭ると知りてひたすらに山登り来て神詣でしぬ

○　軍神　心も在らば神国のこの危きを只にはすまじ

○　武の神と云はるる神のことごとく力合はせて國護りたまへ

○　神国のこの危きを家に在りて腕こまぬきてゐるを得べしや

一月二十日　土　雲

※母から「嫁さん候補は」の便りに「吾の副官は温順、明朗、健康、十一人並みの田舎娘を希望するも戦局がそれを許さぬ現状」と返信。七首詠まれる。

○　千代経ともいよよ栄えむ富士ケ嶽に墓場委ねし男子ぞ吾は

○　千代経とも（萬世に）いよよ栄えむ富士ケ嶺におくつき委ね征く日ぞ来たる　（近し）

○　八百神の在せる國の大八州敵（波）寄せ来とも何撓むべき

○　寄せて来よ何撓むべき皇神の在せる國日本島根は

○　打寄する夷が輩のことごとく邀へ撃つべき吾なけなくに

○　驕る敵来たらば来たれ神国の日本島根ぞ何ゆらぐべき

○　空襲が何ぞB―29が何ぞ要は米鬼を参らするのみ

一月二十八日　日　快晴

※「大牟田、久留米市の知人を訪ねるも昔日の面影無く帰宅。」四首詠まれる。

○　清しくも照れる月かもはだら雪積む山並みをかく照らしつつ

○　はだら雪積む山並みに入り日射し匂へる山あり日陰る山あり

○　此処にては背振の山の頂ける真白の雪が眼新らしきか
○　青雲のむか伏す極みあかねさし背振に赤き月昇り初む

二月十日　日　雲

※「紀元節、御真影奉拝式後帰宅。終日読書、心鬱々。原因は吾一人知る。」とあって、左記十首詠まれる。
○　オリオンの三つの星とシリウスと光競へり南の空
○　飛行場に二寸程積みし淡雪がほがらほがらに照る日に消えつ
○　古処山に積むはだら雪行きて見ば人丈越ゆと皆人云ふも
○　希めむとする心と心ふれ合へど言には出でじ人言□□み
○　人言を□□みかくまで汝が心隠さむとすや其の下心
○　丈夫の男の子にあれど吾妹の御前に在りて一言も無し
○　稚きに吾が恋ひし君に横顔が良くぞ似たりとも一度見るも
○　その眼と計らず合ひてたじろぎぬバスの中にて愉しき一時
○　丈夫と思ひてあれば遂に遂に語らず去りなむせむすべ無きに
○　雪雲は今宵ゆはれなむ背振を怪しく染めて陽沈むなべに

二月十七日　土　雲

※「特攻の大命遂に下る。壮行会、送別会あり、帰宅して床に就いても容易に眠れず。」と書かれ三首詠まれる。
○　醜の醜の吾れにはあれど尊きこれが任務果たさざらめや
○　醜の吾れ特攻隊長の命を拝しぬ必ずや必ずや成さざらめやも
○　醜の醜の吾れにはあれど尊き勅賜はりその夜寝むれず

二月十八日　日　雲　時々晴

※「登校して私物の整理、家にて荷造り。夜、下宿の人たちと別離の会食。第五、未完成等のレコードを聞きて寝る。」として三首詠まれる。
○　大君の勅かしこみ富士ケ嶺におくつき委ね征く日ぞ来たる
○　敵機動部隊大挙帝都に来襲す明けの日吾れに命は下りぬ
○　背振に入る陽眺めて余が心感おこる無し何の故ぞも

二月二十四日　土　晴

※十九日大刀洗から飛機にて東へ、京都で一泊。翌朝立川着。常磐線で故郷に、母驚く。親戚、知人、母校を訪ねて挨拶、二十二日下志津師団にて申告後、銚子飛行場に展開。左記三首。
○　あから引く光の満てるわだつみに向ひて過ぎ来し生を思ひぬ
○　神州は不滅なりとわだつみに叫べど遂に涙せき落つ
○　わだの原千代萬代も神国を守り賜へと祈りて去りぬ

二月二十六日　月　雪後晴

※「白雪に驚く。空襲無し。寝につきて静かに生を思えば未だ心安らぎ得ず」と記され、五首詠まれている。
○　床に入りて生を思ひ死を思ひうつつの中に夜明けとなりぬ
○　特攻隊と云ふ言葉の神聖さと醜の吾が身をしまし思ふも
○　特攻隊員の心や如何にと忍びしもその神鷲と吾が為りぬ今は（と為りて感無し）
○　幾十度戦友を送りて遂に遂に醜のヒナ鷲今ぞ出で征く（征く日ぞ来れる）
○　吾れが歌を始めてわずか二年にて万葉集を手放す時とはなりぬ

二月二十七日　火　晴

※「二十五回迎える春であるが夏を待たずに散る桜である。激しい空襲にも邀え撃つ飛機は不足し、神州の危機正に至れり」として関東高女生から贈られた鉢巻に御礼の歌と八首詠まれる。
○　大君の勅かしこみ大君の勅のまにまに今し吾が行く
○　二十五年の尊き生命ただひたに捧げむ時し今ぞ来向ふ
○　神州の不滅を信じひたにひたに死に就きし戦友の後追ふ吾は
○　大君の勅かしこみ賤が男の生命捧げむ秋ぞこの時
○　敷島の大和の国の桜花散るべき時し今ぞ来向ふ
○　敷島の大和乙女の賜はりし鉢巻しめて気負ひぬ吾は
○　君が賜ひし手縫の鉢巻にぎり締め果つべき生命しばし想ふも（女学生に賜ひし手縫の）
○　白妙の君が鉢巻ひきしめて空の御楯と気負へり吾は

三月五日　月　雨後曇

※空襲を避けて銚子飛行場より内陸部の群馬県前橋飛行場に列車で移動する。

三月八日　木　晴

※終日のどかな陽光の下で、春の息吹を感じ「光満ちたる関八州を暫し眺む」と一刻の安らぎの中で八首詠まれる。

○　見はるかす山はだらなる雪積めど
　のどけき春の光ぞ満てり
○　赤城山頂く雪の溶け初めて
　光のどけき春訪れぬ
○　赤城山引くすそ遂に谷まりて
　遠くかすめる筑波と為りぬ
○　故郷の筑波の山の小さきに
　二十五年の生命想ふ
○　十一の尊き生命賜りて
　敵三万をほふらむと気負う
○　打寄する醜の仇艦殆く（ママ）
　邀へ沈めむ十二の生命
○　百千の生命沈めてこの任務
　果たさずむば死すとも止まじ
○　よもつ國は闇しと聞けり道連れに
　敵三千を引連れ行かむ

三月十四日　水　雲

※十三日午後、出身の前橋陸軍予備士官学校を訪ね当時の戦友と再会、昨夜の愉しかった会食の情景を詠まれる。

○　三人の昔の戦友と語らひて
　涙し流る愉しき今宵
○　岸のハゲと眼鏡と気性は少しくも
　変化しあらず愉しきものぞ
○　二年を経て変りしものは三人共
　結婚したるただにそれのみ
○　新妻とむつまじき語り眼にして
　羨む心最早湧き出ず

三月十七日　土　晴

※第一線出陣も間近く、一泊の帰宅を許可されたが、僅か半日の滞在で「家に帰りても為すこと無く去る。」と水戸駅より列車で帰隊。この日八首詠まれる

○　死での道と知りても母は笑顔にて
　送りてくれぬ吾故郷去る日
○　帰らざる吾子を送るに少しくも
　悲しみもせじ有難き母
○　育みし二十五年を一時に
　想はむとする母の眼色
○　特攻隊と知りても而も微動だに
　せざりし母は嗚呼有難し
○　広き広きホームに立ちて見送るは
　母と妹と友一人のみ
○　故郷の梅を親しみさまよひぬ
　これも遂には最後となりぬ
○　吾子と共に征きたきものよと
　云ひし言未だに吾の耳去りやらず
○　吾と共に征かむと云ふは常人の
　母にはあらじ吾れが母君

三月二十六日　月　晴

※「と号第三十七飛行隊は大刀洗に向かい進発すべし」の命にて一〇〇〇前橋発進。一五〇〇加古川に全機無事着陸と記され、中村家にて四首詠まれる。

○　せまり行く生命を思ひひもすがら机に向ひ航法計画を立つ
○　すつるべき生命にあれど猶而も
　惜みて遂に究め得ざりき
○　吾が生命捧げむ秋の至れるを
　心静かに思ひて居るも
○　吾が生命捧ぐは易し而れども
　國援ひ得ざれば嗚呼如何にせむ

三月三十一日　土　晴

※隈庄飛行場に展開した誠第37飛行隊は出撃を目前に二人の隊員が殉職する。「明一日突入」と下命されるが、撤回されて数日後となる。六首詠まれる。

○　命あり明一日薄暮船団を求めて
　突撃せよと
○　一百五十の船団ひたにせまり来と
　聞きても遂に吾れたじろがず
○　大命を拝せしセッ那喜びよりも
　緊迫感をただに感じぬ
○　薄明き光の下に開げたる
　沖縄の地図が眼に痛しも
○　船団の位置を赤鉛筆で記入せり
　此処ぞ吾等がおくつきどころ
○　参謀の與へる注意開きつつも
　胸とどろきて半分は知らず

四月三日　火　曇時々晴

※生前最期？の遺詠となる。

○　死ぬるべき生命永らへ今此処に
　晴の門出を迎ふ喜こび

四月五日　金（木が正）晴

菊池飛行場より飛機にて隈庄に至る。命あり　明薄暮突撃を敢行せよと、命を拝して許れに感なし、桜花散る此の時、散り得る身の幸福をつくづく感じぬ。凡人敏男の散るべき時は遂に来たりぬ。夜　会食を行ふ。共栄の諸姉訪れくれぬ。愉しき最後の宵なりき。余が此の日誌を「みどり」に託す

人生は美しう御座いました。　了

註　小林敏男大尉のお墓は先祖代々からの菩提寺、水戸市緑町の信願寺境内に在って静かに休まれています。傍らには第八飛行師団長山本健児中将撰文による顕彰碑も建立されています。

或る学鷲の生涯

会員　中村　三郎

兄、中村純一は、学徒出身の陸軍特別操縦見習士官として、昼夜を分たぬ苛烈極まる猛訓練に耐え既に2年、練達のパイロットとして活躍していた。

その頃、遺書として残したものが今なお裏山の岩石に刻まれてある。

『学徒出陣、勇気凛々、真摯敢闘、国家危急存亡の秋、神州不滅を信じ、日々精魂を傾注し、滅敵に邁進せん』

20年7月9日、大阪上空の白雲を引裂いて来襲した米軍機P51、50機は、伊丹の飛行第56戦隊に襲いかかった。吾が戦力既に抗すべくもなく退避したが、迎撃態勢をとった3機に学鷲の中村少尉機があった。衆寡敵せず圧倒的な猛攻に次々に火を噴いた。

絶望の戦局と閉ざされた命運を熟知しながら、なお一切の抗弁もなく、天空を覆う大編隊群に果敢に突っ込んで行った壮絶の心情を、今静かに思い巡らすのである。

中村機は被弾、落下傘降下中、残虐非道の米軍機の翼に切断され、交野市星田の田園に水しぶきをあげて墜落、無残痛恨の最後を遂げた。近隣の農家の方はその悲惨と衝撃に泣き叫びながら、ねんごろに遺体を洗い、その霊を弔い冥福を折ったのであった。

私は「この痛恨の事実を永遠に消えることのないように遺さねば」と堅く心に誓った。

全国各地、ゆかりの地に鎮魂碑八基を建てたが、星田の現地には『天日を覆いて来襲せる敵機群に突入、壮絶なる空中戦を展開するも遂に被弾、この地に恨みを残して散る。

平和は血と涙によって築かれたるも哀惜と悲しみは尽きず。痛恨の碑の前に伏し御霊安かれと禱る』

伊丹56戦隊を望む宝塚聖天の丘に『君黙思不動至誠廉潔の士、祖国の難に殉ず。兄等の礎に日本は在り。魂魄不滅』副碑には『絶望の戦局に動ぜず眦を決して天翔る。愛機飛燕を駆り壮絶死闘、蒼穹に光烈散華する。雲染めて声なし』

郷里武岡の墓苑には『天翔けし若き翼よ還りきて安らけく瞑れ故郷の丘』といつまでも帰還を待ち続けている。

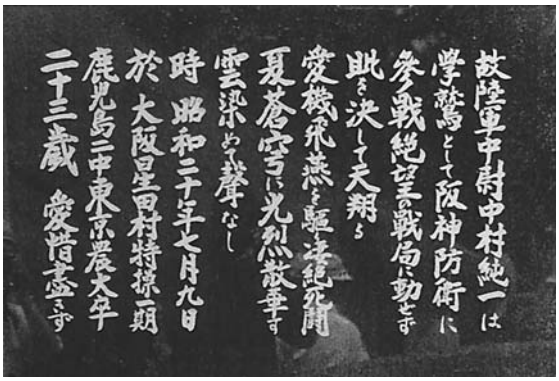
戦友や縁者から『中村純一の足跡を遺そう』という発想がひろがった。沢山の中から28名の刊行委員会が発足し、三十三回忌の昭和53年7月9日、158名の執筆を得て『或る学鷲の生涯』が刊行された。363頁の大冊には至純な日本人の尊い心情が満ち溢れている。

昨年3月大阪の交野市から兄の戦闘機の残骸が出土したとの報せがあった。国道工事の作業中に、地下4メートルで発見され、関係者30名が会合を開き、説明会と意見交換を行った。交野市長は「この星田上空で凄惨な空中戦があった事を肝に銘じ、再び戦争の惨禍を繰り返さないように平和を誓うものである。」と述べた。そして慰霊碑に沢山の花束を供え、心から鎮魂の禱りを捧げたのであった。

数多くの戦没者の場合、戦死の状況が判然とすることは極めて稀であるが、60年の時空を経てこれ程判然として解明された例があろうか。

私は、兄純一の幸運を有り難くかみしめると同時に、関係者御一同の周到な対応、ひたむきな慰霊の心情に感謝の頭を垂れるのみである。

残骸は、交野の文化会館に展示、軍刀などの遺品は郷里の黎明館に永久保存されてある。



同右副碑

宝塚聖天の丘の碑

フィリピン慰霊巡拝旅行（続）

比国巡拝雑感

杉山　蕃

昨秋、協会事業計画に基づく比国戦没者慰霊巡拝行事に、菅原団長以下24名の慰霊団の一員として参加いたしました。比国は私にとっては二回目の訪問でしたが、マニラ以外は初めての経験で大変印象深いものでした。特に草生す戦跡を巡り、多数の墓苑、墓碑に慰霊の気持ちを捧げられた事は、日本人としてなすべき責務を、ほんの一部ではありますが、果たすことが出来たのかなというささやかな満足感を持って帰国できました。戦跡を巡り、草莽に苔むす風情をみるにつけ、名句「兵どもが夢の跡」を想起し、胸に迫る思いの連続でした。旅行を通じ、印象深かったところの所見を披露致します。

○　レイテ島

「レイテ」は、多くの日本人と同様、私には最も心に残る地名です。戦後の少年時代、「伊藤正徳モノ」や「丸」がゴロゴロしていた家庭環境にあり、ガダルカナル、レイテ、ミッドウェーといった戦争物に掌を握り締め、歯軋りしながら少年らしい好奇心を燃やしたものでした。長ずるに及び、戦史らしい教育も受けましたが、当時の教育は防衛大と言えども〝自虐的〟な見方をする教官が多く、戸惑うこともありました。その後、航空自衛隊統一幹部論文の主題に「レイテ（比島沖海戦）」が提示されたこと、大岡昇平氏の「レイテ戦記」が中央公論に連載され、話題を呼んだこと等もありレイテに対する興味は一段と増したものです。今回の訪問に当たり、本棚の奥から引っ張り出した「戦記」は、47年2月版定価4800円、黄ばんだ体裁は古書の面影です。8万人の将兵が眠るレイテですが、現地を見た私の所見は次の四点でした。まず第一点は地形はイメージしていたほど険峻ではなく、リモン峠も脊梁高地も、車で移動したせいもあり、この程度だったのかと思った次第です。近衛師団を除き、多くの装備を海上で失った部隊がよって利とする地形にしては、不利を免れないところであったと想いをはせたところです。二点目は周辺海域の不気味な程の穏やかさでした。カモテス海、レイテ湾、シブヤン海いずれも波一つ無い、鏡の如き静水。山本会長が兄君の慰霊に訪れた際も同様と伺いましたが、防波堤等沿岸構造物が皆無であることもあわせて、本来穏やかな水域と感じました。第三は民情です。東海岸には、イメルダ夫人の豪壮な実家や、師団長官舎となった瀟洒な洋館もありますが、おしなべて、あくまで貧しく、純朴です。レイテ戦記には、「スペインは良くなかった。次の米国は悪い適中だった。しかし、日本兵はもっと悪かった。二回目の米国は最悪だった。」とする現地感情を、米国人の書物から引用していますが、作戦の終始を通じ現地ゲリラに悩まされ手を焼いた日本軍。何はともあれ、この純朴な住民を「威徳をもって悦服」さすべき各種の方策が欠けていたのは残念でなりません。第四は、飛行場適地とされた東部平野です。ある程度の開豁地、草原を予想していましたが、ブラウエン、ドラッグ周辺は、密林ではないものの、密生した潅木地帯、加えるに湿地帯に近い多数の小川、灌水があり、日本軍が大きな努力を投入した四つの飛行場は、既に潅木に覆われ、現地に精通した案内人ですら、探し出すのが困難な状況でした。私事ながら、当時我が家で共に暮らした家政婦の夫君が、大手建設会社勤務の経験から、45歳で飛行場建設要員として出征、戦死した経緯があり、その労苦を思うとき、ことさらに、熱い思いに浸りました。

昭和19年後半、大戦の帰趨はほぼ決定的となり、坂を落ちるが如く急速に継戦力を失いつつあった日本、比国を失っては、作戦する燃料すら事欠く状況から、最後の決戦を比国に求めたのは合点できるところですが、各所に目立つ現地司令官と参謀本部の意見の相違、ちぐはぐな各個の作戦、遅きに失した決戦準備、装備を失い力を発揮できずに散った将兵の無念、そしてレイテ沖に悲壮な死を遂げた特別攻撃隊等、レイテは無念の地です。砂嘴の上に現存するタクロバン飛行場から離陸した帰路。北向きに離陸した飛行機は、大きく左旋回カリガラ、リモンを翼下に見つつ北西に進路をとりましたが、あまりにも平和な緑に包まれた島影に、思わず目頭が熱くなるのを禁じ得ませんでした。

○　マバラカットと関大尉

慰霊団が最初に訪問したマバラカット飛行場跡は、クラーク郊外の群生する野草の中に点在する掩体、一部残る岩丘を穿った待避所等予想どおりの風情で、我々を待っていました。特攻隊発祥の地とは言うものの、当然の事ながら内地に残る旧軍飛行場跡とよく似た雰囲気を感じました。

関大尉の敷島隊長としての行動、突入に至る経緯については、よく知られた事として本稿では述べませんが、同

じ戦闘機乗りとして、私なりに理解しているところを紹介したいと思います。当時の戦闘機乗りは消耗激しく、「三回生きて帰っても四回目には生還しない」と言われるほどで、被弾したら（生還は期しがたいので）敵艦に体当たりするとする雰囲気にあったようです。事実千代田艦長より特別攻撃隊編成の上申があり、却下された経緯があります。しかし、如何に死を惜しまぬ気風が横溢したとは言え、100％死を前提とする出撃に対する本能的葛藤は、察して余りあるところで、皆さんと同じです。私は、関大尉には、もう一つの苦悩があったと思っています。それは、「特別攻撃隊」を編成した最初の編隊長として、「**絶対に攻撃を成功させなければならない**」という重圧であったと思います。彼は本来雷撃機操縦者で、米艦の対空火砲網と熾烈さには、充分精通していた筈です。当時の火砲の有効射程は1000m程度が実力で、以遠は、効力は激減します。この1000mを如何に潜り抜けるかがキーポイントとなります。当時の戦闘機は400km程度の戦闘速度と考えられ。1000m飛行するのに約10秒を要します。また、護衛する艦艇からの援護射撃も考慮しなくてはなりません。当時海軍では、艦艇攻撃の精度を上げるため超低空跳飛爆撃の訓練を取り入れていましたが、この10秒に被弾する確率が高く採用に至っていませんでした。跳飛爆撃は機速が飛躍的に向上した現在は、有効な攻撃法として戦技の中核ですが、基本的に投弾直後、目標の直上やや前方を通過すること、最終経路において「ビームの原則」から、艦首から80度程度の火網厚い中を、一定角度で近づくという弱みを持っています。しかし、水面10mを飛行するため、レーダー探知、照準が困難という長所も持っているわけです。関大尉のとった戦法は、戦果確認のため随伴した、西沢兵曹長の証言、米軍側の証言から、超低空で接近し、問題の10秒を生き延びるため急上昇反転降下の高機動により、対空火砲の射撃角度を常に変化させ、命中を困難にさせつつ突入する見事なもので、ジェット時代の現在にも通用する考えです。「成功しなければならない」重圧の下、考え極めた戦法でしょうが、出撃のときは自信を持って、重圧を撥ね退ける爽快な気持ちで出撃された事を信じたいものです。特別攻撃隊は、その後沖縄戦では主戦法となりましたが、旧式機の投入、新人操縦者の投入といった安易な方向に流れ、見るべき成果は減衰の一途を辿りました。当時の作戦指導の中枢にいた人達のなかに、本当の戦闘機乗り、突入攻撃の困難性を身を持って知る人が居れば、また違う方法があったのではないかと思う次第です。

○　日比友好

今回の巡拝旅行のなかで、戦後の比国対日感情面で印象深い経緯を知りました。比国駐在武官は、歴代航空自衛官が当てられていることから、複数の経験者に話を聞き、現地でも現武官から親しく話を伺いました。皆さん比国人に対し、この上ない好感を持っており、この国が将来発展することを切に望んでいることを知りました。特に比国の人達の純朴性は等しく認める所です。しかし、戦後の対日感情は険悪で、日本の国連加盟に真っ先に反対した事は、よく知られた事実です。現地案内人の鈴木氏の説明によれば、この状況を一変させたのは、元神奈川県知事内山岩太郎氏であると言い切ります。通常の外交上の説明は、比国の反対を翻すため、マニラ大聖堂の修復等の条件を提示し乗り切ったとされています。事実は、国が行うべきこの事業を、孤立無援の内山氏は、神奈川県のみで支援し続け、一年がかりで、計6万余袋のセメントを贈り、その誠意が広くマニラ市民、比国民の受け入れるところとなったのが事実のようです。以降、日比関係が好転の一途となったのは、皆さん充分ご承知のとおりです。本来、比国と我が国の現代史は、密接な接点があります。独立運動に若い生命を擲った「国父」ホセ・リサールと彰義隊士として上野に散った兄を持つ、氏素性高き日本女性臼田勢似子との涙を誘う恋物語、米国からの独立を叫び、日本軍と共に行動、戦火に散ったリカルテ将軍、現在の時勢を看破し、大東亜共栄圏に共鳴、日本亡命等を経験した二代大統領ホセ・ラウレル博士、戦後初の大統領となったマニュエル・ロハスと神保中佐（その後、日本リサール協会理事長）との死を救いあった信頼関係等、何れも感動なしには語れぬ接点です。戦時とは言え、これらを無にしてしまった所業は悲しむべき事でした。幸い内山岩太郎氏のような存在があり、一段と輝いて見えるのは、極めて教唆に富んだことではないでしょうか・・・

○　最後に

今回の慰霊団には、協会関係者、旧戦友、遺族、家族の他に、一般の参加者が数名あり、彩りを添えてくれました。特に七彩工房社の社長さんと若い二人の女性写真家は、湿りがちなこの種の慰霊団のムードを一変させるものでした。戦没者の慰霊は、これからも長期に亘り継承していかねばならない重要な国民の義務です。そういう意味

からも、興味を持って頂いた若い世代に感謝致したいと思う次第です。

比島慰霊旅行の思い出

深山　明敏

協会が18年度に計画・実施した特攻隊初発進基地マバラカット慰霊旅行に私は初めて参加させていただき、5泊6日のコースで、比島各地における慰霊・追悼行事に列席し、先人たちが後に続く者のあることを信じて国のために散華された偉業に、崇敬と感謝の誠を捧げる有難い機会を得ることができたことを嬉しく思っている。

この極めて意義深い旅行を通じて、特に強く感じたことを述べさせていただくことにする。

一　同行者と現地ガイドに感謝

この旅行間、充実した満足感を得ることができた要因はいろいろあるが、何はともあれ、同行者と現地ガイドに恵まれたことが大きいと感謝の念を先ず申し述べたい。

今回の慰霊団は、91歳の戦争体験者から若い女性まで、老壮青の男女25名という構成であったが、慰霊という志が同じこともあり、初対面でも直ぐに仲間同志の打ち解けた和やかなムードが生まれ、かなり強行軍ではあったが整斉円滑に無事目的を達成できたことはご同慶の至りであった。

また、杉山蕃副団長のご配慮で、在フィリピン共和国特命全権大使の山崎隆一郎氏の公邸を訪問し、大使から直接ブリーフィングを受けることができ、日比両国間の良好な外交関係を確認できたことは望外の喜びであった。

現地でガイドを勤めた鈴木さんは、戦後「海外青年協力隊員」として比国に着任し、現地の女性と結婚、既に2児を独立させ、現在2児の養育中というベテランであった。

大使公邸で山崎隆一郎大使のブリーフィングを受ける

比国の歴史や民情はもとより、日本軍の戦史にも詳しく、また、私たちの健康管理や安全管理に関しても適時適切な気配りがなされ、安心して行動することができた。

鈴木さんの説明で、今まで知らなかったことを色々と教えていただき、見聞が広まったことを感謝している。

イメルダ元大統領夫人に関する出世物語も興味深いものであったが、「百聞は一見に如かず」と言われるとおり、この旅行間、貧富の差が大きく、多数を占める低所得者層の実態を各所で目にすることができ、来日の不法滞在者たちの背景を垣間見ることができた意義は大きい。

杉山副団長持参の零戦模型を山崎大使に贈呈する

二　マバラカット戦没者慰霊祭

この慰霊祭は、池口恵観師が寄贈された観音立像が、平成14年10月25日に開眼法要が営まれたのを機に、特攻隊戦没者慰霊と世界平和祈願（マバラカット・クラーク両市共同の世界平和都市宣言記念）を行う目的で、平成14年から毎年両市が共催して、比国と日本の各団体や機関と協力して開催している行事であり、読経を中心とする日本式の慰霊祭であった。

今年は、関行男海軍大尉指揮の神風特別攻撃隊（敷島隊）初出撃から62年目の10月25日、パンパンガ州クラーク特別経済区の平和公園において、比人と日本人約百人が出席して開催されたことを、現地の日刊まにら新聞（邦字紙）は写真入りで報じていた。

慰霊祭には、日本から我々のほかに鹿児島県の池口導師以下13名の僧侶、医療法人特州会及び兵庫県但馬人プロジェクトなどの団体代表が参列し、地元からマバラカット市長、比空軍司令官、比空軍音楽隊、小学校児童らが参加して実施された。

小学生（1年生から6年生）引率の女性教諭は、「今年で3年目、日系企

業からの文房具援助などに対する感謝の表明として参加するようになった」と話され、児童らは比・日の国旗を手に、バスから降りる我々に笑顔で花輪を渡してくれた。

地元で特攻ミュージアムを開設している親日家ダニエル・H・ディゾン氏の特攻隊に対する親近感と熱意溢れる顕彰活動は、広く地元民に浸透しており、最初の発進基地の東飛行場跡地に再建された慰霊碑（神風神社）における参拝行事の際にも小学生等が一緒に参列して整斉と実施された。

現地におけるこのような慰霊顕彰の熱意に直接触れると、我々として今後いかに慰霊行事を考えるべきかということについて責任を感じた次第である。

三　モンテンルパ墓地跡の所感

モンテンルパ刑務所の裏手の山の斜面に、処刑された17烈士の慰霊碑等が整然と建立されており、罪の軽い受刑囚が維持管理してくれているようであった。私は処刑者がもっと多数のように考えていたが、そのほかの戦犯80名は特赦で刑の執行を免れ、無事に帰国できたという説明を受けた。

この特赦は「モンテンルパの夜は更けて」という歌にまつわるエピソードであり、この作曲者・伊藤正康氏陸士56期には、私も愛知県人会で若い頃からお世話になっており、尊敬している先輩であるが、「特赦」に関することを今までお聞きしていなかったので意外な感じを受けた。

歌手の渡辺はま子さんが収容されている戦犯慰問のために刑務所を訪問し、熱唱されたこの歌がクリスマスの夜に放送され、それを偶然聞かれた大統領ご夫妻の心を揺り動かしたことから、80名が刑の執行を免除されたという説明を受け今更ながら吃驚した次第である。

不条理な裁判の結果を甘んじて受容した諸先輩が、望郷の念や親子の絆を歌に託し、哀調を帯びた歌声によって異国の人々の心に火を灯すことができた事実の重みを痛感した。

四　マニラ大聖堂修復事業の所感

フィリピンは、スペインの探検隊が1521年に発見してから、スペインの征服者がキリスト教（主にカトリック）を紹介して熱心に布教したため、市街地は協会を中心に発展しており、この形態は田舎でも同様である。

マニラ大聖堂は首都マニラにおける市民の信仰の拠点として尊崇を集めていたが、大東亜戦争末期に戦火で破壊された。

戦後、日本は比国に多額の賠償金を支払ったけれども、民衆の心を癒すことはできなかった。

比国民の反日ムードを払拭するきっかけとなったのは、神奈川県知事であった内山氏が、昭和35年に私財を投じ、セメント6万袋を運んで修復工事を実施したことである、という説明を鈴木さんから受けた。

この事実は私にとって初めて聞くことであり、クリスチャンならではの偉業ではあるが、日比友好の象徴としてもっと広報されてもよいことと思う。

政府の事業と私的立場の事業が、現地において効果を発揮するように総合的な戦略施策が重要であることを痛感した次第である。

五　レイテ島慰霊巡拝の所感

レイテ島における巡拝行事は、早朝の洋上慰霊祭から始まり、最大の激戦地リモン峠の第1師団慰霊碑に対する参拝・読経をメインとして、島内各地に所在する慰霊碑等に巡拝するバスツアーを終日実施した。

第1師団慰霊碑は、師団長の意を体してやがて土に帰すことを願い当初木製の碑が建立されたが、現在ではコンクリートの柱に屋根が葺かれ、多数の卒塔婆とともに石仏も建立されており、地元の篤志家によって手厚く維持管理されていることは有り難く、感謝の念を込めて拝礼させていただいた。

飛行場跡地や聯隊等の所縁の地に慰霊碑やお地蔵様などが戦友会・遺族等によって建立されていたが、特に印象的だったのは、ホリタの道路沿いに地元の人たちが非常に立派な慰霊碑を建ててくれていたことである。

説明によると、山添陸軍大尉（イサオ・ヤマゾエ）の顕彰碑で、ゲリラに殺害されたことを悼んで建立してくれたそうである。

今回の旅行間、マバラカットで特攻隊員に可愛がられたディゾン氏の顕彰活動をはじめ、レイテ島における牧野師団長と現地の少年との間に残っている敬慕の情、そして、ホリタ住民の山添大尉に寄せる追悼の気持ちなどを直接見聞でき、国境を越えた人間愛・人格の重要性を強く感じさせられた。

またそれと同時に生死の境界に立たされた時に、日本人の特性が善悪両面で極端な形で現出したことも事実であり、それは当時の国家指導者が兵站支援の限界を無視して「糧を現地に求める」無理な指導に終始し、日本人のみならず現地の人たちにも大きな犠牲を強いた責任を問われてもやむを得ないと考えざるを得なかった。

六　その他

1　実践体験者の高齢化に伴う民間団体による参拝行事には限界があり、

現地の人たちの好意に報いる視点に立って国家としての施策を講じることが必要な時期である、という切実感を政府関係者に理解してもらうことが重要であると思う。

厚生労働省は海外に多数現存する民間建立の慰霊碑の実態調査を、平成15～17年度の3年間実施したが、その結果を国として今後どうしようとしているのか不明である。

一方、遺骨収集は平成19年度の重点を比島に決定したことが報道された。

慰霊と遺骨収集は、国家として重要な事業なので、官民一体となって検討する機会を持つことも一案と思う。

2　慰霊旅行から帰国直後の11月中旬から下旬にかけて、米国の戦士研究家ダニエル・キング氏（42）が来日、旧日本軍戦場体験者、特に特攻隊員との面談申込みがあり、陸軍特攻隊関係者として田中賢一氏陸士52期、吉武登志夫氏陸士57期、皆本義博氏陸士57期にご協力をお願いした。

キング氏は真面目な好青年で、年内に出版予定であり、内容として米国人の日本軍に対する偏見・誤解の是正を主眼に執筆中なので協力させていただいたが、例えば、次のような質問が出され、明確に否定されたことに今回の面談の意義を感じた。

○搭乗後、操縦席は溶接されたか。
○操縦士の手は操縦桿に縛着したか。
○操縦士は搭乗前に注射されたか。
○航空機燃料は往路分だけか。

これらの質問は、キング氏周辺の一般的な認識が前提になっており、先輩たちの偉業の顕彰に当たり、我には国内向けだけではなく、対外的にも今後留意しなければならないことを痛感した次第である。

フィリピン慰霊巡拝に参加して

谷尾　侃

大東亜戦争末期のフィリピンへの米軍反攻はマッカーサーの私怨も絡み熾烈を極めた。大東亜戦争、全戦線213万余の戦死者の中、当戦域が52万余を数えるとされている。

平成12年7月、山紫会（同期板垣元参院議員の後援会）主催の慰霊巡拝があり、24名が参加しているが、小生は都合が悪く叶わなかった。爾来長い間借金を抱えているような心情で過ごして来たが、昨年当協会の訪比慰霊巡拝が告知され、直ちに参加申入れをした。

意を決してからは会報66号（18年2月刊）同別冊、昨年の訪比団による「旅行記録」を精読した。

ダニエル・H・ディゾン氏が昭和49年、特攻第一陣、関大尉以下の敷島隊の出撃地、マバラカット東飛行場跡に私費で慰霊碑を建立したこと。翌50年、出撃日の10月25日に日を選び大西司令長官未亡人以下第201航空隊戦友会が現地慰霊祭を斉行、以後、毎年これを続けていたこと。平成3年ピナツボ火山大噴火による碑の埋没。徳田虎雄代議士と最福寺住職池口恵観師の現地訪問による観音立像の寄進とマバラカット・クラーク両市の平和都市宣言の建言（平成8～9年）。平成14年10月25日、観音像開眼除幕式＝リリーヒル（クラーク特別区）。マバラカット市による神風神社の再建。16年10月25日神風神社に特攻勇士の像の建立除幕。ディゾン氏による西飛行場記念碑の建立。これらを初めて知る。

今回の慰霊団は24日、成田発、同日マニラ着、バスでクラーク地区に移動、同地ホリディ・インに投宿した。

25日朝、バスでリリーヒルの観音像前に到着すると、現地少年少女が日比両国の国旗小旗を打ち振って迎えてくれた。徳洲会、池口恵観師、それぞれの一団も見え、日本からの総員は100名を超えたと思う。これに比側もほぼ同数が参加、正に日比共催、感激の慰霊祭である。池口師以下僧形約10名による厳かな読経に続いて、各団体代表の焼香、礼拝、次いで参列者総員それぞれの思いを篭めて礼拝する。

我々はこの後、東西両飛行場跡の慰霊碑にバスで移動、焼香台を設け、慰霊の誠を捧げ、鎮魂を祈った。

次いでディゾン氏宅表敬、コレヒドール島、モンテンルパ、セブ巡拝を終え、28日6時セブ発の高速船でレイテ島オルモックへ向かった。

山本卓美勤皇隊隊長陸士56期

当協会々長山本卓眞氏は、我が同期生で、戦闘機分科であったが、小生は俗称・軽爆、正式には襲撃機分科であった。氏の令兄卓美氏はこの分科の2期先輩で、昭和19年12月7日、勤皇隊隊長として、2式双襲を駆ってオルモック湾で特攻戦死されている。この分科の航士卒業後の戦技訓練は、元来、鉾田飛行学校（戦闘・明野、重爆・浜松、偵察・下志津等）であったが、終末期、福島県原ノ町の飛行場が供されていた。そして、同地で訓練を受けた同期の八牧通泰君は、戦後同地に店を定め（薬局経営）昭和46年以降、毎年、慰霊祭を斎行している。その祭神名簿に山本卓美先輩が掲載されており、早くから直系の先輩であることを承知していた。また、同名簿で比島戦死者として、レイテ・タクロバン佐々木亮55期、ルソン・リンガエン湾三浦恭一56期の両氏

がおられる。卓美さんの洋上慰霊を始めとして、遙拝を含め、最も近づいたと思われる処で2氏の鎮魂を祈った。

牧野四郎中将と鉾田慶次郎大佐

第16師団長牧野四郎中将は私共が昭和17年4月、予科士官学校に入校した時、少将で学校幹事職であったが、12月中将に進級、校長となられた。幹事時代から種々講話を賜ったが、校長になられてからは「校長偶感」としてカベ新聞的に次々と強い説得力を持つ指針を示された。特に情誼を説き「花も実もあり、血も涙もある武人たれ」というものであった。我々が同校を卒業後の19年3月、第16師団長に転出されている。戦後も相当経って、世の中が落ち着いた頃、58～60期の3期合同で中将の生地、鹿児島県市来町に遺訓の碑として、同文を清水正尚・鐘眼君の筆で刻字し、建立している。今回の巡拝地にレイテが含まれている事を知ってからどんなお参りができるかと案じていたらブラウエン北飛行場跡近くに16師団の慰霊碑があり、碑前に焼香台が設置されて、菅原団長、深山幹事から「有縁の方からどうぞ」と奨められ、第一番に香を捧げさせて頂き、心を安んじた。

バスの中でガイドの鈴木さんが16師団の隷下、福知山聯隊の鉾田大佐以下の慰霊碑も立派なのが建立されていますと触れた。予ねて小平市の住民同士として教科書問題等で活動を共にしている岡田俊明という御仁から「谷尾さんは大阪幼年学校出身とのことだが私の伯父にも同校出身者がいます。鉾田慶次郎といい、最後は大佐で戦死しています」と告げられたことがあった。もう5年位前のことだったが、前述の鉾田飛行学校と同じ名前だったので鮮明に記憶しており、「その方は小生、些かの縁がある」と名乗りを挙げた。レイテ島東海岸、マッカーサーという彼の上陸地の15㎞位北方、ドラッグから内陸ブラウエンに向かう中間ホリタに鉾田大佐の慰霊碑があるとガイドの説明があった。

牧野さんと鉾田さんは陸士26期の同期生である。帰国後、若干の疑念を込めてその事を団長に話したら、「間違いない。何かで「昼は師団長と隷下の聯隊長、夜は同期生に帰り、オレ、キサマで語り合い」という文を見た記憶がある」と告げられた。些かでも小生と御縁のあるお二方の鎮魂を祈り得たことに無上の幸せを感じている。

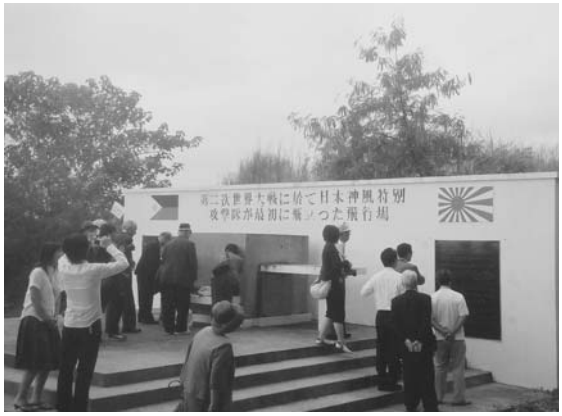
以上、有縁の方々についてのみ記述したが、巡拝は全英霊の鎮魂を祈るものであることは申すまでもない。話題提供のため、私の知る事実を抽出記載したことを御諒承頂きたい。

神風特別攻撃隊初発進基地 マバラカット慰霊旅行に参加して

宮地　正美

平成18年10月24日、マニラ市に着くと、日本大使公邸を訪問の後、直ぐマバラカット飛行場跡があるクラーク地区に向う。やがて右手前方に独立峰が見える。アラヤット山だろう。左手西方には夕陽に映えるザンバレス山脈が望まれる。特別攻撃隊員達もこの山々を見て出撃して行ったのであろう。クラーク地区内で一泊。

翌日は神風特別攻撃隊初攻撃の日、**10月25日**である。敷島隊の出撃時刻に合わせて「日比合同式典」が行われるので、早朝バスで出発。会場では現地少数民族アエタ族の小学生が日比両国旗を振って出迎えてくれた。式典の模様を伝えた地元紙「まにら新聞」によると、日系企業からの文房具援助などに感謝して三年前から参加しているという。笑顔が、眼が、輝いている。大きく立派な観音像の前には比空軍の音楽隊もいる。慰霊祭の後、マバラカット西飛行場跡を訪れる。現地アンヘレス市在住の歴史研究家ダニエル・H・ディゾン氏が建てられた立派な慰霊記念碑がある。高さ2～3メートル、幅数メートルの大きなもので、碑面には日本語の大きな文字で「第二次世界大戦に於て日本神風特別攻撃隊が最初に飛立った飛行場」と書かれ、左右に比国旗と旭日旗が彩色で描かれている。さらに特別攻撃隊の編成・出撃・戦果等について、説明文が日・英両語で詳しく極めて正確に書かれている。説明文の最後は「日本の『神風』は全ての戦争歴史の中で最大の軍事目的の体当り組織である。外国の侵攻から日本本土を防衛する為に死に物狂いの手段であった。この地を訪れる参拝者の皆様



に謹んでお願いします。全ての『神風』と連合軍戦没者に対して永遠に安らかにお眠り下さい。そして、全世界の平和の為にいのります、と祈念して下さい。」と結ばれている。篤志家ダニエル・H・ディゾン氏には帰途ご自宅を訪れ御目に掛かったが、氏の熱意、好意にはただ感謝、敬服するのみである。碑の周り一帯の草は今日のために刈り取られた様子。傍らには隊員用のためだったのか古びた防空壕がある。滑走路は確認できないが近くに掩体壕が多数残っている。関大尉ら敷島隊が10月21日に初出撃し、そして多くの特別攻撃隊員が出撃、大地に別れを告げ大空に消えて行ったのがこの地なのだ。多分もう実際には飲んでもらえないだろう、が、日本から持って来た新酒の小瓶を捧げる。

次にマバラカット東飛行場跡を訪れる。立派な碑と共に、特別攻撃隊員の立像がある。ここでも慰霊祭を行う。地元の子供達が多数出席。隊員の立像を台座の下から見上げると背景に大空が広がる。空の勇士が黙って身近に立っている感じがした。バスで更に北に向う。途中バンバン川を渡る。戦記によれば隊員たちは出撃待機中、この川の辺りで、多分もう少し左手上流であろう、国を、故郷を想い、戦局を憂えて語り合ったという。

帰りがけに街道沿いにある二〇一空本部跡の民家に寄る。ここで昭和19年10月19日夜から20日未明に神風特別攻撃隊の編成がなされたのである。案内説明書には〝今は民家であるのであまり近づいて立寄らないように〟と注意書がしてあるが、家の主人は親切に我々を屋内に入れてくれ、当時の写真も見せてくれた。

10月26日　マニラ市街が次第に遠くなる。静かなマニラ湾を連絡船（日本製）が西に行く。やがて右手前方にバターン半島の山々が見えて来る。雲は低く垂れこめ山頂部は雲の中である。ナチブ山だろうかマリベレス山系だろうか。半島の突端に島が見える。コレヒドール島に間違いない。一日かけて島内の慰霊、戦跡巡りを行う。今、居る所がコレヒドール島なのだ。目の先にはバターン半島が見える。あの半島で、この島で激戦が、死闘が繰り広げられたのだ……。比政府の好意により立派な日本庭園も出来ている。庭内の断崖近くに建つ慈母観音像の前で、海を望んで「海行かば」を斉唱する。

10月27日　モンテンルパの墓地を参拝し、マニラ空港に戻り、短期のA班と別れ、空路セブ島に向かう。南方第十四陸軍病院跡慰霊碑やセブ飛行場跡近くのセブ観音を巡礼し、直ぐ近くのマルコポーロホテルに宿泊。高台にあるため眼下に美しい夜景が広がる。セブ島は今やフィリピン一、二のリゾート地とのことだが、かつて10月25日朝、大和隊が出撃した島である。

翌10月28日　早朝まだ暗いうちに出発、セブ港からレイテ島に向かう。海は波静かで雲が低く垂れこめている。戦記で「敵艦船が見つからなかった」とか「敵機群接近で雲の中に隠れた」などと書かれているが、よく分かる。日本より確かに雲が低い。途中、船の後甲板で洋上慰霊を行う。波の音、エンジン音に負けないように「海行かば」を唱う。空に海に散った特別攻撃隊員に黙祷を捧げると共に、多くの艦船の戦没者を想う。

やがて連絡船はレイテ島のオルモック港に到着。小さな港である。レイテ戦の日本軍の主な補給・上陸港であったが、一個師団、一個連隊でも上陸すれば大変な混雑であったろう。この町はレイテ戦最後の激闘の地、部隊は徹底抗戦し全滅したという。また、この港町は近くの川の洪水、氾濫で度々壊滅状態となったが、日本人が堤防を造って以来被害は無いとのこと、嬉しい限りである。セブ島からレイテ島への海路は良かった。洋上慰霊が出来たし、多くの将兵が上陸したオルモック港も実体験できた。第一師団をはじめ多くの将兵が行軍したであろう街道を北へ、リモン峠へ向かう。風雲急を告げる戦局、突然の作戦方針変更、不足せる武器弾薬糧秣、将兵達はこの街道を北進しながら何を想っただろうか。激戦の地・リモン峠に着く。街道沿いの右手の高台に小さな屋根だけの小屋があり、その中に沢山の慰霊碑、木柱、卒塔婆がある。慰霊祭を行う。この峠一帯は当時の写真を見ると激戦で焼け野原の丘のようであったが、今は椰子の木の緑に覆われている。リモン峠を下り、カリガラ平野を東へ、タクロバンで昼食。町に入る手前で見えた丘は十字架山だろう。ここでも米軍上陸直後4日間激戦が行われたという。パロ、ドラグ、ブラウエン、ダガミを廻る。ブラウエン北飛行場跡近くで第十六師団慰霊碑、高千穂空挺隊慰霊碑に参拝。帰り道、パロのレッドビーチにある〝敵の将軍マッカーサー〟の上陸記念像を見る。さすがに戦勝国の像は大きい。像の後にレイテ湾が広がる。静かで波一つない。ここに米軍10万が上陸し激戦が繰り広げられた。多くの特別攻撃

隊員達が突っ込み散華された。

ドラグ～ブラウエン間の道沿いに「ヤマゾエイサオ」大尉の立派な慰霊顕彰碑がある。近くに駐屯した日本軍の部隊長で地元に尽くし皆から慕われていたが、ゲリラ攻撃で戦死したという。死後地元民が慰霊碑を建てたという。こういう話は他にもある。篤志家ダニエル・H・ディゾン氏も幼い頃進駐した日本軍の将兵に可愛がられたという。戦史、史実は公正に、より正確に！我々が努力しなければならない。

山添 功（イサオ・ヤマゾエ）陸軍大尉の慰霊顕彰碑

彼女たちと私のレイテ写真「戦記」

写真家　中矢　伸志

「何を言っとるんだネ、61歳なんてまだまだ若くて元気いっぱいのはずだョ」元特攻隊員の板津忠正さん（82）に電話ではっぱをかけられ、そろそろ広告写真の会社も引退し、好きな畑仕事でも…という弱気もふっ飛び「わかりました、もう少し若い写真家を育てるために、頑張って見ますヵ、ところで板津さんの次の御予定は？」と聞くと今度は板津さんの方が少し元気なく「実は今回で最後になる慰霊団の一員としてフィリピンへ行くんだョ」何回か行われた元戦地での慰霊祭も参加される方々の高齢化等で今回が最後の慰霊の旅になるとのこと、「僕も行きます、参加させて頂けますか？　それと新人の女性カメラマン達も連れて行きます、彼女達の勉強にもなりますし、写真もバシバシ撮らせます」「そりゃいいネ、皆さんも喜ぶョ、事務局には私からお話ししておきます。」こうして06年10月フィリピン慰霊団との同行撮影の機会と許可を得ました。私自身三つの目的を持って参加させて頂きました。一つは19歳・24歳の女性カメラマン達に、自分の眼で見たもの、感じたもの、そして実際に手で触れた感触を大切に、いつかそれを土台に写真を表現する力になってくれれば…普通の日本人が戦争をきっかけに、どんな想いでその地に立ったのか？勝った負けたというより、どんな気持ちだったのだろう？などとそんな広がりの有る写真家に育って行く機会になってほしい…私自身40年間多くの広告写真を撮って来ましたが、いかに企業のイメージを良く見せるか、その商品を美しく写し、高級感や機能性を感じさせ、いかに消費者の購買意欲につなげるか、を仕事にして来ましたが、それはビジネスとしての写真です。「撮りたい写真」もありますが、企業の依頼や仕事の写真だけではなく、「撮らなければならない写真」があるように思います…。今回の慰霊の旅や、そこに参加される方々の想い、遠い異国で古里の事を思って、亡くなったであろう多くの人達の何かの痕跡や証し…その時の濃い緑のジャングルや空の色、夜のにおいや、満天の星、風や海の音…などを体いっぱいに感じて、おじいちゃん達と共に手を合わせ冥福を祈る…そこで感じた何かを撮る、若い彼女達にとっては難しいテーマかも知れませんが、私がいつも言う「あとは、自分で考えろっ！」に応えられる逞しい「彼女たちの比島撮影戦記」になれば…と、10名の女性撮影チームのリーダー仲田千穂（24）と最新人の杉村麻衣（19）の2名を参加させました。特に仲田は、19歳から5年間九州と沖縄の中間にある喜界島に通い、若い特攻隊員が残していったと言われる「特攻花」を撮り続け、05年写真集を自費出版し、全国的に大きな反響を呼んだ新進気鋭の女性写真家です。目的の二つ目は、若い彼女達には偉そうに、「実際に自分が見たもの、手で触れた感触を大切に…」等と言うものの、私自身は「それは理想や」…と全く逆の発想をして行動して来たと思います。今回のレイテ島には一度も行った事はない…が、大体わかる、イメージで分かる…そのイメージがどれだけ実際に近いのか？それを今回初めて試して見たい、というのが理由です。私は現在61歳、昭和20年2月、朝鮮半島にあった日本海軍基地「鎮海」の軍港の官舎で生まれ、その6ヶ月後の敗戦で日本に引き揚げて来ました。当時妻子を連れて行ける任地で内地以外では鎮海防備隊だけだったそうです。父親は昭和6年に佐世保海兵団に入団、上海上陸作戦にも参加した海軍生活の長い人でした。20年前に亡くなりましたが、私が子供の頃「僕の生まれた鎮海は、どんなところ？」と聞くと、(1)軍港の官舎、(2)桜が見事、(3)2月はいつも川が

凍るのに、お前が生まれた14日は、川がとけて流れ出し、「この子は人が争ったり、いがみ合ったりしていても、この子の笑顔で和解します…」と手伝いの朝鮮のばあさんが喜んでいた。この三点だけが情報の全てでした、永く「自分の生まれた場所を、一度でいいから見てみたい…触ってみたい…」30年前に知人を通じ現在の韓国海軍基地鎮海の官舎周辺を見たいと、訪問しましたが、基地周辺は立入禁止でした。今はどうか知りませんが、61歳の現在も見る事は出来ません。でも「軍港で、桜がきれい、2月には川が凍る…」「まーいいかっ、大体わかる、何となくイメージ出来る」何事にも非常に興味は持つが、なかなか実体に触れられない似たような体験が多く、いつの間にかその分イメージする力が強く引き出されている感じがします。レイテ島には一度も行ったことがない、でもその種の本は何冊も読み、ジャングルの奥の奥まで行った体験は何度も何度も本の中や、イメージで解かる。でも行った事が無い…が、80％空気は解かる…。「何を言っとるんだネ、61歳なんてまだまだ若くて元気いっぱいのはずだョ」又、板津さんに言われそう、「何を言っとるんだに、見た事もありゃせんのに、実際に目で見て、手で触れた感触を大切にせにゃ、おえりゃーせんでョ」よしっ、この機会に行こう、イメージとどれだけ近いか…第三の目的は、今回の慰霊団にはきっと実際の戦場に行った方々が多く参加されるはず、この機会に、父親から聞けなかった生（なま）の体験を聞ければ、そして今生きておられる方々に「敬意」や「尊敬」そして感謝や誇りの意味を実感したい、日本人は何故戦争の話を嫌い、避けるのか？若い頃父親に戦争中の話を聞こうとしましたが、その都度母親が、「やめてちょうだい、戦争の話なんか」と寸断され、全体の流れが全く掴めないままでした。母親にすれば敗戦と同時に朝鮮から赤ん坊の私と5歳の兄を抱えて引き揚げて来た辛苦、その後の貧困を思うと無理はありません。それでもこっそりと父親に戦争の話を尋ねると、父親もヒソヒソと母親の目を盗み、触れてはいけない秘密の話のように、断片的な小声で聞いたものです。父親と同じ年のアメリカのおじいちゃんも孫に質問をされるでしょう。「おじいちゃん、戦争はいけない事なの？戦争は恐いの？なぜ戦争に行ったの？」と、「ああ戦争はいけない事だよ、そして恐かったョ、でも兄弟や親、愛する家族や、国を守る為に、時には立ち上がり戦わなければならない時もあるんだョ」「ふーん、でもおじいちゃんは恐かったけど愛する家族や国を守るため、勇敢に戦ってくれて勝った、僕達のわが家の英雄だネ、やったー」…又勝手にイメージしましたが、大体近い様に思われます。一方敗れたとはいえ同じく勇敢に戦った日本のおじいちゃんは、黙して語りたがりません、「兵士の戦争体験記」的な本は2百冊以上読みましたが、そのたび「大変やったんやなー」戦いだけでなく、最後は大体飢餓のパターン、全て負け戦、段々気が重くなり、ストレスは溜る一方、「おー日本人もやるナー」と思えたのは、中野学校出身者の地味で目立たぬ活躍が中心の本、あとは特攻隊の体当たり攻撃に戦々兢々とする米軍側の資料や証言を取材した本でした。日米互いに苦難の道を歩みながら、最後に勝利した側とでは後の歩みや、苦しみが違うのかなーとも思い、その後の復興も戦争を体験した人々の血と汗によるものでした。又、亡くなった方々も日本の発展を願っての戦いだったと思います。若い彼女達には一切の予備知識を与えず、高野山で慰霊の祈願祈祷をし、私達3名は大阪を出発、皆さんとはマニラで合流、彼女達にとっては実際に戦場体験のある旧軍の方々と一週間行動を共にする事自体が「彼女たちのレイテ戦記」とも言えます。結論から言えば、圧倒的に「おじいちゃん軍団」の勝利でした。19歳の杉村は将来性で参加させましたが、24歳の仲田は前述の通り、5年間喜界島に通い「特攻花」写真集を出し、全国5ヶ所6ヶ月間連続の写真展巡業をし、私の友人カンヌ映画祭受賞の中野裕之監督に「仲田さんの写真には今は亡き人に対してのリスペクトの気持ちを喚起する力がある。戦争は過ぎ去り、飽食でエゴに満ちた現在にこの花は、自然界の法則に則って再生を繰り返し、生きる事についての考察の機会をこれからも与え続けてくれるだろう。感動を何とか残し伝えたい。これこそ写真道の正しい道である」と絶賛、その仲田の感想は「すごいです。毎日朝5時の集合15分前には100％全員集合されていました」「公式行事のスピーチは、大勢の外国人の参列する前で堂々と英語で謝意を表されていました」「食事やお酒、トークも元気さも凄いです。慰霊碑の前では全員背筋をピンと張り、かっこ良く、感動してしまいました」「大使館や現地の市長も彼らに対しては最大の儀礼や、敬意を払ってくれていました」「特に在フィリピン共和国全権大使の挨拶のあとのアイスのデザートはめっちゃおいしかったです」など彼女達も完敗は認め、敬意

も心から払っていました。数ヶ所の慰霊碑を廻り、式典、献花、拝礼、般若心経も、初めて、最後まで声をあげて読み、彼女たちもコレヒドール島で海に向かって「海行かば」を歌いました。線香をあげ、タバコも供えました。現地の人達も珍しそうに集まり、初めは遠まきに笑って見ていましたが、そのうちに子供達も真剣に我々一行に敬意のようなものを払うようになって来ました。何か凄く誇らしい気持ちにどんどんなって行き、掃除や管理をして頂いている方々に心から感謝する気持ちも、自然に出て来るようになり、イメージには無かった多くの事に直接触れ、目的の全てが叶った気持ちになりました。移動のバスの中や食事の時も、一番陽気で元気なのが91歳の方でした。「えーっ、3回も撃墜されたのですか？」など数奇な運命の方もおられ、貴重な体験をさせて頂きました。帰りの空港では空港関係者が私を呼び、柱に有る大きなプレートを笑顔が指差しました。そこには「このマニラ空港は日本のODA政府開発援助で建設されました」と感謝の意が記され、昼の光を受けて、何か誇らしく輝いているように見え、参拝した慰霊碑の数々と重なるように再びイメージしてしまいました。

比島慰霊、英霊との出会いの旅

仲田　千穂

06年、一番大きな旅になった比島での多くの出会いは、私にとって大きな感動を受ける旅になりました。

私は「特攻花」という野の花を19歳から5年間撮り続けています。その花は61年前の大東亜戦争中、沖縄の米艦隊に体当たり出撃する若い特攻隊員たちに、娘たちは野の花をそっと贈っていました。隊員たちはその花を握りしめて沖縄に向う途中、「花も一緒に散っていくのは忍びない…」との思いからか、九州と沖縄の中間に位置する中継基地喜界島の上空から花を落とし、別れを惜しむように沖縄に向かって行きました。その花の種が風に舞い…61年たった今も島の滑走路周辺に毎年花を咲かす、その小さな天人菊の花を島の人たちは、「特攻花」と呼び、平和を願う花として大切に見守っています…。この話を5年前に聞いた瞬間「その花を見たい、撮りたい」と思い、5年間島に通い、撮り続けています。戦争を知る旅は幅広く学ぶものがあり、板津忠正さんや多くの方がこの比島慰霊の旅へと導いてくれたような気がします。比島で戦争があった事は知っていましたが、何十ヶ所もの悲惨な戦場があった事は初めて知り、日本人を嫌っていてもおかしくない比島の人たちはとても友好的でした。第一神風特別攻撃隊初出撃といわれる東マバラカットの飛行場跡地では、出撃で飛び立つ時の気持ちは、比島からでも九州からでも変わらないのだろうと、その場所に立った時改めて想いました。61年前のフィリピンと今は違うと思いますが、日本で育った当時の若者にとっては、異なる習慣や言語、食べ物や景色、経験のないにおいや風、それでもたった一週間いただけの私でさえ慣れてきました。どこで戦っていても皆同じ気持ちであったのだろうと思いました。そして、亡くなった英霊と言われる当時の若者たちを見る事は出来ませんが、お会いし、心を通わす事が出来たような感じがしました。そして又、新たな仲間が迎え入れてくれたようにも思いました。何と言っても大きな驚きは特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の一行の方たちとのお話の数々でした。生き証人である皆様と会え、お話を聞かせて頂けたこと、あの時間内では、ごくわずかのお話しか聞けませんでしたが、私にとっては貴重な体験でした。3回の撃墜にあい、40日かけてジャングルや海岸を歩き、友軍基地にたどりついた話や、63年ぶりにマニラホテルを見て、当時の同僚の戦友が撃墜され、白いマフラーをなびかせ、手を振って落ちて行くのを思い出します…と話される人、飛行艇で右腕の手首をなくされた方が、慰霊碑に敬礼をされる姿、戦争の体験者のお話はどの話も映画の中だけのような、スリルのある強烈な印象を受けます。しかも、それも実際に体験されているのだから、その苦闘は図りきれないだろうと思いますが、少しでも分かることが出来るのなら…との思いと、そんな話を後世へ伝える橋渡しの出来る私でありたいと思っています。私は写真という一瞬一瞬を切り撮る力で、伝えられる力を使い、語り継いでいければと思っています。

私は日本を愛する気持ちが無くならないのと同様に、フィリピンの人たちも、アメリカの人たちも自分の国を愛していると思います。もっと私たち日本の若者も歴史の事実を知り、国と国との争い、なぜ戦争が起こったのか？そして当時の日本の若者たちはどんな思いで戦ったのか…その後はどんな思いで戦争や平和の意味を思ったのか…そんな事を少しでも知っておく必要があると思っています。今回の旅が私にとって大切な宝になり、皆様の温かいアドバイスや教えを大切にし、感謝の気持ちを忘れず、今後の写真の活動に

活かして行きたいと思います。皆様ありがとうございました。

フィリピン特攻慰霊祭に参加して

杉村　麻衣（19）

多くの人が参加したこの慰霊祭で、私は多くの事を見て知って考えたように思います。

6日間、参加者の皆さんに色々なお話を聞かせて頂きました。当時の状況、想いから戦争の話まで本当にたくさんの事を教えて下さいました。お話を聞くなかで皆さんがとても熱心にお話をして下さるのはなぜか、と考えました。私の祖母は現在83歳で戦争を体験した人間ですが、あまり当時の事を祖母の口から聞く事はありませんでした。思い返すのも嫌な事もたくさんあっただろうと思うのに、皆さんがいろんなお話をして下さるのはお話の端々できく「伝えたい」というお気持ちからなのかと思いました。戦争を知らず平和の中で育った私には戦争はどこか遠い国で起った事、だったように思います。皆さんに教えて頂いた事、実際に戦跡を歩いた事で決して遠い国のお話ではないと知り、皆さんの「伝えたい」想いを知って、私はもっと知らなければならない、そして私も友だちに知ってもらいたいと思いました。

6日間、いろいろなお話をして下さった皆様、私はたくさんの事を知って学び考える時間を頂きました。

本当にありがとうございました。

左より杉村麻衣さん、仲田千穂さん、板津忠正氏、臼田智子さん

フィリピン慰霊旅行に参加して

鳥山　隆（奈良県）

この度、初めて参加させて頂いた比島慰霊の旅は私にとって大変意義深いものでありました。一つは勿論比島に散った特攻隊員始め全英霊に対する慰霊ですが、更に学徒動員で微集され、昭和20年2月にセブ島で戦死した小生の兄の慰霊を現地で行えたことであります。特にセブ観音参拝の折、団長の計らいで、兄の戦死地点ダナオ海岸に向かって皆様に手を合わせて戴いたことは、小生にとって望外の喜びであり、この手記を借り、改めて心より御礼申し上げます。

平成6年、小生は同期（陸士57期）の巡拝慰霊団に参加し、ルソン島を訪れましたがセブ島へは行けず、永い間心残りでしたが、今回はその目的を達しました。更に、レイテ島では同期の本多主計中尉の慰霊を現地で実行出来たことも大変幸せでした。彼の活躍は、大岡昇平著「比島戦記」で、リモン峠の激戦の中に実名で紹介されていたので、正に米軍戦車の砲列にさらされている兵士達の死闘が眼前に浮んで大変感動しました。

この旅行を通じて感じたことは、フィリピンが予想以上に発展し（日本からの援助も大きいと思う）、セブ、レイテ等も豊かとは言えぬまでも平和な佇まいを見せていた事です。慰霊行事にどこからともなく集ってくる子供達の好奇心旺盛なキラキラ輝く眼は、現在の日本の子供達に欠けた素朴な親しみを感じました。そして、この国が益々平和に発展して行くよう祈りました。

最後に私の命ある間にもう一度兄の戦死地点であるセブ島ダナオ海岸を訪れ、心ゆくまで慰霊を行いたいと思っております。

フィリピン慰霊の旅

岸　由男

財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会による最後の比島式典になるでしょうから参加しませんか、と誘われて行ってきました。

私の想いは比島全域ですが、取り分けクラーク飛行場を中心とした地域です。初日06年10月24日午後バス1台でマニラ北方約100粁のその地に向かいました。バス走行中に参加者の自己紹介がはじまり、マイクが私の所にきた、その時、前方右手に忘れようとしても忘れられない山、標高500米前後？のアラヤット山が見えてき、声の止まる程感激、仲々話ができませんでした。約62年振りでした。私は陸軍航空輸送部第7飛行隊員として、昭和19年2月から20年1月まで、クラーク地域からニューギニア、ジャワ、セラウェシ、シンガポール、マレーシア、タイ、ベトナム、広州、等の各地へ小型、当時の大型、又は練習機等の空輸が任務で、日本にも取りに来たりしていました。いずれ

もクラークが主基地でした。休日はなしで、ニューギニアから帰った翌日6時出発、ダバオ直行なんてこともありましたが、夜中に整備の人達のエンジン音を聞くと頑張らなければと奮起したものです。

19年9月バンコック空輸から帰って、9月21日でしたか、早朝米軍の攻撃を受け、隊の仲間も戦死しました。それから1か月足らずの間に海軍機、陸軍機の150機位がやってきましたが、半月位のうちに消耗してしまった感じでした。キ67、4式重が編隊離陸で爆発炎上とか、特別攻撃隊をお送りする前に餅搗きで励ます光景を見たのもこの地です。クラーク・リリーヒルでの慰霊祭は10月25日早朝、フィリピン軍楽隊によるフィリピン国歌、君が代の演奏で始まり、鹿児島最福寺住職池口恵観師以下の僧侶、徳洲会の団体、そして私達協会団体と盛大でした。

そして、アンヘレス市にダニエル・H・デイゾンさんのご自宅を訪問。私設カミカゼ・ミュージアムを拝見。自ら描かれた特攻隊士達の姿に感銘。比日友好にお礼を申し上げながらバスにてマニラに帰りました。フィリピン慰霊巡拝旅行に参加させていただき、良かった、ありがとうございました。

マンゴーのなるおかに立つ観音の
　ひとみの先のアラヤットかなし

強者が幾百飛びしクラークで
　海ゆかば聞き静かにいのる

特攻隊戦没者慰霊祭に同行して

穴山　和幸

ジェット旅客機で4時間、こんな遠い南の国に日本の飛行場があったこと自体驚きでした。

関行男大尉が最初の特攻隊員ということは知っていましたが、フィリピンの基地より飛び立ったことは初めて知りました。今までは鹿児島だとばかり思っていました。

マバラカット西飛行場跡に今も昔のまま残っている格納庫の跡の多さにも感動を覚えました。そこに日本の飛行機があり、日本の兵士がいて、祖国日本の勝利を信じて飛び立って行ったと思うと、日本もすごい国だったんだなぁと思いました。

コレヒドール島では、大砲の大きさにびっくりしました。あんな大きな重いものをよく山の中まで運んだものだと感心しました。あの鉄の塊に無数の弾痕がついているのを見て、やはりスゴイ戦いだったのだということを想像させられました。

戦艦「武蔵」がこの近くで沈んだことも始めて知り、海に向かって全員で合唱した、「海ゆかば」には心を打たれました。やはり、本当に戦争で戦った人が唄うと何か違う気がします。

「モンテンルパの夜はふけて」の歌は知っていました。しかし、ここモンテンルパ刑務所で日本兵が処刑されていたということには驚きでした。戦争に負けたというだけで、なぜ処刑されなければならなかったのか、すごく悔しかっただろうと思います。亡くなられた方々の石碑には心を込めてお祈りしました。

ともかく、今回は今まで知らなかったことをいろいろ知ることのできた旅行になりました。

◇　◇　◇

ある特攻戦没者の遺族からの手紙

田中　賢一

…「特攻」が到着するとその夜一晩で読んでしまうのが例でした。以前頁数の少ない時もありましたが、最近は部厚くなりましてなかなか読みでがあります。…激戦の様子は勿論ですが、他のことで「ふうん、そうだったのか」とか「それだからああだったんだなあ」等、女は征けない戦地のことなど、納得のゆくことがたくさんあります。

村役場の玄関で送ったあの人の後姿と、特攻で出で発つ時一番機に乗り、あとに続く僚機を気遣いながら、多分開門岳を左に見て、沖縄の空に消えて征った故人を思って歩いた六十年でしたが、あの人の傍にゆくのも近くなりました。そんなことを考えるこの頃でございます。…

筆者註　あの人とは第一〇七振武隊
林　義則少尉

平和へのみちしるべ（抄②）

知覧特攻平和会館参観者の声

「この『平和へのみちしるべ』は、知覧特攻平和会館が第50回知覧特攻基地戦没者慰霊祭記念誌別冊として発行されたもので、同会館の見学者ノートや手紙に記載された参観者（小学生から元特攻隊員まで）の率直な意見や感想文の中から一部を抜粋収録されたものである。同会館のご了承を得て、全75篇中その一部を2回に分けて転載させていただくことにした（順不同）。なお、事柄の性質上参観者名は匿名とさせていただいた。」

⑮防大生「何度も訪れています。ここの二回目のスピーチコンテストで入選し、私にはゆかりの深いところです。でも来る度に違ったことを考えます。

私は今、防大生で将来の幹部ですが、その立場から見て、平和を求めることの難しさを感じます。平和というのは簡単ですが、何もしないことが平和ではありません。絶対の平和など有り得ず、各国が安全を確保出来ることが平和となると思います。

日本の今の平和は先人達の努力によってもたらされたけれども、いつまで続くのでしょう。私たちの努力は足りているのでしょうか。こういう立場にいる私でも、ここで行われたような特攻はためらいます。また、指揮官達の苦悩はいかばかりだったでしょうか。

私達は安全を求め、戦争がなくなるように努力していかなくてはなりません。戦争は人間の欲望がある限り、なくならないでしょう。でも、なくす努力をすることが必要であるし、尊いと思います。

いろんな意味で、もっと勉強しなくてはと思います。」

⑯沖縄県立中学校同期会「私たちは沖縄戦の時、通信隊員として参戦旧友七二名を失いました。私たちが南部を彷徨っている時、知覧から発進した特攻隊の皆さんが、米軍の砲火を避けて突っ込んでいたんですよね。

私たちは、十四～十五歳で少年航空兵の皆さんと同じ年頃でした。皇国の必勝を信じ散った旧友の五〇年忌に知覧を訪れました。涙・涙の連続でした。人の殺し合いのない平和な世界となりますように祈念いたします。私たちは、亡き旧友の分まで親孝行をし、平和の尊さを子供たちや孫に伝えていきたいと思います。」

⑰中学校教員「初めて知覧の地を訪れました。平和会館をよくぞ建てられたと、深く感謝します。中学校に勤務しましたとき平和教育に携わってきましたが、現場で子供達に平和教育をしようとしますと、次々と妨害がでてきます。教育の本当の目的は、平和な世を愛する生徒達の育成にあると思うのですが、なかなか難しいものがあります。

私自身の息子も十七歳ですが、亡くなられたたくさんの若者とダブって見えました。もし、我が子がと考えると、生きている心地がしません。たくさんの無名の尊い命の礎の上に、今の私達の平和があると信じます。二度と同じ時代が来ないよう、微力ながら、自分をしっかりもって生き抜きたいと思います。ご冥福を心より祈ります。」

⑱一男「ただ悲しいとか気の毒だというのではなく、こういう人たちが送った人生というものを、歴史としてきちんと後世に受け継いでいかなくてはいけないと思う。

戦争はいやだと人は言う。誰もがそうである。なのに、起こってしまうのが戦争なのだ。特攻隊員たちは、そうせざるを得ないしがらみに押されるように、死へ向かったのだと思う。

隊員たちの手紙には、父母への感謝、家族を世話してゆけぬことへの詫び、残った者たちの健康、弟や妹たちへの勉強の勧め、今までの自分の幸福。それらは、後の日本の人たちすべての人が、素直に心に入れることのできる言葉だと思う。こういった言葉を私達のものとし、日々の生活に良く反映させていくことが、隊員の歴史として後世に伝えるということであり、また、隊員への感謝となるのだと思う。」

⑲韓国人男性「大韓民国ソウルより来たる韓国人（元少飛十五期生）、一九四四年第2次世界大戦がたけなわの頃、此処知覧の基地にて操縦訓練を受け、北朝鮮宣徳陸軍爆撃隊に配属され、終戦の頃まで特攻訓練教育中に終戦を迎えてより五〇余年、この地に再び来て特攻隊の戦友たちの雄姿を目のあたりに見て感ひとしお。

〝国の為に身命を屠して壮烈に征きし戦友の霊に心より冥福をお祈り申し上げます〟

これを期にして、韓・日友好親善の實を固く結んで永久に兄弟の愛を堅持して行きましょう。」

⑳**Y男**「現在の偏向した教育からでは、何故大東亜戦争が起き、英霊の皆様方が国のために尊い命を捧げなければならなかったのか、理解できないと思います。誰が好きで戦争などやるでしょうか。現在、大東亜戦争を侵略だなどと言う人にこそ見て貰いたい。祖国を守り、亜細亜を開放するために尽くした人達がいたことを。

九州には神風連から、西郷南州、頭山満翁、葦津珍彦、宇野哲人、宇野精一に至るアジアを考えアジアを見つめ、祖国を愛した人達があることを羨ましく思います。」

㉑**中学校教員女性**「教員として五年の月日が過ぎようとしています。私は、長崎の中学校の教員です。長崎は原爆投下の地ということで、平和学習も盛んに行われています。

今年は、私達のクラスは「きけ、わだつみの声」のビデオを見て、戦争とは何か考えました。子ども達はビデオの中の特攻隊に関心を持ち、この知覧の特攻隊の本を使い勉強させていただきました。そして、どうしてもここへ来たくて寄りました。

入って何だろう。戦争って何だろう。いろいろなものを感じています。正直、今、遺品や遺書を読んだ私は、何と表現してよいか、分からない気持ちでいっぱいです。現代の子は、「死」というものを軽視しているように思えます。社会が、大人が、時代がそうしているのかも知れません。

修学旅行などを利用し、もう一度、ここへ来たいです。そして、子ども達と一緒に、「命」「平和」を考えたいと思います。本当に、言葉にならないものを感じました。」

㉒**M女**「卒業旅行で知覧を訪れました。広島を中心に、平和記念館を歩いた経験はありますが、ここ知覧が特攻兵士の〝最後の場所〟であったことを知りませんでした。大変貴重な遺品の、中でも私たちと変わらない若い男性の遺書が衝撃的でありました。

母上、母上と少年たちは、母を呼んでいます。そして、〝泣いてはくださるな〟と言い残しています。母の存在が兵士たちの心の奥で深く根づいていたことを、強く知らされました。母は永遠なのだなあと思います。

今の日本では、中学生が荒れ、皆、自分中心の人生を送ることに必死です。国を信じた、一筋の男性らしい姿は、今から見ると悲しい結果ではありますが、一人の人間として生を授かったことへの思い入れは比べものになりません。平和を望むためには、このような兵士たちの思いをもっと知り、二度と繰り返さないため学習する必要があると思います。家族を最後まで思い続けた、若い青年の死を無駄にしたくないと思います。生きることへの責任を再び考え直したい。」

㉓**A男**「私は二四歳の男性です。私よりも年齢の若い人達が、自ら志願して特攻へ行ったというのは信じられません。今日数々の資料を見て得た感想は、「戦争は二度とするまい」というありきたり（失礼）なものよりも、昔の若い人達の国や家族に対する忠誠心や愛情の強さを感じたのが、一番強烈でした。勿論こんな悲しい戦争というものは、二度とあってはいけないのです。と同時に、改めて家族の大切さを学んだような気がしました。」

㉔**K男**「英霊の遺書にふれた。愛する人、子ども、父母を護るために、自らの命をかけられていた。英霊の心を偲ぶと心がふるえ涙がこぼれた。

私が今、この豊な日本で、幸せに暮らせるのは、私たちの世代を信じ、護るために命を使われた方々のおかげであると知った。

遺書の中に次のようなものがあった。（原文は憶えていない）「もう何も恐れない。ただ死を恐れる犬死を」我々のために命をかけられた人の死をむだにはしない。我々の世代が、英霊の願いに応えるため、英霊の思いを受け止め生きていかねばならないと思った。」

㉕**結婚記念旅行の男女**「少年ともいえる兵士に皆さんの威厳あふれたりりしい姿、表情に驚きました。私達はあんなにりりしく、誇らしげに写真に写る事があるでしょうか…。最近の若者は…と言われるのが当たり前だな…と思いました。遺書と題して堂々と文の巧みさ、達筆さに感心しました。まだまだ学ばなければならないことがあるな…と思います。先人が作ってきた平和の尊さを強く、ここ知覧で知ることが出来ました。平和を願い生活し、次世代にも語り継いでいきたいと思います。結婚の記念に旅をし、ここ知覧を訪れることが出来てよかったです。」

㉖**バスガイド**「今日、最後のバス乗務としてお客様をご案内して参りました。約四年間知覧特攻平和会館に足を運びお客様へ戦争の恐ろしさ、悲しさ、命の尊さを訴えてきましたが、何度足を運んでもいい意味で勉強になる所だと思って来れました。私自身戦争は体験していませんが、体験談など伺ったことをお客様にご案内致すと涙される方も多く…。

この仕事をして一番心に残った事は、中学生の修学旅行で生徒さんに案内した時でした。見た目はちょっと悪がっ

ているような生徒さんが、必死に私の話に耳を傾けてくれました。心の中ですごく嬉しくなりました。この仕事だからこそ皆さんに平和について語れたのかもしれません。

二度とこのような事がおこらないよう将来自分の子供にも教えていこうと…そして、忘れないように最後に足を運べてよかったです。」

㉗**韓国人女性**「韓国から訪問したものです。歴史の裏に朝鮮の若者たちが特攻隊に参加したという事実を知りました。七四歳の老婆の感動はどうしても表現が出来ません。只人生の花と散った故人の冥福をお祈りいたします。神様どうぞ故人たちを天国に招いて下さいませ。」

㉘**K男**「私達がこの平和会館で感じ得た感動や感謝の気持ちは、現在の平和を享受できる有難さの表れであり、特攻隊員として祖国のために散華された英霊に対する敬意をそのまま今の世の自衛隊員に向けなければならないと思います。

平和は尊い！その平和をもたらしてくれたのは憲法ごとき条文ではなく日米安保体制と自衛隊のお陰なのです。特攻隊員が尊い犠牲となって護られたこの日本を私達も引き続き護らなければならないと決意を新たにしました。」

㉙**N男**「知覧特攻平和会館には是非参拝したいと永年の夢でした。この度念願がかない感謝しております。先人の崇高な特攻隊の方々により現在の自分が生かされ日本国家の繁栄があることはまざれもない事実であります。

国家を想う気持ち、家族・両親を大切にする精神、自分を捧げても大義を尽くす日本魂にふれ、深い感動を憶えました。安らかに眠られこれからも日本の行く末を見守って下さい。本当にありがとうございました。」

㉚**Y男**「今の若者とのあまりの違いに愕然とする。戦後教育の偏向、非進歩的文化人、皮相的な見方しか出来ないジャーナリズムの責任は極めて重いということである。日本の文化を愛し、愛国の気風を養わなければやがて日本は、世界の孤児となるであろう。日本の教育を〝ゆとりの教育〟ではなく抜本的に改革しなければならないことを改めて痛感する。」

㉛**N男**「言葉がありません。殆んどの人が僕より若くして死出の旅に出ていたなんて、十七歳なんて今では高校二年生です。彼らを駆り立てた時代の雰囲気と戦争を恨みます。

時代が違っていたのなら、優秀な彼らのことですから各界で活躍されていたことでしょう。あの戦争で死んだ人達に本当に今の平和の価値を教えられたような気がします。」

㉜**Y女**「桜の満開…悲しい程美しいさくらを見たのは六〇年の生涯の中で初めてです。沢山の有為な若者がこの桜のように美しく悲しく散ったんですね。どんなに無念だった事か。静かに流れる月光の曲のピアノが胸に深く深くしみます。

今のこの平和、特攻隊として命を捧げた皆様のお蔭です。ほんとうにありがとうございました。」

「陸軍挺進部隊外史」の自衛隊空挺隊員の読後感
―同年代の日本人でかくも違うのか―

田中　賢一

忠孝も信(まこと)も愛も
忘れたる
民となりしか
扶桑の国は

私は平成二年以降この会報に掲載した陸軍挺進部隊関係の記事を取り纏め若干追加し、「陸軍挺進部隊外史」と題する小冊子を作り、我々の精神を受け継ぐ自衛隊空挺団の幹部（将校）全員に頒布した。（外史とは草莽の編集した歴史の意）

この冊子を渡す時読後感を聞かせて欲しいと要望したところ、八十数名の者が書いてくれた。それを読むとかへって我々が教えられることが少なくない。この冊子の記事のうちで「義烈空挺隊員に見る特攻隊員の生死感」という一篇は強い印象を与えたようである。国防の任を負う自分が、そのような立場にたったとき、果たしてその境地に達しうるだろうかとか、特攻隊に指定され半年近くの間、一三六名に一名の脱落者が無かったことについて、指揮官として自らを顧みるという真摯な態度については、私の方が感銘を覚えた。

「偕行」の一月号に載っていたが、ある会員がNHK教育テレビの短歌に応募し次の歌を出したら、選者の目に適い入選した。

放映の前と後に

放送局の担当から電話があって、忠孝という言葉は誤解があるから入選を辞退してくれと言ってきたが、詠者は受け付けなかったという記事があった。これを読んで私は、戦後の日本弱体化政策による教育はかくも浸透しているかと、驚きを禁じ得なかった。月とすっぽんという言葉があるが、自衛隊員とNHKのこの担当者は多分同じ年代になると思うが、かくも違うものか。この自衛隊員に国防を任せることの安心感も覚えた。

お寄せ頂いた読後感は本誌の印刷で五〇頁を越すと思うので、順序不同だが三回に分けて掲載することにする。

空挺団本部

三佐　卯月宏明

一、はじめに

ありのままの真実を書き記した本書に出会い、とりわけ義烈空挺隊員の死生観の一端に触れることができたことは、改めて自己の職責を見つめる機会となった。

僅か60数年前、手の届くような近年にあって、我々の先人が如何に国を思い、出撃し、後に続く者に未来を託して逝ったのか、純粋な愛国心及び日本人の奥底にある民族の血について深く考えさせられた。

二、義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観

著者は、次のように隊員の死生観を表している。「……義烈空挺隊の場合は、当時の日本人に共通した国家観、それに加えて、軍人として鍛え抜かれた責任感が根底にあり、その上に中隊長に対する信頼感が乗り、自然のうちに死に対決する姿勢がとれたのではなかろうか……」、また特攻出撃後、航空機の発動機故障で不時着し生き残った者の言葉として「……中隊長が引き連れてゆくのだから、それについて行くのは当然だと思い……」と紹介している。

中隊長および小隊長等、それぞれの指揮官は自己の部隊をもって与えられた任務を完遂するにあるが、その最も大切な基盤のひとつとして、「一人ひとりの部下隊員と生死を共にする絶対的な絆が培われていること」があると感じた。義烈空挺隊は、動員した一三六名が最後の出撃に至るまで1名も脱落することがなかったとある。その鉄石の団結が勇気を鼓舞し、ひいては任務にまい進する強い力となっていったのではないか。今に言う、傘の絆は当時からごく自然にしかも強固に出来上がっていたのであろう。

果たして私自身が、生きて帰れない任務を命ぜられた際、隊員は付いてきてくれるであろうか。部隊を率いることができるであろうか。そのような部隊を練成できているか。なにをもってすれば、それほどの強い信頼感が生まれるのであろうか。

部隊団結および任務達成のための力の核心が指揮官であり、そのように成り得る理想に少なからず近づけるように識能の練磨及び人格の修養に努めなければならない。またそれを手に入れたいと希求する。

三　日本人として

ひらひらと舞い散る桜花に感じる美しさ、儚く消えゆくものへの美的情緒、

これら「もののあわれ」の感性は日本人特有のものであるという。

己の死を花に例え美しく散り行く、民族の未来永劫の発展を信じて後に託す、家族愛、郷土愛そして祖国愛をもって殉じた者の精神を、いま生きる日本人は受け継ぐ責任を持たねばならないと感じた。志を継ぐ者を信じて死地へ赴く顔さえ晴れやかになるという究極の状態は知る由はないが、僅か数世代を経ただけのわれわれの遺伝子には、それからの精神が必ずや生きているのだと思いたい。

四　結言

現在社会は米国化によりさまざまな荒廃をきたしている。余りの合理的、個人主義的に行動する隊員に驚かされることすらある。私に対してはもちろんのことこれらの不甲斐なさに著者の叱責が聞えるようだ。

我々は、日本人たることの砦として、さらには自衛官のあるべき姿を映す空挺隊員として、国難に殉じた英霊に恥じることなく、先人の志を受け継いで職務に没頭しなければならない。『陸軍挺進部隊外史』を読んで旧挺進隊員の生き様に接し、自己の軟弱さを猛省するとともに自らの修養、人格の形成及び後輩の育成に対する気持ちを新たにした。

一等陸尉　阿達文明

この度、「陸軍挺進部隊外史」を読んでの所見を述べ、また、これにより今後の職務に対する資となるものを導き出したいと思う。

まずこれを読んで感じたことは、陸軍挺進部隊（空挺部隊）は任務に忠実であり、死をも恐れず将兵ともに極めて士気が高いという点である。

空挺作戦が重要目標の奪取、主力の先遣・増援等の任務に就くことを将兵は承知し、特攻作戦においては、生還の見込みの全くない任務に進んで就いたことは、国家に対する忠誠心と部隊に対する名誉と誇りの表れであったに違いない。

現在の空挺隊員はどうであろうか。空挺団に対し誇りを持ち、いかなる任務を付与されても完遂しようとする意志を保持しているだろうか。

我々空挺団幹部がすべきことは、いかなる任務を付与されても、任務完遂のために隊員を育成することにあるが、我々幹部がしっかりしなければ、隊員の育成もできない。今年度末、中央即応集団隷下になりますます即応部隊として期待される中で、空挺団の中核となるべく幹部が何をすべきなのかをよく考え、実践していかなければならないと感じた。

次に感じたことは、「死生観」である。特に義烈空挺隊将校の「死生観」について感銘をうけた。まず、隊長の奥山大尉は幼年学校出身であるという将校としてのプライドが、副隊長格の渡部大尉は敵愾心が、某小隊長はその職務が心の支えであったと、また、部下たちは、当時の日本人に共通した国家観、それに加えて、軍人としての鍛え抜かれた責任感が根底にあり、その上に中隊長に対する信頼感が乗り、自然のうちに死に対する姿勢がとれたと述懐されている。

「死生観」については、防衛大学生、初級幹部時に考え自分の考えを確立していたつもりであったが、自衛官（軍人）という職務は、一旦事があった場合には生命を投げ打って国を守ることが要求される厳しい職務であることを再度考えさせられた。

死生観を確立するには、死生の問題に対する取り組みや解決法等の自分なりの考え方又は死生に対する価値観を確立することにあると思う。特に今回の「外史」を読んで感じたことは、国家・国民を愛する心を養うことにあると考えた。「自分の意志を継ぐ人がおれば、死して悔いはない。国家の大事は屍を乗り越えてなるものだ」とあったが、我々空挺隊員は、生還の見込みのない任務に進んで就いた人々に、後世を期待されていることを肝に銘じ、今一度「死生観」を確立し、国家に対する忠誠心と空挺団に対する名誉と誇りを堅持することを再度確認した。

二尉　高野寛之

陸軍挺進部隊の成し遂げた壮挙は、わが国戦史上に大きな輝きをもって記され、我ら第1空挺団の精神的支柱でもあります。いかなる戦記・史料にも増して、この「陸軍挺進部隊外史」は当時の空気を湛え、人の血が通った文章、臨場感のある濃密な記述が私の追体験の助けとなってくれました。今回は平成17年に続き、再読の良い機会となり改めて感ずるところ多く、ここに所見を述べさせていただきます。

「統率の姿勢」における分析の教訓

陸軍挺進部隊及び陸上自衛隊空挺部隊において実際に戦ってこられた著者ならではの分析であり、卓見と感じています。パレンバン空挺作戦の輝かしい成功と、レイテ及び沖縄における壮烈な特攻の対比は、多くの教訓を遺していると思われます。準備の周到及び航空優勢の獲得は空挺作戦成功のため

の必須要件であり、「合理的」・「常識的」な統率の重要性を再認識しました。我々幹部自衛官には、任務の重みと部下隊員の命の重みを担う責任があります。「情」による統率を、固く戒めなければならないと感じました。

征く者と残る者の気持ち

動員され勇躍戦場に降下した者、海没や航空機不足等により残らざるを得なかった者、それぞれの複雑な気持ちについて描写されています。軍人・自衛官として訓練を積んだからには、やはりその成果を発揮したいと願うのは自然なことであり、それが叶わず悔しく感じるのも自然なことだと思います。昨年、空挺団はイラク復興支援のため初めての海外任務を経験しましたが、その際自分も同じような感情を抱きました。戦時下の悲壮な想いとは比べるべくもありませんが、哀しい哉、残されて悔しいと感じる自分が居ました。

「今日征くか　明日征くのかは　知らねども
今日の勤めに　吾は励まん」

著者が紹介された歌を聞くにつけ、そんな感情で判断を歪めてはならないと自戒しています。

タクロバン特攻隊長榊原大尉について

私はタクロバン降下部隊長である榊原大尉のことを、著者の著書「高千穂降下部隊」で知りました。

「タクロバン攻撃隊長榊原大尉の携行品は余人と異なる。胸につけた図のうの中には、小丸川で殉職した八人の位牌が入っている…」というものでした。教官として実施した訓練中の水難事故で8名が殉職し、責任を感じ自決を図るも「死に場所は戦場で必ず与えん、その命暫く預かる」と諭されて思い止まり、タタロバンにおいて食料は一つも持たずに輸送機に乗り込み、そして帰らなかった方です。まさに決死の覚悟でこの任務に志願し、収容される見込みの全く無い空挺特攻に従容として赴いたのです。榊原大尉の悲愴な覚悟に想いを致すとき、死生観の確立されていない自分を顧み、なんとも申し訳ない、居たたまれない気持ちになるのです。

「義烈空挺隊にみる特攻隊員の死生観」について

特攻の是非については色々な立場があると思われますが、彼の方々の遺勲が現在に至るまでわが国を守っているという気持ちは、全ての日本人の心の底にあるのではないでしょうか。特攻隊員の末裔である、特攻隊員と同じ日本人である、ということが、私たちの自覚の有無にかかわらず、国際社会における日本の姿を形作り、この国を守ってくれているのだと思います。

なぜあの方々は、苛烈な運命を背負いながら、淡々と出撃に備え、清らかな気持ちで国を想い、身を挺し死の途に赴くことができたのでしょうか。「死生観の確立」と言葉で言うことは容易ですが、現代に生きる私には想像もつかないことです。さらに修練を積みたいとおもいます。

後に続く者を信じ、国難に殉じた英霊たちの想いに恥じぬよう、自分自身の重い務めを果たし得るように、さらに精進して行きたいと改めて強く感じた次第です。

紙面の都合で今回はこれだけしか掲載できなかった。本書に登場する人物の言動を、自己の職責に反映させて述べている人が多く、また昔の空挺運用と自衛隊空挺の立場を対比して論述している人もある。私の論文をいろいろな角度から見てくれたことに、感謝している。

なお私の作った冊子は事務局に委託してあることを申しそえる。

本部前の庭園に昔の落下傘兵の銅像がある

この庭園内にこのような高札もある

伝統なき創造は危殆にして
創造なき伝統は空虚なり

女高生の手紙を抱いて敵艦に体当たり攻撃した堀元官一命の実状判明・第一報

少飛甲15期生会事務局

1　情報提供・情報資料

第60振武隊隊長平柳芳郎少尉（陸士57期）の遺族寺井俊一氏から、少飛15期生堀元官一さんのご遺族と連絡を取りたいとの電話を受けたことによる。

2　寺井氏に、白子祐子氏（別府市在住）から8月アメリカの知人から連絡があり、トニー・ティールという方が、1945年5月4日の沖縄近海への特攻攻撃について調べているので日本側の資料などについて力を貸して欲しいという依頼があった。

ティール氏の父親が1960年代に、アメリカ海軍駆逐艦に乗艦勤務していた縁で調査しているということであった。

(1)　アメリカ海軍公文書に残されている駆逐艦アクションレポートによると、1945年4月29日から5月4日にかけて沖縄群島の作戦に参加していた。

5月4日午前7時半ごろより伊平屋島付近の海域で日本軍機の攻撃に遭遇し、対空砲火等で反撃、同日午前8時40分頃1機の特攻機が損傷を受けつつも同艦左舷に命中、船壁に損傷を与えた。船体横の損害部に残っていた特攻機の一部は同艦のデッキに回収されたが、その中から飛行チャートと手紙が発見され、搭乗員の氏名は手紙の宛名よりカンイチ・ホリモト、チャートより出撃地は南九州の都城飛行場と判明した。

(2)　発見されたオリジナルの手紙とチャートの所在については現在不明であるが調査中。

(3)　帰還兵の証言によれば、マスコット人形と本人手書きと思われる詩集のようなノートも回収されていたということである。

(4)　以上の資料から、駆逐艦に突入したのは、5月4日都城東飛行場から出撃した陸軍第60振武隊の堀元官一伍長（少飛15期）であることは、間違いないと考えられるが、日本側の特攻戦没記録では、堀元伍長の特攻戦死日は5月11日となっており、日本側での再調査が必要と思われる。

［注］

1　米海軍駆逐艦の船名は、情報提供者の調査未了とのことで名称は伏せた。

2　堀元伍長の戦死日については、陸軍航空特別攻撃隊史（生田　惇）陸軍特別攻撃隊員名簿（とこしえ）陸軍航空の鎮魂（総集編）特別攻撃隊（特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会）

以上の4文献とも、5月11日となっており、上記の情報資料の5月4日とは合致しないので、9月26日、靖國神社に、堀元官一命の戦死日時について照会した結果、祭神の記には20年5月4日であるとの回答を得た。

発見された女学生の手紙文

東京都立桜町高等女学校

1944年12月5日

勇敢な神鷲、堀元　官一様へ

戦争が日に日に激しくなってまいりました。

特別攻撃隊につきましては、決戦の地へ向かわれます神鷲に申し上げる言葉も見つからず、ただ感激の気持ちでいっぱいでおります。

憎き敵、アメリカ兵を撃退することだけを切にお願いいたします。将来のことには何の不安も感じておりません。止まるところなき神風特攻隊の精神が叩き込まれているからです。

日本帝国が勝利の栄冠を頂くその日まで私どももしっかり生産性を高め、努力してまいります。

1年3組　加藤　ひろ子

［この文章から推察すると何回か文通したものと思われる。］

（文責橋本正雄）

（少飛甲15期生会報「若鷲」32号より転載）

熊本県隈之庄飛行場にて、四式戦闘機「疾風」を背に、最後の記念写真におさまった第六十振武隊隊員。
前列左より堀元官一伍長、永田利夫伍長、田中治伍長、荒正彦伍長、若杉正喜伍長
後列左より手塚進伍長、柴田治少尉、村岡少尉、平柳芳郎少尉（隊長）、倉元利雄少尉、向井忠伍長（提供／御塩一彦氏）

碑（いしぶみ）は語る特攻隊①

田中　賢一

金石に刻んだものは永遠

書物は多数発行されても、図書館等に保管されているもの以外はやがて散逸してしまう。我々が畢生の事業と心得ている特攻戦没者の慰霊顕彰について、後世に語り伝えるのに建碑に及ぶものはない。碑及び碑文が語りかけていることだけでなく、碑が建っている土地も後の人に意識させる意義がある。

ここに順序不同だが特攻隊に係わる碑を紹介しようと思うが、関係をお持ちの会員の投稿を期待する。

都城特攻振武隊はやて

所在地　都城市都島町旧陸軍墓地
建　立　昭和52年11月15日
建立者　都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会

慰霊碑建立の由来（碑文）

昭和二十年四月　日本の命運をかけた沖縄攻防戦は凄惨熾烈をきわめた　南九州の陸海軍航空基地からは　爆弾と片道燃料だけを積み込んだ特別攻撃機が　日夜続々と出撃していた

当時　市の郊外にも東・西両飛行場があり　同年四月この基地から初めて四式戦「疾風」特別攻撃機が沖縄周辺の目標めざして南の空へ飛び立つて行つた　以来七月一日まで十七次に及ぶ出撃が行はれ　未だ少年の面差しを残す二十才前後の若い特別攻撃隊員は　戦局の好転と祖国の勝利を信じて南海の果てに散華したのである

戦後三十二年の歳月と変容によつて思出の基地一帯は当時の面影をしのぶよすがもない　時あたかも三十三回忌を迎えるに至つて　隊員の遺族や各方面に慰霊碑建立の気運が高まり　本年六月市長を会長とする奉賛会が結成された　幸にひろく内外から多額の寄付が寄せられこゝに永久平和の願をこめて　特別攻撃隊員並びに基地にまつわる殉国の士の英霊を合祀するものである

昭和五十二年十一月十五日

都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会

管理　都城市役所内
　都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会
霊会　毎年4月6日奉賛会主催で実施

都城基地出撃特攻戦没者（特攻協会発行「特別攻撃隊」に拠る）（省略）

○都城基地特攻隊出撃状況一覧表

（戦死日）	（特攻隊名）	（出撃時刻）	（特攻隊員名）
四月　六日	第一特別振武隊	一四・一〇	林　弘(少尉)　田中二也(少尉)
			友枝幹太郎(少尉)　林玄郎(少尉)
			浜谷理一(少尉)　孖谷　毅(軍曹)
			石賀兵一(伍長)　上津一紀(伍長)
四月一二日	第一特別振武隊	一三・四〇	伊藤二郎(少尉)　斉藤信雄(伍長)
四月二八日	第六一振武隊	一六・一五	岡本勇(少尉)　若杉潤二郎(少尉)
			請川房夫(伍長)　田中英男(伍長)
			長谷川三郎(伍長)　香川俊一(伍長)
			篠原穂津美(伍長)
五月　四日	第六〇振武隊	○六・〇〇	平柳芳郎(少尉)　柴田　治(少尉)
			田中　治(伍長)　永田利夫(伍長)
			吉水成明(伍長)　若杉正喜(伍長)
五月一一日	第六一振武隊	○五・五〇	橋本初由(少尉)　沖山富士雄(伍長)
			山本隆幸(伍長)
	第六〇振武隊	○六・二〇	倉元利雄(少尉)　荒　正彦(伍長)
			堀元官一(伍長)
五月二五日	第五七振武隊	○五・〇〇	伊東喜得(少尉)　戸沢吾郎(少尉)
			唐沢鉄次郎(少尉)　吉川富治(少尉)
			小林昭二(伍長)　志水　一(伍長)
			高埜　徳(伍長)　西田　久(伍長)
			山下孝之(伍長)　青木清二(伍長)
			棧　武夫(伍長)

（戦死日）	（特攻隊名）	（出撃時刻）	（特攻隊員名）
	第五八振武隊	○五・〇〇	高柳　隆(少尉)　上田　徳(少尉)
			高田光太郎(少尉)　富永　靖(少尉)
			西村潤二(少尉)　宮尾克彦(少尉)
			国吉秀俊(軍曹)　今村岩美(伍長)
			栄　瀧志(伍長)　藤山恒彰(伍長)
	第六一振武隊	○五・〇〇	新井武夫(伍長)
	第六〇振武隊	○六・五二	向井　忠(伍長)
	第五八振武隊	一六・五〇	紺田　博(少尉)
	第五九振武隊	一七・二〇	大竹俍一(少尉)　小川　栄(伍長)
			永添照彦(伍長)
六月　八日	第五九振武隊	○五・四五	野口肇太郎(少尉)　芦刈茂金(少尉)
			御宮司秀雄(少尉)　田中平一(少尉)
			近藤一一(伍長)　増岡武男(伍長)
六月二一日	第二六振武隊	一五・〇〇	相良釟郎(中尉)　木村清治(中尉)
			永島福次郎(少尉)　西宮忠雄(少尉)
六月二二日	第二七振武隊	○六・〇〇	川村　勝(中尉)　熊沢弘之(少尉)
			高橋　毅(少尉)　奈良又男(少尉)
			原田　栞(少尉)　矢口　剛(少尉)
	第一七九振武隊	○六・〇〇	金丸　享(中尉)　江副保郎(少尉)
			太田外茂行(伍長)　浜田　斉(伍長)
			松尾秀雄(伍長)
七月　一日	第一八〇振武隊	○六・一〇	新田祐夫(伍長)　宇佐美輝夫(伍長)

なお、右表の他、五月二十五日に第二六振武隊員の海津末雄（少尉）小林位（少尉）の二機が知覧より○六・五二に沖縄島南部敵艦船を目標に出撃・散華されていることを申し添える。

ここで不審に思うのは、隊号の数字が若い第二六と第二七両隊の出撃が著しく遅いことである。両隊共2月14日に明野で編成されている。その後の経過について第二六振武隊の西宮忠雄少尉が次の通り書き残している。

第二六振武隊転進記録

第二六振武隊は、第二七振部隊と一緒に二十年二月十四日明野教導飛行師団で仮編成のうえ、第五航空軍に配属の命を受けた。三月初旬、新田飛行場を離陸した同隊は、以来内地を転々として三月末、故国最後の地、都城をあとにして朝鮮、満洲、中国大陸とはるばる転進して征った。然し五月早々第六航空軍へ転属の命によって五月下旬再びこの都城に舞い戻り、六月二十一日夕刻全滅寸前の沖縄に出撃して散華した特攻隊である。この間の三ヵ月余まことにめまぐるしく次々と転進を重ねた行程を生々しく記録に留めた西宮忠雄隊員の貴重な遺筆が以下の「日常の出来事」と題する手記である。

「日常の出来事」自20年3月3日

西宮　忠雄

賤が身は例へ異国に朽ちるとも
護らでやまじ皇御国を

20年3月3日

19時10分山田駅出発　宇都宮へ待望ノ機ヲ取リニ行ク

天皇に捧げ奉りし桜花
今日靖国に咲くぞ嬉しき

3月4日

車中藤沢付近ニテBサンノ空襲ニ会フ　10時頃東京ニ着ク　数次ノ空襲ヲ受ケタ東京ノ荒廃サヲ見又之ニ対スル市民ノ態度等ヲ見　之デ此ノ戦争ヲ切抜ケ得ラレルノデアロウカト心配ニナル

暗（注、闇）ヲスル者、或ハ空襲ヲ利用シテ己ガ利得ヲ得ントスル者、之等ノ者ハ戦争ニ対シ何等ノ関心ヲ持タナイノデアラウカ　勿論之ハ一部ノ者ト思フ

一九時宇都宮着、雨ノ中ヲ家へ帰ル
一同健在ナリ

3月5日

隊長副隊長ノミ航空廠へ連絡ニ行カル　予想通リ機ハ無イラシイガ然シ思ッタヨリハ早クナル由唯、一日モ早クアラン事ヲ切望ス

幾度もめぐりて今年靖国の
春の祭りに吾も参らむ

3月7日

木村隊長以下六名（児玉、小林、原、永島、小生）新田へ行く　途中太田を通過せし時、爆撃の状況を眼の前に見、残念至極唯口惜しさで一杯だった　醜敵必滅を期す

3月8日

新田飛行場へ行く　既に機は準備しある　15時出発の予定なりしも不能木村少尉、児玉、永島、小生の4機出発す　16時30分箱根付近にて編隊を見失ふ　静岡付近にて「ガバナ」故障藤枝基地に不時着す

3月9日

14時明野へ向ケ出発ス　十五時明野着陸　接地ノ際右車輪パンク　隊長、副隊長ノ元気ナ姿ヲ見、吾モ安心ス夕方18時頃海津、青木宇都宮ヨリ到着　18時30分小林新田ヨリ到着　残ルハ中村、原ノミ千秋楼ニテ大イニ飲ム願ハクバ中村、原共ニ健在ニ到着サレヨ

3月10日

午前中、中村、原何れも到着せず原は昨日小林と同時に離陸し途中小林と別れ其の後不明　昨日潮崎附近　海中に突入せし一機ある由不安になる十三時頃悪天候を中村到着す　あと10分遅れれば既に明野は吹雪であったのに実に運が良い男　原を待つのみ　夜将校団会食あり　大貫大尉より原の死亡確実なるを聞く　嗚呼何たる悲報ぞや　敵艦轟沈の大志を抱き共に約せし君が何の誤りにて海中に突入せしか酒も全然まづし　面白くあらず

3月11日

亡き友の大志を継ぎて吾も行く
共に約せし益良夫の道

3月12日

9時副隊長以下7名先発す　離陸、空中集合共に上出来にして涙の出る程嬉しかりき　兎に角一同無事都城へ到着せん事を祈る　後に残されし者隊長以下4名　彼等の見事なる出発を見送り　しばし茫然為す所を知らず　飛行機よ　一日も早く良くなって呉れ　午後　原の遺骨を出迎ふ　原　貴様は口惜しかったらう　貴様の遺志は必ず貫徹する　松坂へ行く

3月13日

数ならぬ賤が吾が身も天皇に
捧げて悔いぬ益良雄の花

3月14日

今に見ろ醜の夷船打ち沈め
御稜威輝く国を造らむ

3月15日

此の春の花見の宴にかざりたい
空母戦艦数ある戦果

3月16日

8時25分多数の見送人達に送られつつ思ひ出のあった明野を出発す　速度計全然指示せず　編隊を組むべく懸命なり　長機は雲中突破を決意、吾々も後を追ふ　残念ながら途中　長機を見

失ひ単機になる懸命に薄雲を見付け兎に角雲上に出づべく上昇す　依然〇計不良　H二〇〇〇雲上に出づ　稍々飛行するうち穴を見付け突込む「ビハ湖」の上なり　此の頃より滑油吹き始む　大阪に向ひつつ高度を低下不時着を決意　伊丹に不時着す　9時30分　滑油パイプ取付ボルトの弛緩せしに原因す

3月17日

払暁敵の空襲あり　目標は神戸らしい　11時整備なり出発す　時に11時15分　神戸は未だに鎮火せず予定のコースをとり高松を通過す間もなくペラ空転　同時に「ガタ」と言ふ音を聞く　燃圧　滑油其の他の計器にも異常を認めず　高松飛行場に不時着を決意す　H一〇〇〇目測高きに失し場外に飛出す　機体大破す　冷静にして沈着且つ適切なる判断力は吾々空中勤務者に最も必要欠くべからざる事項なり　之を欠き皇国の興廃を決するに値する機をこはしたる事は上御一人に対し奉り又熱烈以て造ってくれたる国民に対し誠に申訳なき次第なり　早速都城に電報し再び明野本隊へ帰隊す

軽からぬ罰を思ひて夜もすがら
益良男の子は泣きに泣いたり

3月18日

11時本隊へ到着す

3月19日

明日久保田隊（注第二七振武隊）と同行都城へ出発する予定

3月20日

昼、石原に逢ふ　福岡にて飛行機をこはし本隊に戻り来しなり　同僚相あはれむの類　共に再出発を期す　18日の南九州方面のグラマンの再襲に際し吾が隊も分散し隊長、副隊長は大邱へ荒木は福岡へ其の他の行方は判明せず名木山は負傷入院して居る由

3月23日

14時明野飛行場出発　四国の中央を通り　鹿児島に到着　やがて霧島を望見　間もなく見馴れた都城飛行場に到着　副隊長殿に逢ふ　「グラマン」銃爆撃の後は実に見る影も無し　青木少尉銃撃に逢ひ残念ながら貫通され入院の由　彼には何ともなぐさめ様無し　夜千里に行く

3月24日

機分散

3月25日

27日出発の予定　整備に一日忙し　夜竹葉に行く　大いに飲む

3月26日

機を掩体内より持出し試運転実施す　異常なし　竹葉に行く　愈々最後の晩　然し明日出発と思ふとあまり飲めず　藤山隊来る　伊東も元気なり

3月27日

10時20分都城出発　途中曇天なれ共差支えなし　11時10分雁巣へ到着　空襲発令されあり　14時30分雁巣出発　一路平壌へ向ふ　小林を見失ふ　16時45分京城通過愈々平壌迄直ぐだ　然し途中雲低く残念ながら引返す　永登浦に不時着す17時20分　悪い飛行場なり

日の本の益良男の子は一筋に
唯敵艦に命中を期す

3月28日

16時頃第一飛行場より電話あり　隊長以下荒木、児玉の三名天候不良の為引返した由　永島は海州に不時着し居る

4月1日

完全とは言へぬが出発す　視度不良　11時40分離陸　視度不良にして飛行場発見し得ず　断念引返す途中偶然飛行場発見　其の時の嬉しさは又無し　隊長以下二名共健在　久保田隊長及奈良少尉に逢ふ　午後22ＦＲ寮にて飲む

4月2日

視度悪し　思ひ切り出発す　12時15分鉄道線路に添ひ北上す視度不良（前方）真下のみ見ゆ　13時平壌を発見す　4機共無事着陸　整備員も待って居た　川村少尉殿も二日前出発された由　小林も大邱より来て居れり　三根旅館に投宿す　永島来る　27日雁巣出発以来6名久し振りに合同す　大いに飲む　残留部隊は如何せしや

4月5日

平壌見物　牡丹台ニ行ク　夕方爆音聞ユ　84ラシク屋上ニ上ッテ見ル　二機来ル果シテ吾ガ隊ナリヤ　早速荒木飛行場ニ電話ス　副隊長及名木山ナリ　梅津、中村ハ陸路北京ニ向フ　青木ノ戦傷死ヲ聞ク　彼モ遂ニ一個ノ白骨ニ化ス　彼ノ心中ヤ察スルニ余リアリ　青木サゾ口惜シカロウ　然シ此ノ仇ハ必ズ吾々ガウツゾ

地下ヨリ吾々ノ命中ブリヲ見て居ッテ呉レ

4月6日

愈々明日出発ニ決ス

4月7日

14時出発、思ヒ出ノ平壌ヲ後ニス　天候ハ概ネ良シ　14・55新義州上空通過　鴨緑江ヲ渡ル　愈々満洲ナリ　16時錦州着陸　補給ヲナシ直チニ北京ニ向フ　19・00待望ノ南荘ヲ発見ス　一同無事着陸ス

4月8日

児玉少尉場外不時着ヲ聞ク　発動機不調ナリ

4月9日

団長殿ヨリ種々話アリ　本日ヨリ偕行社宿泊　酒ガ無イノハ何ヨリモ残念ナリ　兎ニ角他国ヘ来タノデアル　外

出モ万全ノ方策ヲ建テテ出ネバ危険ナリ　支那町第一印象ハ〝唯キタナイ〟支那人ノ心境ハ吾々ニハワカリ難イ

4月11日

飛行団ヘ行ク　吾々ノ所属モ決定ス　愈々又前進ナリ　種々協議シ　明朝出発ニ決定ス

4月12日

団長殿ヨリ御別レノ盃ヲ戴キ多数ノ見送人ニ送ラレ出発ニ決セシモ小官ノ機、電気系統悪ク出発不能

4月14日

連日ノ整備員ノ夜間作業効ヲ奏シ故障モ直ル　7・30南荘ヲ出発一路済南ニ出発ス　連日活躍シテ呉レタ整備兵ニハ何トモオ礼ノ言ヒ様無シ　9・30済南飛行場ニ到着ス滑圧下リ不時着直チニ航空廠ヘ　本日午後出発予定ナリシモ以上ノ理由ニテ出発不能　済南ニ一泊ス

4月15日

7時30分済南飛行場出発一路南京ヘ10・00南京大校飛行場ヘ到着ス　隊長以下全員健在ナリ

軍司令官ヨリ御注意　1、戦隊トノ強力ナル団結　2、精神方面及特攻ノ訓練　3、寸暇ヲ惜シミテ研究努力セヨ　4、衛生ニ注意セヨ

17・00偕行社ニ落着ク

4月16日

愈々本日ヨリ小生モ訓練ニ参加ス　朝6・00出発　宿舎ニ帰投20・00ナリ

4月18日

朝カラ雨　久方振リニ家ヘモ手紙ヲ出ス　南京ノ町ヲ散歩ス　物価ガ高ク手ノ出シ様ナシ　映画ヲ見ル

4月19日

小隊教練　隊形確実ナラズ　隊形ハ戦力ナリ如何ナル機動ニモ常ニ確実ナル隊形ヲ保持セヨ

偕行社ニ勤ム一宇都宮人ニ会フ　共ニ遠ク祖国ヲ離レ来タ此ノ地デ同郷人ニ逢フ事ハ非常ニナツカシイ　坂上参謀ヨリ現時局ノ大観及ビ吾々ノ任務ノ重大性ニ就テ話シアリ　吾々ハ神州ノ不滅ヲ信ジ唯々自己ノ任務ニ邁進スレバ良イノダ

4月20日

慰問演芸アリ　約束ノ時間ヨリ40分モ遅レテ始メラレタノデ始メハ不愉快ナリシガ彼女等ノ舞台上ノ真剣ナ演技ヲ見、又遠ク祖国ヲ離レ吾々将兵ノ為日夜ノ疲労ヲ乗リ切ッテ慰問ヲ続ケテ呉レル彼等ニ感謝ノ念ヲ生ズ　彼等トテ身ヲ挺シ第一線迄出テ居ルノダ

4月21日

午後急降下爆撃実施　児玉　小林本日陸路ニテ到着ス　隊員一同顔ヲ合ハシタ訳ダ　只後ハ飛行機ヲ待ツノミ

4月23日

先日ノ腹痛モ全快　再ビ演習ニ参加

5月1日

第六航空軍付ノ内命アル　愈々沖縄戦局モ楽観ヲ許サズ　吾々モ亦之ニ参加セントス　折角南京迄来ルモ上司ノ命トアラバ致シ方ナシ　然レ共之ハ神機到来ヲ意味スルモノト確信ス

5月2日

出発の命ヲ待ツ　戦隊壮行会アリ隊長殿本日ヨリ入院ス　其ノ病状香シカラズ　只快方ニ向フヲ願フ

5月6日

愈々本日出発ニ決ス　10時35分軍司令官閣下ノ訓辞アリ愈々出発　小生ノ機ノミ未ダ始動シアラズ残念ナガラ出発不能　隊員ノ出発ヲ見送リシモ後ニ残サレタル者ノ感慨ヤ如何　只涙アルノミ　然シ事故ヲ未然ニ発見シ得タル事ハ不幸中ノ幸ナリ

5月25日

福岡ヘ到着　即日当地ニ向フ

二六、二七の両隊は編成以来同一行動をとったものと想像する。二七振武隊原田栞少尉の遺詠「野畔の草召し出されて桜哉」の書は知覧の特攻会館に展示されており、これについて「特攻おばさんの回想」という書物には次の通り載っている。特攻隊になってから紆余曲折四ヶ月余、その間の心境を想像すれば、次の一文も又先の西宮少尉の遺稿も胸迫るものがある。

遺詠

野畔（あぜ）の草召し出されて桜哉

今年の二月十八日、九十六歳で亡くなられた東大寺長老・第二百三世別当で、元華厳宗管長の狭川明俊大僧正が、五年前に知覧を訪れたとき、特攻平和会館に展示してある原田少尉のこの遺詠の前に五分ほど立ち尽くされました。お付きの人に筆と紙を持ってこさせると、この句を書きとりながら「これが二十歳やそこらで、よめる俳句か。書ける字か」とつぶやかれました。私は俳句のことはわかりませんが、あのとき大僧正はたしか俳人と伺いました。これほどの先生を感心させる俳句を詠む人が、特攻隊員におられたのを初めて知りました。

この遺詠は、特攻生き残りで全国を行脚している板津忠正さんという方が、熊本県菊池郡西合志町の剣道師範緒方勲さん（九一）、方にあったのを、五十二年に捜し出しました。緒方さんの道場は、二十年四月から六月までの間、知覧から出撃する特攻隊員が一時、待機する宿舎にあてられていました。道

場には、美濃紙を束ねた真っ白い冊子が用意され、隊員の方々が遺書を書き残しました。

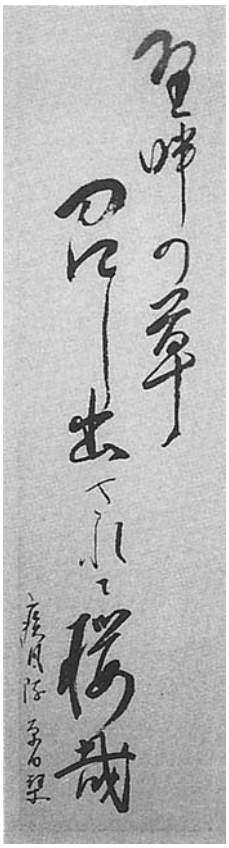
緒方さんは、板津さんにこの冊子を託し、その大半は全国に散らばる遺族に届けられました。原田少尉の遺詠は遺族の方が「うちは写しでいいから」と真筆を板津さんに提供、特攻平和会館に展示されることになりました。

原田さんが出撃されるころは、B29の飛来がひんぱんになりましてね。知覧飛行場も爆撃でやられて特攻機が飛べない状態でした。だから都城から飛び立たれたのでしょうね。

会館には、第二十七振武隊の絶筆集にあった原田さんの「征くものは気易い　残るものの心情にはホトトギスの慟哭がある　情は涙である　そして愛は切ない　されど忠はさらに至上だ　祖国よ永久に幸あれ　幸あれ」の遺書も展示されています。

原田少尉は兄二人、姉一人の末っ子。原田少尉だけが大学まで進み、家族の期待も大きかった。菊池市の実家で食堂を経営している次兄の晴義さん（七五）は「本人は外交官になりたいといっとりましたが、中学の弁論大会で優勝するなど、弁もたったので、生きていれば政治家になったでしょう」としのぶ。晴義さんは昨年五月の知覧特攻慰霊祭に初めて出席、トメさんにも会った。

原田栞少尉　早大卒。特操1期生、第27振武隊員。20年6月22日、都城東飛行場から出撃。26歳。



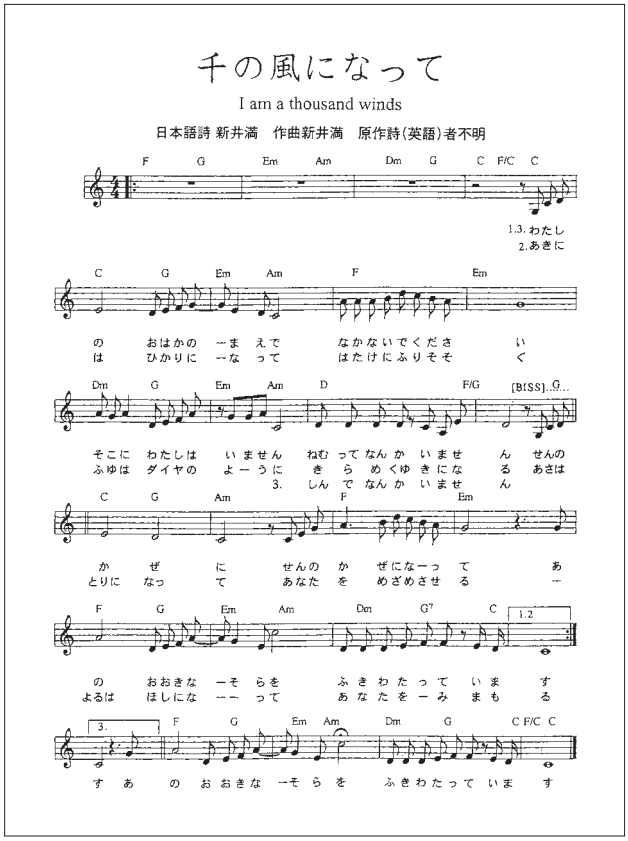
原田少尉の遺詠

『千の風になって』

日本語訳詞・作曲　新井　満

私のお墓の前で／泣かないでください
そこに私はいません／眠ってなんかいません
千の風に／千の風になって／あの大きな空を／吹きわたっています
秋には光になって／畑にふりそそぐ
冬はダイヤのように／きらめく雪になる
朝は鳥になって／あなたを目覚めさせる
夜は星になって／あなたを見守る

私のお墓の前で／泣かないでください
そこに私はいません／死んでなんかいません
千の風に／千の風になって
あの大きな空を／吹きわたっています
千の風に／千の風になって
あの大きな空を／吹きわたっています
あの大きな空を／吹きわたっています



都城・はやて慰霊祭報告

理事長　菅原　道熙

4月6日、満開の桜、花曇りで無風に助けられたが、近来にない底冷えのする中、例年のごとく都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭が、10時から陸軍墓地の「はやて慰霊碑」前で挙行された。

高い石段を昇り切って、桜並木越しに式場を眺めやると、天幕の数が従来より少なくなっていることに気付いた。事実、57期、少飛生共に今年は出席者が減って、今までは、それぞれが碑前で献唱していたのを、両者合同で、「加藤隼戦闘隊・同期の桜・海行かば」の三曲を碑に捧げた。

第60振武隊・永田利夫之命の令弟、弘氏（昭和20年1月生）が遺族代表で挨拶をされたが、年々遺族の出席者が減ってきて、いつまで慰霊祭に出席できるのか、と危惧の念を表明された。更に、永田少尉は、18歳年下の弟の顔を見ることなく出撃することになり、同じ位の男の赤子を抱いて撮った写真が残されているという。弘氏は、兄上はその赤子を自分の身代わりと考えた上でのことであったろう、と自分も全く記憶にない兄上を偲んでおられた。

出席者が減少することは、各地の慰霊祭、慰霊団体に共通する命題で、これから、それぞれがどう対処していくのか、その生い立ちや歴史によって一様ではないであろうが、当協会自体も他人事ではなく、対岸の火災視は許されない。

本号から各地の特攻碑の紹介記事が連載されることになったが、その第1号として「はやて慰霊碑」が取り上げられている。そこで協会は、その部分の別刷りに入会のしおりを添えて、慰霊祭出席者全員に渡すよう手配して、閉式直後に、小職が、都城市民が年々厳粛かつ盛大に慰霊祭を催行してこられたことに対して、心からの敬意と謝意を捧げ、多くの市民が当協会に入会されることを要望し、互いに手を携えて特攻の史実と、その礎になっている日本人の心を永久（とわ）に語り継いで行くことに全力を傾注したい、と挨拶し、万感交々胸に迫るのを覚えつつ、時折舞い散る桜花の中、会場を後にした。

フィリピン・ルソン島・マバラカットの神風特攻隊慰霊祭への参加について

理事長

平成18年度第2回理事会・評議員会報告（「特攻」70号・63頁）で、マバラカットの慰霊祭へ毎年参加することを考慮中、とお知らせ致しましたが、今後毎年、協会代表として正・副2名を、10月25日早朝クラーク特区内、リリーヒルの観音立像前で挙行される、神風特別攻撃隊発進並びに世界平和都市宣言記念式典と、引き続いて行われる東マバラカット飛行場跡の、神風特別攻撃隊記念碑前での慰霊式に派遣することに致しました。

従来、知覧・鹿屋等我が国内で、地元の主催で行われている慰霊祭には、協会から代表を派遣してきましたが、これからは、マバラカットを同じ範疇の慰霊祭として対処することになります。マバラカットが、我が国の特攻作戦初発動の地であり、かつ、慰霊碑が地元の人々の意志で建立され、毎年盛大な慰霊祭が地元の人々によって企画され、催行されていることが、我が国では未だ必ずしも周知されていないことは、極めて残念なことであります。

会員各位におかれましては「百聞は一見に如かず」で、機会をとらえて、現地慰霊祭に参加されることをお薦めする次第であります。

協会代表と同行を希望される方は、直接左記旅行社へお申し込み下さい。

㈱かもめ　〒105－0003
東京都港区西新橋一－一六－五
コニシビル3階　担当者　深澤達雄
TEL　03－3506－0747
FAX　03－3506－8536

平成18年度事業報告

一　慰霊事業

1　第27回陸海軍特攻隊合同慰霊祭

平成18年3月30日正午から靖國神社で挙行した。参加者は、来賓35名、遺族34名、会員等220名であった。

慰霊祭終了後、市ヶ谷の私学会館アルカディアにおいて、協会の年次総会を開催し、平成17年度事業及び収支決算に関する報告が行われた。

2　第55回特攻平和観音年次法要

平成18年9月23日、世田谷山観音寺において、同寺主催の年次法要が営まれた。参加者は、来賓25名、遺族47名、会員等276名であった。

3　神風特攻発進62周年慰霊祭

平成18年10月25日、フィリピン・ルソン島のマバラカット市で挙行された慰霊祭に慰霊団（25名）を編成して参列した。以後コレヒドール、モンテンルパ、セブ、レイテの各地を慰霊巡拝して10月29日に帰国した。

4　各地慰霊祭への協賛

ア　代表者派遣

	慰霊祭名	場　所	参加者
3月25日	震洋会	靖國神社	藤田理事
4月4日	予科練雄飛会	靖國神社	小倉理事
4月6日	都城特攻隊	都城市	菅原理事長
4月7日	第二艦隊	枕崎市	藤田理事
4月8日	鹿屋特攻隊	鹿屋市	藤田理事
4月9日	万世特攻隊	南さつま市	菅原理事長
4月22日	春季例大祭	靖國神社	菅原理事長
5月3日	知覧特攻隊	知覧町	菅原理事長
5月29日	春季慰霊祭	千鳥ヶ淵墓苑	菅原理事長
6月10日	義烈空挺隊	沖縄・摩文仁	杉山理事
7月7日	慰霊協	靖國神社	菅原理事長
10月6日	明野忠魂塔	陸自明野駐屯地	栗原理事
10月18日	秋季例大祭	靖國神社	菅原理事長
10月18日	秋季慰霊祭	千鳥ヶ淵墓苑	菅原理事長
10月22日	海原会	靖國神社	小倉理事
11月12日	若潮会	靖國神社	菅原理事長

イ　供花料送達

4月10日	荒鷲之碑慰霊祭	空自熊谷基地	
9月7日	原ノ町飛行場戦没者慰霊祭	原ノ町	
10月8日	水戸つばさの塔慰霊祭	ひたちなか市	
10月15日	串良空出撃者追悼式	鹿屋市串良	

二　その他の事業

1　機関誌「特攻」第66号（同時に別冊「フィリピン慰霊巡拝旅行記録」）～第69号を発行、会員その他に配布した。

2　CD「あゝ特攻」（日本人の心を伝える会）を3月末から発売を開始した。年内売上が約3000枚に達したので、目的とする、全国護国神社に特攻勇士之像を奉納するため、具体的な準備を開始した。

三　会員の動向

入会者153名に対し、退会者は393名で240名の減少であった。これにより、年度末の会員数は、3292名である。細部内訳等は次のとおりである。

1　内訳

	旧軍	自衛官	一般	計
入会者	47	19	87	153
退会者	337	0	56	393

2　理由

死亡又は本人申告	125
転居先不明	9
2年間会費未納	259

3　構成比率

旧　軍	2829		85・9％
自衛官	29		0・9％
一　般	434		13・2％

以　上

収　支　計　算　書

（平成18年１月１日から平成18年12月31日まで）
（第14年度）

（単位：円）

科　　目	予算額	決算額	差　額	備　考
Ⅰ 収入の部				
1 年会費	9,300,000	8,336,000	964,000	
2 基本財産運用	4,700,000	4,719,000	−19,000	
3 特別会費	4,800,000	3,936,000	864,000	
4 寄付金	1,300,000	2,105,000	−805,000	
6 懇親会費	1,300,000	1,116,000	184,000	
7 出版事業	1,100,000	5,696,225	−4,596,225	CD「あゝ特攻」売上増
8 雑収入	100,000	63,445	36,555	
当期収入合計（A）	22,600,000	25,971,670	−3,371,670	
前期繰越収支差額	25,389,000	26,555,341	−1,166,341	
収入合計（B）	47,989,000	52,527,011	−4,538,011	
Ⅱ 支出の部				
1 管理費				
人件費	6,370,000	6,768,569	−398,569	
旅費交通費	200,000	174,070	25,930	
通信費	170,000	185,592	−15,592	
会議費	400,000	280,020	119,980	
事務所経費	810,000	807,600	2,400	
消耗品雑費	450,000	581,922	−131,922	
リース料	200,000	201,600	−1,600	
租税公課	70,000	70,000	0	
予備費	150,000	0	150,000	
2 事業費				
慰霊祭等事業費	6,500,000	6,524,164	−24,164	
史実調査研究費	100,000	0	100,000	
資料収集費	100,000	11,130	88,870	
出版事業費	20,000	3,583,863	−3,563,863	CD仕入れ増
広報活動費	4,700,000	4,980,363	−280,363	
予備費	−400,000	0	0	慰霊祭等に組み入れ
当期支出合計（C）	20,240,000	24,168,893	−3,928,893	
当期収支差額（A）−（C）	2,360,000	1,802,777	557,223	
次期繰越収支差額（B）−（C）	27,749,000	28,358,118	−608,118	

（財）特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の平成18年度の計算書類について監査した結果適正であることを認めます。

平成19年２月７日

監　事　　伊集院　雅　英　㊞

監　事　　志　賀　昭　夫　㊞

寄附者御芳名（敬称略）

（平成19年1月～3月・単位千円）

五〇　大久保　隆
五〇　瀬島　龍三
二〇　伊藤　直之
二〇　大穂　利武
二〇　福井　寛治
一九　町田　乾郎
一七　新井　有治
一五　山根　秋男
一三　降矢　達男
一二　山下　一助
一〇　飯岡　哲子
一〇　板垣　正
一〇　片岡　重子
一〇　上尾　侑子
一〇　小島　健三
一〇　清水　芳人
一〇　武田　慶司
一〇　丹波　等
一〇　廿日出昭信
一〇　日比野哲丈
一〇　松木　清男
一〇　三井　孝昭
一〇　水戸つばさの塔奉賛会
一〇　菅原　道之
一〇　森田　稔
一〇　吉峰　泰夫
九　秋葉　哲郎
八　岩崎　禮三
七　畝田謹次郎
七　加藤　貞子
七　川村恵美子
七　河野　三郎
七　早田　亮彦
七　平野　三郎
七　水谷　幸正
七　門司　親徳
七　吉柳きよ子
七　渡部　利久
五　赤柴元五郎
五　有川　信男
五　市川　雄一
五　市場　敏司
五　入江　良男
五　岩崎香明二
五　岩月　仁志
五　岩宮　満
五　臼田　智子
五　岡田　豊
五　岡山ヨシ子
五　奥平　正人
五　笠松　澄子
五　上村田佳子
五　菊池　国光
五　木山　正義
五　香西　隆士
五　駒場剛太郎
五　酒見　奎一
五　佐田　寅夫
五　佐藤　博志
五　島崎　政彦
五　白石　正
五　杉本　良員
五　鈴木　敏
五　高松　績匡
五　高山　友二
五　田口　光男
五　田島　幸男
五　多田　龍二
五　津覇　実雄
五　徳田　外治
五　豊岡　久
五　中村　好之
五　名執　肇
五　畑谷　輝彦
五　花谷　正
五　春山　善良
五　福田　充
五　福原　榮夫
五　藤森　正保
五　堀江　正夫
五　宮永　笑子
五　村田　俊夫
五　森　可成
五　山田　治男
五　横山友三郎
五　渡部　市郎
四　小貫　達雄
四　上村　貞蔵
四　杉山　蕃
四　藤田　幸生
四　三浦　功雄
四　森田　由夫
四　山口　二郎
三　新　忠信
三　岡嵜　幸平
三　恩田　賢寿
三　里崎　雪
三　志村千恵子
三　高橋　房之
三　谷尾　侃
三　塚越　朝紀
三　椿　孝則
三　冨澤　康之
三　中村　竹雄
三　深川　巌
三　松尾　知男
三　湯澤　一枝
二　相部　一正
二　青山　一正
二　阿部　敏行
二　網野　泰
二　綾部　徳
二　飯島　厚
二　石井　敏子
二　井出　隆夫
二　伊藤　正康
二　伊藤　利一
二　岩井　良平
二　岩崎　安
二　岩田　信一
二　上原　富次
二　うすい日出男
二　梅田　春雄
二　大久保武司
二　大塚　喜衛
二　大手　良之
二　奥山　雄三
二　小倉　猛夫
二　川井　孝輔
二　河島　慶明
二　川田　信雄
二　川人　明美
二　菊地　昭夫
二　菊地　洋
二　桑原アヤ子
二　腰塚　守正
二　小島　勤
二　小宮山玄二
二　小山　英一
二　斉田　孝
二　齊藤　忠信
二　坂本　康子
二　佐久間恒和
二　佐々木澤人
二　澤田真奈美
二　信太　正好
二　下出　忍
二　朱谷　真人
二　白鳥　常男
二　関根　賢治
二　髙田　源二
二　高梨　久義
二　高橋　威彦
二　高橋　光弘
二　田栗　薫
二　田村　力
二　辻　久雄
二　筒井　澄
二　常井成一郎
二　長坂　時男
二　中瀬　操
二　中村　栄造
二　中山　石
二　難波　寿邦
二　新保　宣彦
二　西川　光男
二　服部　武志
二　花塚真知子
二　濱田　芳一
二　原田　誠雄
二　樋口　秀二
二　日高　靖可
二　平岡　萬平
二　廣田　正
二　深井　正昭
二　福島　俊二
二　福田　春二
二　藤井　達矢
二　藤井　宏
二　藤田　武
二　藤田　瑞悟
二　布施木　昭
二　星埜　清滋
二　牧野　道子
二　松尾　弘
二　松永　行雄
二　松本　太郎
二　三浦　晨平
二　三宅　浅男
二　宮崎喜一郎
二　村田幸之進
二　村中　一男
二　森　力男
二　森井　政義
二　森ノ内敏巳
二　安済美智二
二　山上　薫
二　山田　清
二　山本　健雄
二　吉川　潛
二　吉原　利徳
二　渡辺　悦次
二　渡辺　隆
一三呉　正男
一　淡谷　秀一
一　飯田　雍子
一　大川　吉昭
一　河野　光揚
一　川瀬　常道
一　神崎　夢現
一　木下　秀明
一　倉科　欣司
一　坂田　博
一　佐々木ひろ子
一　鈴木　正敏
一　千田洋之助
一　立石　昌正
一　田村　光圀
一　中村　猛
一　根木　要
一　根木　東洋
一　日笠　泰男
一　廣嶋　文武
一　町田　義雄
一　渡辺　清規
〇七山崎　重藏
〇五時本　文雄

御芳志誠に有り難うございました。

新入会員名簿（敬称略）

（平成19年1月1日～3月31日）

福島　高橋圭子　**埼玉**　大堰幹雄　山口武夫　米山　晃　**千葉**　板倉義利　うすい日出男　岡本　勉　西村純一　**東京**　池上文人　市川　理　内山弘隆　及川昌彦　鎌田　舞　是安宏昭　坂下淳子　鈴木康陽　高田　樹　平井脩博　福井兵三郎　堀　百夏　山中利晃　**神奈川**　坂川武英　長岡暢俊　**山梨**　降矢達男　**静岡**　鈴木一則　**愛知**　岡本登　**大阪**　安本雄史　山本和泉　**奈良**　北川　誠　**山口**　松室将幸　森下　勇（18・11）　神奈川　衣笠　駿雄（19・2）　竹原　光雄（18・8）　藤田　武（18・11）　山口千鶴子（18・　）　徳島　松本　義雄（18・9）　長崎　伊藤　保彦（18・11）　崎村　茂（18・8）　大分　南　實（19・2）

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

北海道　山田　傳（17・11）　栃木　三品　武雄（18・5）　埼玉　西内　恒雄（18・10）　東京　岩坪　博秀（19・1）　古井　貞方（19・2）　生出　寿（18・12）　長村　昭三（18・12）　河井　芳男（19・3）　成川　一雄（19・2）　増田　義晴（18・9）

会報「特攻」第70号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

（訂正箇所）

2頁　表題及び柱
誤　「元旦や糧なき春の戦」
正　「元旦や糧なき春の勝戦」

7頁　4段目
誤　吉野・古野　繁実中尉
正　吉野　繁実中尉

23頁　1段目参加者名簿
誤　杉山　茂
正　杉山　蕃
誤　奈倉・名倉　浩（少飛6期）
正　奈倉　浩（少飛7期）

ご挨拶とお願い

この度、田中賢一大先輩（陸士52期）の後を受けて、当協議会の会報『特攻』の編集業務に携わることになりました飯田正能（いいだまさよし）と申します。陸士61期（大幼46期）の若輩、と申しましても齢既に79歳の老兵であります。しかも、この種編集業務については、ずぶの素人、実戦の経験は皆無、戦史の研究極めて未熟、加えて浅薄非才の身、大先輩が築き上げてこられた言霊の会誌とも言うべきこの伝統ある『特攻』の編集に如何程の力を発揮できるか、誠に覚束ない次第でありますが、次の有能な若い後継者の出現に期待しつつ、できる限り頑張って、中継ぎの責任を果たしたいと考えておりますので、何分よろしくご支援の程お願い申し上げます。

つきましては、会報『特攻』を年4回恒常的に発行するには、会員（団体・個人）の皆様からの情報のご提供、記事のご投稿が多く寄せられることが必要でありますので、各団体で発行されている会報、機関誌等のご提供をお願いすると共に、慰霊祭を始め、各種行事等に関する記事がありましたら、団体、個人にかかわらず（短い感想文等でも結構です）、当協議会事務局宛にご投稿くださるよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、ご投稿に際しては、次の点にご留意いただければ、幸いであります。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は当協議会事務局宛としてください。

〒105―0001　東京都港区虎ノ門3―6―8　第6森ビル5階
（財）特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
会事務局
電話　03―3432―1090
FAX　03―3432―5567